

2022 年度

学位論文

# 幕末明治期の漢字表記についての研究

清泉女子大学大学院

人文科学研究科人文学専攻

内田 久美子

# 目次

はじめに .....	1
------------	---

I 『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』における相違点について .....	4
--	---

## はじめに

1 『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の書誌と構成	
1-1 『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の書誌	
1-2 『漢語字類』の構成と体裁	
1-3 『[校正／増補] 漢語字類』の構成と体裁	
1-4 先行研究	
1-4-1 松井利彦（1990）による調査と指摘	
1-4-2 今野真二（2011）による指摘	
2 『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の項目の対照	
2-1 項目の対照と分析	
2-2 A「削除項目」B「増補項目」C「共通項目」の分類と整理	
3 『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の対照結果の分析	
3-1 「語釈」の相違点	
3-2 a 「語釈」全体が異なる項目	
3-3 b 「語釈」の一部が異なる項目	
3-4 c 「語釈」が増加、または減少している項目	
3-5 分析のまとめ	
4 『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』索引の漢字	
おわりに	

## Ⅱ 『[校正／増補] 漢語字類』における漢字字形のバリエーションについて…… 40

はじめに

### 0 「Ⅱ」で用いる用語について

### 1 『[校正／増補] 漢語字類』の書誌と構成

#### 1-1 『[校正／増補] 漢語字類』の書誌

#### 1-2 『[校正／増補] 漢語字類』の構成と体裁

##### 1-2-1 「目次」について

##### 1-2-2 「辞書部分」について

### 2 先行研究

### 3 『[校正／増補] 漢語字類』の字形の分析

#### 3-1 「目次」欄上の組

#### 3-2 「辞書部分」の漢字列（行草部分）にみられる字形

### 4 『[校正／増補] 漢語字類』内部の字形

おわりに

## Ⅲ 『[校正／増補] 漢語字類』 「目次」欄上の組の漢字字形の位置付け－『太政官日誌』との対照を通して－…… 58

はじめに

### 0 用語の定義

### 1 『[校正／増補] 漢語字類』の書誌と構成

### 2 『太政官日誌』の書誌

### 3 『[校正／増補] 漢語字類』の組と『太政官日誌』の対照

#### 3-1 調査方法

#### 3-2 調査結果と考察

#### 3-3 組の字形の位置づけに関する考察

おわりに

#### IV 『玉石童子訓』の書体と振仮名について—江戸期整版本の表記体考察のために— 73

はじめに

- 1 用語の定義と本章の構成
- 2 『玉石童子訓』の書誌と構成
- 3 「玉石童子訓」版面の書体調査
- 4 「玉石童子訓」振仮名が施されていない漢字列の調査
- 5 「玉石童子訓」の「事」の実現形の調査
- 6 振仮名の有無と書体との関わりについて

おわりに

#### V 「総ルビ」表記体における書体と振仮名の機能について—『夢想兵衛胡蝶物語』と『玉石童子訓』を通して— ..... 91

はじめに

- 1 用語の定義
- 2 『夢想兵衛胡蝶物語』と『玉石童子訓』の書誌と版面
- 3 「夢想兵衛胡蝶物語」と「玉石童子訓」の振仮名の調査
  - 3-1 「夢想兵衛胡蝶物語」の振仮名
  - 3-2 「玉石童子訓」の振仮名
- 4 「振仮名」と「書体」の関係性についての分析と考察

おわりに

#### おわりに ..... 120

## はじめに

本論文は江戸時代後期から明治時代初期の資料をもとにして、当該時期の「表記体」と「漢字」について調査することを目的としている。本論文ではテキストの種類を「辞書体資料」と「非辞書体資料」に区別する。「辞書体資料」は辞書や目録のように手を加えて編纂された二次的な資料、「非辞書体資料」はそれ以外の一次的な資料を示す。本論文の「Ⅰ」「Ⅱ」「Ⅲ」章では「辞書体資料」である漢語辞書『[校正／増補] 漢語字類』（[校正／増補]は割書きを表す）と『漢語字類』を中心に扱い、「Ⅳ」「Ⅴ」章では「非辞書体資料」である『玉石童子訓』と『夢想兵衛胡蝶物語』の読本を扱う。

前半部で扱う『[校正／増補] 漢語字類』と『漢語字類』は、明治時代初期に編纂された整版印刷の漢語辞書である。両辞書は「目次」に見出し漢字のいわゆる「異体字」に関する注記が掲載されている。ある時期の漢字字体・字形について見ていくためには、当該時期の「異体字」の判断に基づいた調査が必要になると考える。その上で『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』は漢字字体・字形について観察、考察するための条件を備えた文献であると考ええる。

後半部で扱う『玉石童子訓』と『夢想兵衛胡蝶物語』は、江戸時代後期に刊行された整版印刷の読本である。どちらもいわゆる「総ルビ」の表記体の資料であり、版面上の大半の漢字列には振仮名が施されている。しかし、その中には少数の振仮名の施されていない漢字列が確認できる。「総ルビ」の表記体を選択しているテキスト上では、例外的にも見える漢字列が、表記体のシステムの中でどのように機能しているのかを調査する。

「Ⅰ『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』における相違点について」では、明治初期に刊行された漢語辞書である『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』を取り上げて、辞書の項目の対照と、索引の注記についての調査をおこなう。『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』は同じ人物によって編纂された漢語辞書であるが、『漢語字類』に手を入れるかたちで『[校正／増補] 漢語字類』が編纂されてきたと考えられている。この二つの辞書を対照することによって、両辞書の間にどのような違いがあるのかを調査する。本章では、はじめに「項目」や「語釈」についての対照をおこなうが、これらの調査は、「Ⅰ」の後半と「Ⅱ」「Ⅲ」で『[校正／増補] 漢語字類』の漢字の「字体・字形」について調査するにあたり、辞書の内部構造について概観するための意味合いがある。二つの辞書の項目を対照した結果は、両辞書に共通して見られる項目（「共通項目」）、『[校正／増補] 漢語字

類』では削除されている項目（「削除項目」）、『[校正／増補] 漢語字類』で増補されている項目（「増補項目」）、の三種類に分けられる。このうちの「共通して見られる項目」の「語釈」について具体的な例を取り上げながら、両辞書の記述の変更点を分析する。

索引の注記についての調査では、『漢語字類』の「索引」、『[校正／増補] 漢語字類』の「目次」に置かれている漢字の注記に注目する。両辞書の索引は、見出し語の一字目の漢字にいわゆる「異体字」や「通用字」がある場合に、「両ニ同シ」「徼ト通ス」（『漢語字類』）や、「両兩同」「叫叫俗」「无無通」（『[校正／増補] 漢語字類』）のような形の注記を載せている。本章では両辞書の注記にどのような漢字が掲載されているのか例をあげて考察する。

「Ⅱ『[校正／増補] 漢語字類』における漢字字形のバリエーションについて」では、『[校正／増補] 漢語字類』の「目次」欄上に掲載されている「異体字」の漢字の「組」について扱う。『[校正／増補] 漢語字類』の「目次」の欄上には「功功同」のように「AA' 同」という形式で、同義であるが「かたち」が異なる漢字、いわゆる「異体字」の対応関係を載せている。「組」の中の1字形が「目次」匡郭内に頭字として立てられている。本章では、この「目次」欄上の組」に関係して二つの調査をおこなう。一つ目の調査では「目次」欄上の組」に挙げられている漢字の組を、漢字の字形を構成するパーツに注目して分類を試みる。二つ目の調査では、「目次」欄上の組」と「目次」匡郭内の頭字、「辞書本文の「項目」に用いられている漢字」の三か所に見られる漢字の字形・字体を取り上げ、各箇所を確認できる漢字字形の分析をおこなう。この調査を通して、『[校正／増補] 漢語字類』の漢字字形・字体のバリエーションについて考察する。

「Ⅲ『[校正／増補] 漢語字類』「目次」欄上の組の漢字字形の位置付け－『太政官日誌』との対照を通して－」では、「Ⅱ」で扱った『[校正／増補] 漢語字類』と、近い時期に刊行されていた『太政官日誌』との対照をおこなう。「辞書体資料」である『[校正／増補] 漢語字類』の「目次」欄上の組」について、「非辞書体資料」の『太政官日誌』での出現状況を調査し、当該時期における「目次」欄上の組」がどのように「非辞書体資料」に使われているかを探ることを目的とする。まず、『太政官日誌』の書誌を整理し、本論文で扱う異なる版本による二種類のテキストについて説明する。それをおさえた上で、「目次」欄上の組」にあげられているどちらの漢字の「かたち」が『太政官日誌』で用いられているのか、本文の使用箇所を調査する。

「Ⅳ『玉石童子訓』の書体と振仮名について－江戸期整版本の表記体考察のために－」では、江戸時代後期に刊行された読本『玉石童子訓』のテキストを用いて、当該時期の整

版印刷本における表記体についての調査をおこなう。『玉石童子訓』の版面は大半の漢字列に振仮名が施されている、いわゆる「総ルビ」の表記体のテキストである。しかし、少数の振仮名の施されていない漢字列も確認できる。一つ目の調査では、版面上の振仮名の施されていない漢字列を抜き出し、どのような傾向があるかを概観する。その結果、振仮名の施されていない漢字列は大半が「事」「也」「給」「候」であり、すべて「草書体」の字形で印刷されていることが明らかになった。振仮名の施されていない漢字列の種類と書体に傾向があることが確認できる。二つ目の調査では、版面上の「事」字の出現箇所注目し、「振仮名」の有無と「書体」のあらわれ方を調査する。これらの調査を通して、「振仮名」と「書体」の関係性を明らかにする。

「Ⅴ「総ルビ」表記体における書体と振仮名の機能について—『夢想兵衛胡蝶物語』と『玉石童子訓』を通して—」では『玉石童子訓』と、同じく「総ルビ」表記体である『夢想兵衛胡蝶物語』のテキストを扱う。振仮名が施されていない漢字列を手掛かりとして、「振仮名」と「書体」の関係性を調査し、「総ルビ」表記体のシステムについて考える。「総ルビ」を「テキスト全体の語形を振仮名によって示す」表記体であるとする、そのような表記体を選択しながら、両テキストの間には振仮名の施されていない漢字列が存在することになる。これらの「例外的」にも見える漢字列の一群は、「総ルビ」表記体の中でどのように機能しているのかを考察し、「総ルビ」のシステムの内実について明らかにする。

## I 『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』における相違点について

### はじめに

『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』は両辞書ともに明治時代初期に刊行された漢語辞書である。（[校正／増補]は割書きを表す。）『[校正／増補] 漢語字類』は『漢語字類』に手を入れるかたちで編纂されたといわれている。本章では、同一人物によって編纂された両辞書を対照し、得られる知見についてまとめることを目的とする。調査は項目の語釈にみられる相違点の分析と考察と、索引部分に掲載されている異体字についての注記についての調査をおこなう。前者の調査では辞書の構造と編纂過程、後者の調査では辞書内の注記をもとにした当該時期の「異体字」の整理を試みる。特に「異体字」については「Ⅱ」「Ⅲ」につながる調査であり、本章ではこれらの辞書にみられる「異体字」の注記について整理し、「Ⅱ」「Ⅲ」では注記をもとにして「異体字」という事象の内部構造について明らかにすることを試みる。漢語辞書における「異体字」の注記については従来の研究では注目されることがなかったが、このようなテキストを用いて「異体字」の関係にある漢字を調査することにより、当該時期の認識に基づいた体系的な調査が可能になると考える。

「1. 『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の書誌と構成」では『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』<sup>(1)</sup>の書誌と辞書の構成、本文の体裁について整理する。そのあとに先行研究における言説を確認する。『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の編纂過程についてはこれまでに山田忠雄(1981)<sup>(2)</sup>や松井利彦(1990)<sup>(3)</sup>、今野真二(2011)<sup>(4)</sup>によって研究がされている。これらの先行研究をふまえて「2. 『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の項目の対照」では両辞書の項目を対照し、『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の間にどのような「相違点」があるのかを明らかにする。「項目」の「相違点」として、両辞書の項目を「両辞書に見られる項目」、「『漢語字類』のみに見られる項目」、「『[校正／増補] 漢語字類』のみに見られる項目」に分類する。その上で、「両辞書に見られる項目」に注目し、「3. 『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の対照結果の分析」では、「両辞書に見られる項目」の「語釈」を対照し、両辞書間での「相違点」について分析と考察をおこなう。また、「4. 『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』索引の漢字」では、両辞書の索引部分に載せられた漢字についての注記をみていく。



## 1. 『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の書誌と構成

### 1-1. 『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の書誌

『漢語字類』は1869（明治2）年に刊行された漢語辞書である。表紙の見返しには「庄原謙吉輯」、内題には「竹軒 庄原和輯」とあり、刊記には「庄原謙吉纂輯」とあることから、庄原謙吉（庄原和）によって編纂された辞書であると分かる。松井利彦（1990）によると収録語（項目数）は4340項目とされており、また、後続の漢語辞書にも多大な影響を与えたことが指摘されている。

『漢語字類』巻頭の「漢語字類序例」によると、本書は「漢語ノ尤日用ニ切ナル者ヲ採」っており、「訳スルニ和語ヲ以テシ名ヅケテ漢語字類ト曰フ」としている（なお、引用部の漢字は現行の漢字字体にあらためる。以下も同じ。また、引用部を省略する場合は「…」を用いる）。これらの言説をそのまま受け取ると、『漢語字類』は日用に使用されている「漢語」を見出し語として収載し、その語釈には「和語」を用いることが基本的な方針であることが分かる。語釈については「務メテ世俗ノ通語ヲ用ヒ」て、「鄙俚ヲ嫌ハス東京ノ方言」も使用しているとある。また、「漢音ヲ以テ俗語ニ通スルモノハ便チ漢音ヲ仮テ之ヲ訳」し、「専ラ時俗に通シ易キヲ主トス」と書かれている。ここで使われている「世俗ノ通語」は「一般的に通用している語」と理解できる。記述をまとめると、語釈には一般的に通用している（と編者が判断した）「ことば」が用いられており、その中には東京の方言や「漢音（字音語）」も含まれている、ということになる。「漢音ヲ以テ俗語ニ「…」」の部分は、語釈に「俗語」に通じる「漢音（字音語）」を用いることがあると解釈でき、語釈に用いられている「漢語」は、見出し語よりも一般的に用いられていたものであることがうかがえる。

その後、『漢語字類』刊行から7年後の1876（明治9）年には「大森惟中閱」「庄原和輯」を謳う『[校正／増補] 漢語字類』が刊行されている。「庄原和」は「庄原謙吉」と同一人物であるとされており、『漢語字類』の編纂者の庄原謙吉が自身で「校正増補」をおこなったものが『[校正／増補] 漢語字類』であると考えられている。本論文では『漢語字類』を庄原謙吉が「校正増補」したと前提して以下の考察を進める。巻頭の「増補漢語字類例言」によると『漢語字類』出版から「六年」が経ち、再刻にあたり「是ニ於テ重テ校訂シ。冗ヲ汰シ新ヲ補ヒ」、あらたに『[校正／増補] 漢語字類』として出版する、という旨が書かれている。

松井利彦（1990）によると『[校正／増補] 漢語字類』収録語は9795項目とされている。

そうであれば『[校正／増補] 漢語字類』には概算で 5000 項目以上が増補されており、『漢語字類』が収載する項目数の倍以上を新規項目として加えていることになる。実際には増補にあたって『漢語字類』から採られていない項目もあるので、この数が正確な増補項目数とは言えない。しかし、辞書全体としては削除された項目数よりも増補項目数の方が多いことはあきらかであり、大幅な増補がされていると言える。

## 1-2. 『漢語字類』の構成と体裁

『漢語字類』の構成は巻頭に「漢語字類序例」、次に「總目」（【図 1】図はすべて「I」末参照）と「索引」（【図 2】）を置く。これらを除いたものを便宜上「辞書部分」と呼ぶ。「辞書部分」の項目の配列は、見出し漢語の第一字目の漢字（以下、「頭字」と呼ぶ）の部首の画数順であり、「木ノ部」や「門ノ部」のように部首ごとに「部」が置かれて項目が配置されている。巻頭の「總目」は部首が画数順にまとめられている。例えば「六畫」の箇所であれば、「竹部」「米部」「糸部」「缶部」「网部」「羊部」「羽部」と続く。次の「索引」は部首の各「部」に収められている頭字が掲示されている。例えば「米」部であれば、「七十五丁」「米」「粒」「粗」「粲」「精」「糊」「糠」と続いており、「辞書部分」の丁数と収載する語の頭字が確認できる。使用者は「總目」と「索引」を組み合わせることによって、調べたい語の項目に到達できる。このように、『漢語字類』は部首の画数によって項目を検索できるように作られている。したがって、本書は単漢字から漢語を探し当て、その語義を知るための辞書、ということになる。

「辞書部分」（【図 3】）の体裁について説明する。版面は、匡郭の内側が縦横の線で 3 段×7 列=21 枠に区切られており、半丁で最大 21 項目が掲載されている。匡郭の上欄には見出しの頭字が置かれ、その下に同一の漢字を頭字とする項目を集めて配列している。

項目の構成について、例をあげて説明する。枠内の中央には「漢字列」、その右側に平仮名で書かれた「語形」が置かれている。「漢字列」は行草書とみられる書体で表わされ<sup>(5)</sup>、「漢字列」の下には一字縦書きで楷書の漢字列（以下、「楷書部分」と呼ぶ）が置かれている<sup>(6)</sup>。「楷書部分」の下に片仮名で「語釈」が置かれている。項目の構成について項目「甲首」を例にすると、行草書の「甲首」の「漢字列」が置かれ、右側に「語形」として平仮名の「かふしゅ」が置かれている。その下に「楷書部分」の「甲首」、その下に語釈「カブトクビ」が置かれている。本章では行草書の漢字列を指して「漢字列」と呼ぶ。また、「漢字列」と「語形」を合わせて「見出し」と呼び、「見出し」「楷書部分」「語

積」を合わせて「項目」と呼ぶ。

同じ頭字の項目が複数ある場合、最初の項目の漢字列のみ頭字が漢字表記され、二番目以降の項目は頭字が「丨」の記号で表されている。例えば頭字「甲」の箇所であれば、項目の漢字列は「甲首（かふしゅ）」、「丨第（かふてい）」となっており、一番目の項目のみ「甲」、二番目以降の頭字は「丨」の記号で表わされている。漢字列の下に置かれている「楷書部分」は二番目以降の項目であっても「丨」の記号を使用せずに漢字表記される。

「漢字列」と「楷書部分」については巻頭の「漢語字類序例」に「每字草書行書ヲ以テ書シ下モ附スルニ楷書ヲ以テスル […]」と記載がある。このことから、項目の中央の「漢字列」には「草書行書」の書体を用い、その下部の「楷書部分」には「楷書」の書体を意図的に用いていることが分かる。項目内の「漢字列」を行草書体、「楷書部分」を楷書体のかたちで掲出することは、『[校正／増補] 漢語字類』にも受け継がれている。なお、漢字列を「行草書体」と「楷書」で掲出する漢語辞書は他にも『雅俗節用』などがあげられる<sup>(7)</sup>。

### 1-3. 『[校正／増補] 漢語字類』の構成と体裁

『[校正／増補] 漢語字類』の構成は巻頭に「増補漢語字類例言」を置き、次に「増補漢語字類目次」を置く。これらを除いたものを便宜上「辞書部分」と呼ぶ。巻頭の「増補漢語字類例言」（以下、「例言」とする）の末尾には「明治八年第十二月」とあるので、「例言」は出版の前年に書かれたことがわかる。書名については外題と見返し部分は「[校正／増補] 漢語字類」と書かれているが、本書巻頭の「例言」と「目次」と柱題では「増補漢語字類」、辞書部分の内題は「莊原和漢語字類」、辞書部分の尾題では「莊原和増補漢語字類」となっており、各箇所では書名が異なっている。本章では外題にのっとり『[校正／増補] 漢語字類』と呼ぶ。

項目の配列は、項目の「漢字列」の頭字の総画数順であり、部首の画数順である『漢語字類』とは異なる配列方法が採られている。「例言」には「前刻収載ノ例。甚ダ搜索ニ便ナラス。今改テ画引ノ体トナス。」と記述があるため、「搜索」の利便性のために配列を改めたことが分かる。巻頭の「増補漢語字類目次」（以下、「目次」と呼ぶ。【図 4】）は総画数順で見出しの頭字が載せられている。例えば「二畫」の箇所であれば、「二」「乃」「了」「力」「刀」「卜」「入」「八」と続く。この配列は『漢語字類』と同じように「漢

字表記」から「語形」や「語義」を調べることができる。「目次」の欄上には「凡凡同」「切功同」「无無通」というように、何らかの関係を持つ漢字の組が載せられている。

次に「辞書部分」（【図 5】）の体裁について述べる。版面は、匡郭の内側が縦横の線で 3 段×8 行=24 枠に区切られている。半丁で最大 24 項目が掲載されており、半丁の掲載語が『漢語字類』よりも 3 項目多くなっている。匡郭の上欄には見出しの頭字が置かれている。その下に同一の漢字を頭字とする項目を集めて配列している。『漢語字類』とは異なる点として、同じ頭字の項目が複数ある場合、すべての「漢字列」の頭字が漢字表記されている。反対に「楷書部分」は最初の項目のみ頭字が漢字表記され、二番目以降の項目は頭字が「丨」の記号で表されている。

枠内の項目の構成について説明する。枠内の中央には「漢字列」、その右側に片仮名で「語形」が置かれている。「漢字列」は行草書とみられる書体で表わされている。「漢字列」の下には一字縦書きで「楷書部分」が置かれている。「楷書部分」の下に片仮名で「語釈」が置かれている。枠内の項目の構成は両辞書でほとんど同じであるが、『[校正／増補] 漢語字類』では「漢字列」の右側にある「語形」が片仮名で表されている点に違いがある。

ここまでに述べた『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の体裁についてまとめる。

#### 『漢語字類』

- 1 版面は 3 段×7 列の枠で分けられ、最大 21 項目が掲載されている。
- 2 項目は頭字の部首の画数によって配列されている。
- 3 「漢字列」の右側には平仮名表記された「語形」が置かれている。
- 4 同じ頭字の項目が複数ある場合、一番目の項目のみ「漢字列」の頭字が漢字表記され、二番目以降は「丨」の記号で表わされる。「楷書部分」の頭字はすべて漢字表記されている。

#### 『[校正／増補] 漢語字類』

- 1 版面は 3 段×8 列の枠で分けられ、最大 24 項目が掲載されている。
- 2 項目は頭字の総画数によって配列されている。
- 3 「漢字列」の右側には片仮名表記された「語形」が置かれている。
- 4 同じ頭字の項目が複数ある場合、すべての「漢字列」の頭字が漢字表記されている。「楷

書部分」は一番目の項目の頭字のみ漢字表記され、二番目以降は「|」の記号で表わされる。

これらの点から、『漢語字類』から『[校正／増補] 漢語字類』は収載語の増補以外にも項目の配列や体裁にも違いがあることが分かる。

#### 1-4. 先行研究

##### 1-4-1. 松井利彦（1990）による調査と指摘

『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の項目の対照をおこなうにあたり、両辞書に関係する先行研究についてまとめる。両辞書の対照は松井利彦（1990）の調査がある。松井利彦（1990）の調査では『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』には、両辞書にある項目と、『[校正／増補] 漢語字類』に新たに増補された項目があり、両辞書に共通する項目にも「改訂」がされていることが指摘されている。項目の「改訂」について書かれた箇所を引用する。「編者（引用者注・庄原謙吉）は、初版本の部首引きを総画数引きに改め、また、仮名づかいの誤りを訂正したと記している。しかし、掲出語の配列の改変や仮名づかいの訂正は、刊行物の盛行とも、「以テ今日ノ疑ヲ待ツニ足ラス」にも関係がなさそうである。」（p. 266）とある。また、増補語について「明治元年に編纂された初版本は明治八年頃には「以テ今日ノ疑ヲ待ツニ足ラス」であった。」（p. 264）、「このような新漢語が初版本の編纂後に一般に使用されるようになったため、また、初版本の掲出語数が四三四〇語と少なかったために、「新ヲ補」って掲出語数を倍以上の九七九五語にした増補本を編纂することになった。」（p. 265）と述べている。

これらの説明をまとめると、『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』には、どちらにも共通してみられる項目と、新たに収載した「増補語」があり、共通する項目には「改訂」がおこなわれている場合がある、となる。『[校正／増補] 漢語字類』の「増補語」について、この説明では「新漢語」が増補されていると読み取れるが、今回の調査によると増補された項目には「新漢語」とみられる語以外にも収載されている。この点については「2. 『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の項目の対照」で調査する。

##### 1-4-2. 今野真二（2011）による指摘

今野真二（2011）は松井利彦（1990）の論をふまえた上で、「ある漢語辞書 X が改訂増

補されて、別の漢語辞書 Y が編纂された場合、X から Y への「改訂増補」という過程はさまざまな知見を得るための緒となることが少なくないと思われる」(p. 170)と述べている。

『[校正／増補] 漢語字類』の増補語については「『漢語字類』が見出し項目九〇〇〇を超えるものとして構想されていれば、見出し項目として当然採用されていたであろう漢語はあるはずで、「増補本の見出し項目から『漢語字類』の見出し項目を減じたもの＝新漢語」と（単純に）はならないであろうことは留意しておく必要がある」（p. 172）と述べている。

## 2. 『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の項目の対照

### 2-1. 項目の対照と分析

ここからは実際に『[校正／増補] 漢語字類』と『漢語字類』の項目の対照をおこなう。今回の調査では『[校正／増補] 漢語字類』の総画数による「部」をもとにして両辞書の項目を対照する。対照する箇所は『[校正／増補] 漢語字類』の部で項目数が 800 項目を超える部である「十二画」、「十三画」、そして前半の部である「七画」と「八画」、後半の部である「十六画」を合わせた 3339 項目を調査範囲とする。今回の調査には項目数の最も多い部に加え、辞書編纂時の編纂方針の変更や、版下が複数の人物によって作成されているなど、箇所によって違いがあることが想定されるため、前半と後半に位置する複数の部を調査範囲とすることで偏りのない調査がおこなえると考えたからである<sup>(8)</sup>。

次に両辞書の対照結果を載せる。

〈調査範囲の合計項目数〉

『漢語字類』	1375 項目
『[校正／増補] 漢語字類』	3339 項目

〈項目の内訳〉

A 『漢語字類』にあり、『[校正／増補] 漢語字類』にない項目	65 項目
B 『漢語字類』になく、『[校正／増補] 漢語字類』にある項目	2029 項目
C 『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の両方にある項目	1310 項目

便宜上、A「『漢語字類』にあり、『[校正／増補] 漢語字類』にない項目」を指して「削除項目」と呼び、B「『漢語字類』になく、『[校正／増補] 漢語字類』にある項目」を指して「増補項目」と呼び、C「『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の両方にある項目」を指して「共通項目」と呼ぶことにする。また、同じ頭字の複数の項目のことを「項目群」と呼ぶことにする。

項目の分析に入る前に、A、B、C のそれぞれの項目について「邑」の項目群を例にして説明をおこなう。「邑」の項目群は『漢語字類』は 119 丁裏、『[校正／増補] 漢語字類』では 37 丁裏にある。項目の「漢字列」、丸括弧内に仮名書きの「語形」、最後に「語釈」という順にあげる。なお、両辞書の「漢字列」は「行草書体」のかたちで印刷されているため、「楷書部分」も参考にしながら漢字のかたちを判断して示す。また、C は先に『漢語字類』、後に『[校正／増補] 漢語字類』の順に例示する。なお、仮名字体は現行の字体に統一する。

A「削除項目」（『漢語字類』のみにみられる項目）

邑衙	（いふが）	ムラノヤクシヨ
邑簿	（いふぼ）	ムラノチャウメン
邑宰	（いふさい）	ムラヤクニン

B「増補項目」（『[校正／増補] 漢語字類』のみにみられる項目）

邑間	（イフリヨ）	上ニ全シ
邑土	（イフド）	リヤウブン
邑人	（イフジン）	ドウムラノヒト

C「共通項目」（両辞書に共通してみられる項目）

邑里	（いふり）	イナカ
	（イフリ）	ムラサト
邑々	（いふ（繰返記号）） <sup>(9)</sup>	キガフサグ
	（イフイフ）	キガフサグ

「邑」の項目群をA、B、Cの順に説明する。A「削除項目」の「邑衙」「邑簿」「邑宰」の項目は『漢語字類』のみにみられる項目である。『[校正／増補]漢語字類』にはないため、編纂の際に削除されたものと考えられる。B「増補項目」の「邑閭」「邑土」「邑人」の項目は『漢語字類』にはなく、『[校正／増補]漢語字類』のみにみられる項目である。編纂の際に新たに増補された項目と考えられる。Cの「邑里」「邑々」は両辞書にみられる項目である。しかし、これらの項目には両辞書間で違いがみられる。「邑里」の項目は「語釈」が『漢語字類』では「イナカ」であるが、『[校正／増補]漢語字類』では「ムラサト」となっている。「邑々」の項目は「語形」が『漢語字類』では「いふ（繰返記号）」であるが、『[校正／増補]漢語字類』では「イフイフ」となっている。次節でA、B、Cのそれぞれに当てはまる項目について、例をあげながら詳しく整理をおこなう。

## 2-2. A「削除項目」B「増補項目」C「共通項目」の分類と整理

### A「削除項目」

先にあげた〈項目の内訳〉を引くと、『漢語字類』にあつて『[校正／増補]漢語字類』にはみられない項目は65項目ある。この「削除項目」の中から紙幅の関係上、17項目を掲出する。以下、項目の例示については同じ理由から一部の項目を掲出する。例示は項目の「漢字列」、丸括弧内に仮名書きの「語形」、「語釈」、辞書内の所在、という順番にあげる。なお、例示の方法について、両辞書内で仮名書きの「語形」が左右に載せられている場合は「/」で区切り、右側にあげられた「語形」を先に、左側の「語形」を後に掲示する。また、「漢字列」に附された返り点の記号は「(レ)」の形で掲出する。

1	制曰可（せいしていわくか）	天子ヨリオユルシニナル	17 丁裏
2	剽悍猾賊（へうかんあつぞく）	ワルコスヒシンモノ	18 丁表
3	卑怯（ひけふ）	オクビヤウ	20 丁裏
4	君側之悪（くんそくのあく）	キミノオソバノアクニン	25 丁表
5	登堂（とうどうい）	トジヤウ	65 丁裏
6	疆臣擅權（きやうしんけんをほしいまゝにす）	ツヨキケライガキマハナコトヲスル	34 丁裏
7	放囚（はうしう）	メシウドヲオヒハナス	44 丁裏
8	知告（ちこく）	ツゲシラセル	68 丁裏



9	糾罪（きうざい）	ツミヲシラベル	76 丁表
10	采邑（さいいふ）	リヤウブン	121 丁裏
11	采掇（さいてつ）	ヒロヒトル	121 丁裏
12	采薪之憂（さいしんのうれい）	ビヤウキノ事	121 丁裏
13	門胄（もんちう）	上ニ全シ	124 丁裏
14	門第（もんてい）	イヘヤシキ	124 丁裏
15	惑(レ)民（たみをまどわす）	タミヲバカス	39 丁裏
16	惑(レ)衆（しうをまどわす）	オホゼイヲバカス	39 丁裏
17	拒(レ)敵（てきをふせぐ）	テキヲフセグ	42 丁表

1 から 14 は漢字二字以上からなる項目、15 から 17 は返り点の附された項目をあげた。返り点の附された項目について 15 を例にあげると、漢字列「惑(レ)民」の「語形」は「たみをまどわす」と漢文を読み下すような形式で書かれている。両辞書には「削除項目」以外にも、このような「漢字列」に返り点の附された項目がみられる。漢語以外にも、このような漢文に近い形式の項目も両辞書に収載されている。また、6「疆臣擅權（きやうしんけんをほしいまゝにす）」のような、「語形」が「漢字列」の字音となっていない例もみられる。なお、本章では中国語としての使用が確認できるかということではなく、字音で構成されている語を「漢語」と呼ぶ。

「削除項目」については先に触れた先行研究では触れられていない。『漢語字類』から『[校正／増補] 漢語字類』への改訂は新規項目を増補する一方で、このように項目の削除もおこなわれていたことが分かる。

## B「増補項目」

先にあげた〈項目の内訳〉によると、『漢語字類』になく『[校正／増補] 漢語字類』ある項目は 2029 項目ある。『漢語字類』の〈調査範囲の合計項目数〉1375 項目と比べると、『[校正／増補] 漢語字類』には約 650 項目が増補されていることが分かる。次に「増補項目」の中から 18 項目を掲出する。

1	見今（ゲンコン）	ゲンザイイマ	34 丁裏
2	見任（ゲンニン）	タウヤク	34 丁裏

3	呼吸（コキフ）	ツクイキスフイキ	48 丁裏
4	呼息（コソク）	ツクイキ	48 丁裏
5	呼気（コキ）	上ニ全シ	48 丁裏
6	呼噪（コサウ）	ヨバヽリサワグ	48 丁裏
7	拓(レ)地（ヒラクチヲ）	トチヲキリヒラク	50 丁裏
8	卓偉（タクキ）	ナミスグレル	57 丁裏
9	卓絶（タクゼツ）	スギコエル	57 丁裏
10	卓越（タクエツ）	上ニ同シ	57 丁裏
11	受授（ジュジュ）	ウケトリワタス	57 丁裏
12	畫策（クワクサク）	ハカリゴトヲタテル	124 丁裏
13	畫餅（グワベイ）	ムダゴト	124 丁裏
14	博物家（ハクブツカ）	モノシリノガクシヤ	125 丁表
15	博覽會（ハ克蘭クワイ）	ヒロクモノヲミセルクワイ	125 丁表
16	燒燬（セウキ）	ヤケル	173 丁表
17	燒亡（セウバウ）	ヤケウセル	173 丁表
18	燒失（セウシツ）	上ニ同シ	173 丁表

3 から 6 の「呼」、11「受」、16 から 18「焼」の項目群は、『漢語字類』には収載されておらず、「索引」にも「呼」「受」「焼」の頭字は載せられていない。これらの項目群は『[校正／増補] 漢語字類』で新たに追加されていることが分かる。また、7「拓(レ)地」のように「漢字列」に返り点が附された項目も追加されている。

増補項目については「1－4. 先行研究」で引用したように、松井利彦（1990）が指摘をしている。松井利彦（1990）の説明は「新漢語」が増補されていると読み取れるが、上にあげた「増補項目」をみていくと、「新漢語」以外の語も増補されていることがうかがえる。「新漢語」を仮に「初出が明治期に確認できる漢語」とした上で、「増補項目」の語の用例を『日本国語大辞典』第二版で確認してみる。例えば、17「焼亡」と18「焼失」の語は『日本国語大辞典』第二版によると、「焼亡」は文明本節用集、「焼失」は文明本節用集や日葡辞書に採られている語であり、「新漢語」とは言いがたい。「増補項目」には「新漢語」以外の語も増補されていることが分かる。「増補項目」の内実について詳しく見ていくためには、項目全体の調査も必要になると考えるが、今回は指摘にとどめておく。

### C「共通項目」

先にあげた〈項目の内訳〉によると『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の両辞書の「共通項目」は 1310 項目となっており、『漢語字類』の項目（1375 項目）の大半は『[校正／増補] 漢語字類』に収載されていると見ることができる。しかし、同じ項目を対照してみると「語形」や「語釈」などに違いのある項目が確認できる。両辞書に共通して見られる項目のうち、「語形」などに「違い」の確認できる 4 項目を掲出する。項目は先に『漢語字類』、次に『[校正／増補] 漢語字類』の順にあげる。

1	攻撃（こうげき）	セメウツ	44 丁裏
	攻撃（コウゲキ）	セメウツ	36 丁裏
2	項領（こうれい）	ウナジ	133 丁裏
	項領（コウレイ）	クビエリ	124 丁裏
3	改弊（へいをあらたむ）	ワルキシキタリヲナホス	44 丁裏
	改弊（カイヘイ）	ワルキシキタリヲナホス	37 丁裏
4	良畧（りやうと）	上ニ全シ	88 丁裏
	良圖（リヤウト）	上ニ同シ	40 丁表

初めに 1「攻撃」「攻撃」の項目を見ていく。この項目は「漢字列」に違いが確認できる。『漢語字類』は「撃」、『[校正／増補] 漢語字類』は「撃」となっており、漢字の左上「車」部分に違いのある漢字が対応している。『[校正／増補] 漢語字類』に見られる「撃」字は『大漢和辞典』で 12800 番が与えられている。

次の 2「項領」であるが、この項目は「語釈」に違いが確認できる。『漢語字類』では「語釈」が「ウナジ」、『[校正／増補] 漢語字類』では「クビエリ」となっており、両辞書間で「語釈」の記述が異なっている。

次に 3「改弊」であるが、この項目は仮名書きの「語形」に違いが確認できる。『漢語字類』は「語形」が「へいをあらたむ」、『[校正／増補] 漢語字類』では「カイヘイ」となっている。『漢語字類』の「語形」の「へいをあらたむ」は漢字をあてると「弊を改む」であり、「漢字列」を読み下すようになっている。一方で『[校正／増補] 漢語字類』の「カイヘイ」は「漢字列」の字音読みが置かれている。なお、平仮名、片仮名の違いは

先述したので、ここでは触れないことにする。

最後の 4「良畧」「良圖」の項目は、「漢字列」に違いが確認できる。『漢語字類』は「漢字列」が「良畧」、『[校正／増補] 漢語字類』では「良圖」となっており、この項目は 1「攻撃」と同じく、「漢字列」に異なりがみられる。『漢語字類』の「畧」は『大漢和辞典』では 3829 番、『[校正／増補] 漢語字類』の「圖」は 4832 番が与えられている。どちらの項目も「語釈」は「上ニ同シ」とあるが、「上」の項目は両辞書ともに「良謀（りやうぼう）」で「語釈」は「ヨキテダテ」とある。

このように両辞書間の「共通項目」には「語釈」や「語形」、「漢字列」などに違いがみられる項目がある。ここまで、『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の対照結果について A「削除項目」、B「増補項目」、C「共通項目」に分けて整理を試み、さらに「共通項目」の中にも「語釈」や「漢字列」などに違いの確認できる項目があることを明らかにした。

### 3. 『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の対照結果の分析

ここからは、『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の対照結果をふまえて、両辞書の「共通項目」のうち、「語釈」に違いが確認できる項目について分析をおこなう。両辞書の同じ項目を対照し、どのような違いが見られるのかを分析することによって、それぞれの辞書の持つ特徴が明らかになると考える。

「共通項目」の「語釈」の違いについては、松井利彦（1990）に指摘がある。「改訂」という視点から、「語釈」がどのように「改訂」されているのかを「掲出語の読みかた」「語釈の内容」「語釈の数」「語釈のしかた」「語釈の用語・表現」「語釈中の語法」「訛音」「語釈中の促音表記」の 8 項目に分けて整理している。本章では「語釈」の違いについて対照するのにあたり、「改訂」という視点を取らずに「語釈」の整理を試みる。「語釈」に用いられている語、または文が、両辞書の同じ項目の間でどのように「異なる」のかという視点で整理することを試みる。

#### 3-1. 「語釈」の相違点

『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の「共通項目」の「語釈」は以下の 5 種類に分類することができる。

- a 「語釈」全体が異なる
- b 「語釈」の一部が異なる
- c 「語釈」が増加、または減少している
- d 「語釈」が「上ニ同シ（全シ）」となっている
- e 「語釈」の仮名遣いが異なる

a「「語釈」全体が異なる」について、項目「兵革」の「語釈」を例にすると、『漢語字類』で「ヨロヒハモノ」（14 丁表）、『[校正／増補]漢語字類』では「イクサゴト」（34 丁表）となっており、「語釈」の全体が異なっている。このような項目はaに分類する。

b「「語釈」の一部が異なる」は両辞書間の「語釈」が部分的に異なっている場合である。項目「呵責」を例にすると、『漢語字類』は「セメラレル」（25 丁表）、『[校正／増補]漢語字類』では「セメシカル」（44 丁表）となっており、「セメ」が共通した別語が置かれている。このような項目はbに分類する。

c「「語釈」が増加、または減少している」は『漢語字類』を基準としたときに、「語釈」の説明表現が増加、あるいは減少している場合である。項目「糾正」を例にすると、『漢語字類』が「タマス」（76 丁表）、『[校正／増補]漢語字類』は「シラベタマス」（47 丁表）とあり、後者の「語釈」には「シラベ」が加わっている。このような項目はcに分類する。

d「「語釈」が「上ニ同シ（全シ）」となっている」は項目「兵威」を例にすると、『漢語字類』の「語釈」は「イクサノイキホヒ」（14 丁表）、『[校正／増補]漢語字類』では「上ニ同シ」（34 丁表）とある。後者の「上」の項目は新たに増補した「兵力」で語釈は「ヘイノイキホヒ」となっている。「上」に該当する項目「兵力」の存在によって、「兵威」の「語釈」が両辞書間で異なることになる。このように「上ニ同シ」とある「語釈」は、上に置かれた項目によって語義が変化することになる。

e「「語釈」の仮名遣いが異なる」は、項目「使役」を例にすると、『漢語字類』の「語釈」は「ヲヒツカフ」（9 丁裏）、『[校正／増補]漢語字類』では「オヒツカフ」（54 丁表）となっており、「語釈」の仮名遣いが異なっている。このような項目はeに分類する。

a、b、c、dに分類した項目は相違点が語義に関係する項目であり、「語釈」の記述から

両辞書がどのように語義を表そうとしているのかを探ることができる。e は「語釈」の仮名遣い（語形の表示の仕方）が異なる項目である。今回の調査では、相違点が語義の記述に関係する a、b、c、d のうち、a、b、c に該当する項目について分析をおこなう。

### 3-2. a 「語釈」全体が異なる項目

初めに両辞書間で「語釈」の全体が異なる項目について分析をおこなう。「語釈」全体が異なる項目は、調査範囲では 45 項目確認できた。そのうち 19 項目を例示する。先に『漢語字類』、その後に『[校正／増補] 漢語字類』の項目の順に載せる。

1	兵革（へいかく）	ヨロヒハモノ	14 丁表
	兵革（ヘイカク）	イクサゴト	34 丁表
2	束縛（そくはく）	シバル	50 丁裏
	束縛（ソクバク）	ジイウニサセヌ	37 丁表
3	孤立（こりつ）	ミヒトリ	30 丁表
	孤立（コリツ）	ヒトリダチ	48 丁裏
4	拘束（こうそく）	カヽリアフ	42 丁表
	拘束（コウソク）	コダハル○ジイウニサセヌ	54 丁裏
5	散逸（さんいつ）	キラク	45 丁裏
	散逸（サンイツ）	チリウセル	114 丁裏
6	詐冒（そぼう）	オツカブセ	102 丁表
	詐冒（サバウ）	ニセナヲナノル	118 丁裏
7	言路（げんろ）	シモカラカミヘマウシアゲルミチズシ <sup>ママ</sup>	100 丁裏
	言路（ゲンロ）	ケンパクノミチ	39 丁表
8	府帑（ふど）	カネヤドウグノクラ	33 丁表
	府帑（フダウ）	キンザウ	47 丁表
9	貴國（きこく）	タノクニヲウヤマウコトバ	109 丁表
	貴國（キコク）	オクニ	113 丁裏
10	阻隔（そかく）	ヘダテル	126 丁裏
	阻隔（ソカク）	ハナシヘダヽル	47 丁裏
11	朝賀（てうが）	トジヤウオレイ	132 丁表

	朝賀 (テウガ)	サンダイシテガギヲノベル	111 丁表
12	憤激 (ふんげき)	クヤシヒ	40 丁表
	憤激 (フンゲキ)	イキドホリキヲハゲム	181 丁表
13	愛恵 (あいけい)	カワユガル	28 丁表
	愛恵 (アイケイ)	アイシメグム	139 丁裏
14	依頼 (いらい)	タヨリニスル	10 丁表
	依頼 (イライ)	ヨリタノム	46 丁表
15	典禮 (てんれい)	ゴシウギ	14 丁表
	典禮 (テンレイ)	ゴシキレイ	47 丁表
16	雅常 (がじやう)	イツデモ	129 丁裏
	雅常 (ガジヤウ)	ツネフダン	117 丁裏
17	黄口 (くわうこう)	コドモ	141 丁表
	黄口 (クワウコウ)	ジャクハイ	118 丁表
18	訾毀 (しき)	ワルイヒ	101 丁裏
	訾毀 (シキ)	アクコウ	117 丁裏
19	項領 (こうれい)	ウナジ	133 丁裏
	項領 (コウレイ)	クビエリ	124 丁裏

初めに 1「兵革」の項目を取り上げる。(以下、「語釈」の後に稿者が判断した漢字列を添える。)『漢語字類』の「語釈」は「ヨロヒハモノ(鎧刃物)」、『[校正／増補]漢語字類』は「イクサゴト(戦事)」とあり、両辞書間では「語釈」の語義が異なっていると思われる。『日本国語大辞典』第二版で「へいかく(兵革)」を引くと、語釈は「(1) いくさの道具。武具。へいかく。」「(2) 戦争。戦乱。へいかく。」の二義が載せられており、それぞれ(1)は『色葉字類抄』『日葡辞書』、(2)は『高野本平家物語』などの用例があげられている。『漢語字類』の「語釈」の「ヨロヒハモノ」は(1)の語義に近く、『[校正／増補]漢語字類』の「語釈」の「イクサゴト」は(2)の語義に近いと判断できる。「兵革」の「語釈」は『漢語字類』と『[校正／増補]漢語字類』では別の語義が示されているといえる。同様の例として、5「散逸」を取り上げる。『漢語字類』の「語釈」は「キラク(気楽)」、『[校正／増補]漢語字類』は「チリウセル(散り失せる)」となっている。『日本国語大辞典』第二版の「さんいつ(散逸・散佚)」の語釈には、「(1)

ちらばってなくなること。まとまっていた書物、文献などが散って、その所在がわからなくなる場合などにいう。」「(2) のどかに暮らすこと。世事にかかわらないで、のんきに遊び楽しむこと。」とあり、(1) は『日本外史』や二十四史のひとつである『北史』、(2) は『新撰字解』や『南史』などの用例があげられている。『漢語字類』の「語釈」は(2)に近く、『[校正／増補] 漢語字類』の「語釈」は(1)に近いと判断できる。この項目も、両辞書の「語釈」は別の語義を示している。このように、両辞書で「語釈」の語義が異なっていると判断できる項目を、1 から 6 にあげた。

次に 7「言路」を取り上げる。『漢語字類』の「語釈」は「シモカラカミヘマウシアゲルミチズシ（下から上へ申し上げる道筋）」、『[校正／増補] 漢語字類』は「ケンパクノミチ（建白の道）」となっている。「けんはく（建白）」は『日本国語大辞典』第二版の語釈によると「政府、上役などに対し、自分の意見を申し立てること。建言。」とあり、『[校正／増補] 漢語字類』の「ケンパク」は、『漢語字類』の前半部分「シモカラカミヘマウシアゲル」に対応すると考えられる。『[校正／増補] 漢語字類』の語釈は「シモカラカミヘマウシアゲル」を「ケンパク」の一語に置き換えていると判断できる。次に 9「貴國」を取り上げる。『漢語字類』の「語釈」は「タノクニヲウヤマウコトバ（他の国を敬うことば）」、『[校正／増補] 漢語字類』は「オクニ（御国）」とある。『漢語字類』では説明的な語義の記述がされ、『[校正／増補] 漢語字類』では別語による記述となっている。7 から 9 にあげた項目は『漢語字類』の方が「語釈」に用いられている言語量が多い項目である。

次に 10「阻隔」を取り上げる。『漢語字類』の「語釈」は「ヘダテル（隔てる）」、『[校正／増補] 漢語字類』では「ハナシヘダハル（放し隔たる）」となっている。「ヘダテル」と「ヘダハル」を同義とみると、後者の「語釈」は「ハナシ」の語義がある分、より具体的な記述がされていると思われる。10 から 12 にあげた項目は『[校正／増補] 漢語字類』の方が「語釈」に用いられている言語量が多い項目である。7 から 12 をあわせると、両辞書間で「語釈」に費やされている言語量に差が認められる項目となる。

次に 13「愛恵」を取り上げる。『漢語字類』の「語釈」は「カワユガル（可愛がる）」、『[校正／増補] 漢語字類』では「アイシメグム（愛し恵む）」とある。後者の「語釈」は「漢字列」の「愛恵」の「愛」を「アイシ」、「恵」を「メグム」にそれぞれ言い換えることで語義を説明していると思われる。いわば、「漢字列」を分解してそれぞれの漢字の和訓に基づいた「語釈」である。このように『[校正／増補] 漢語字類』の「語釈」が「漢



字列」の漢字の和訓に基づいている項目を 13 と 14 にあげた。

次に 17「黄口」を取り上げる。『漢語字類』の「語釈」は「コドモ（子供）」、『[校正／増補] 漢語字類』は「ジャクハイ（若輩）」となっている。「じゃくはい」は『日本国語大辞典』第二版には「(1)年齢の若い者。年少者。また、自分の技量経験などをへりくだっている。」とある。「こども」と「じゃくはい」が同義だとすると、『漢語字類』の「語釈」は和語が選択され、『[校正／増補] 漢語字類』では漢語が選択されていることになる。18「訾毀」も『漢語字類』が「ワルイヒ（悪言）」、『[校正／増補] 漢語字類』は「アクコウ（悪口）」とあり、「語釈」に語種の違いがみられる。「語釈」に漢語が用いられることについて、17 と 18 は『[校正／増補] 漢語字類』では見出しの漢語に対して「語釈」にも漢語が用いられている。この項目では、漢語の語義を漢語で説明していることになる。『[校正／増補] 漢語字類』では「七画」451 項目中、約 38 項目の「語釈」が漢語になっている。この辞書の「語釈」は片仮名で示されているので、「語釈」に用いられている漢語は、漢字で書かれずとも理解ができる漢語であることが推測できる。このような漢語が漢字から離れることについて、山田俊雄（1978）<sup>(10)</sup>の説明を以下に引用する。

漢語とはいっても、実は、すべてがいわゆる難解な漢語ではなくて、極めて一般的な庶民の程度でも十分に使ったり書いたりすることのできるものも少くはなかったと思われる。というのは、明治初期において見てもほぼ同じことが言いうるかと思うが、漢語は漢字の裏付けをもたなくても存在しうる状態になる、また別な言い方をすれば、漢字離れをして、口頭言語の中でも普通になってゆくものがある、それらはいわば漢語の層の下の方に次第に累積し沈殿してゆく。（p. 225）

山田俊雄（1978）の説明によると、漢語には漢字表記を離れて用いられるものがあり、それらは「漢語の下層」に累積していくという。ここで述べられている「漢語の下層」に属する漢字離れをした漢語というものは、『漢語字類』や『[校正／増補] 漢語字類』の「語釈」にみられる片仮名書きされた漢語にも当てはまると考えられる。「見出し」の漢語と「語釈」の漢語にはこのような違いがあることが考えられる。

最後に 19「項領」を取り上げる。『漢語字類』の「語釈」は「ウナジ（項）」、『[校正／増補] 漢語字類』は「クビエリ（首襟）」となっており、この項目は両辞書で同じ語

種の別語が「語釈」に置かれている。

ここまで『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』で「語釈」の全体が異なる項目について、両辞書間にみられる相違点として次の5点を指摘した。

- 1 両辞書間で「語釈」の語義に違いがある。
- 2 両辞書間で「語釈」に費やされている言語量に違いがある。
- 3 項目の「漢字列」の和訓に沿った「語釈」となっている。
- 4 「語釈」に異なる語種の別語が置かれている。
- 5 「語釈」に同一の語種の別語が置かれている。

### 3-3. b 「語釈」の一部が異なる項目

次に両辞書間で「語釈」の一部が異なる項目について分析をおこなう。「語釈」の一部が異なる項目は、調査範囲では52項目が確認できた。そのうち18項目を例示する。

1	兵員（へいいん）	グンゼイ	14 丁表
	兵員（ヘイキン）	グンビヤウ	34 丁表
2	答書（たふしよ）	ヘンジ	74 丁表
	答書（タフシヨ）	ヘンシヨ	123 丁表
3	青宮（せいきう）	ワカミヤ	131 丁表
	青宮（セイキウ）	ワカギミ	57 丁表
4	萌芽（はうが）	メバヘ	90 丁裏
	萌芽（ハウガ）	メザシ	124 丁表
5	貯蓄（ちよちく）	シマイコム	109 丁表
	貯蓄（チヨチク）	シマヒオク	126 丁表
6	沙汰（しやたい/さた）	エリヌク	56 丁表
	沙汰（シヤタイ/サタ）	エリワケル	41 丁裏
7	開墾（かいこん）	トチヲヒラク	124 丁裏
	開墾（カイコン）	シンチヲヒラク	109 丁裏
8	良相（りやうしやう）	ヨキカロウ	88 丁裏
	良相（リヤウシヤウ）	ヨキサイシヤウ	39 丁裏

9	非望（ひぼう）	ムリナネガヒ	131 丁表
	非望（ヒバウ）	ムリナノゾミ	53 丁表
10	物議（ぶつぎ）	セケンノヒヤウギ	60 丁裏
	物議（ブツギ）	セケンノウハサ	45 丁裏
11	糾合（きうがふ）	オホクノダイミヤウヲアツメル	76 丁表
	糾合（キウガフ）	アハセアツメル	47 丁表
12	放置（はうち）	オシコメヲク	44 丁裏
	放置（ハウチ）	ソノマヽサシオク	48 丁表
13	詬叱（こうしつ）	シカリツケル	102 丁裏
	詬叱（コウシツ）	ハヂシメシカル	133 丁裏
14	諫争（かんさう）	イケンシイヒハル	104 丁裏
	諫争（カンサウ）	イサメイヒハル	180 丁裏
15	頑愚（ぐわんぐ）	バカシヤウジキ	133 丁裏
	頑愚（グワング）	バカガウジヤウ	132 丁裏
16	馳驅（ちく）	ムマデカケル	136 丁裏
	馳驅（チク）	カケハセル	139 丁表
17	確説（かくせつ）	タシカナハナシ	69 丁表
	確説（カクセツ）	タシカナセツ	179 丁裏
18	煩務（はんむ）	ウルサヒヤクメ	59 丁表
	煩務（ハンム）	ウルサイツトメ	137 丁表

「語釈」は1から6の「語の要素が異なる「語釈」」と7から18の「説明表現が異なる「語釈」」に大別できる。1から6の「語の要素が異なる「語釈」」の項目として2「答書」を取り上げる。『漢語字類』の「語釈」は「ヘンジ（返事）」、『[校正／増補]漢語字類』は「ヘンシヨ（返書）」とある。両辞書の「語釈」は語の前部要素の「ヘン（返）」が共通している。『日本国語大辞典』第二版には「へんじ（返事・返辞）」は「(1)ことばを返すこと。また、返すことば。(イ)もらった手紙や和歌、また、質問、問合わせなどに対して、答えて返す手紙、和歌、文書など。かえりごと。かえり。かえし。」とあり、「へんしよ（返書）」は「返答の手紙。かえしぶみ。返信。返状。」とある。これらの語義を、「語釈」の語に対応させると、『漢語字類』では多義語の「ヘンジ」を選択し、『[校

正／増補』漢語字類』では単義語の「ヘンショ」を選択していることになる。『[校正／増補] 漢語字類』の「ヘンショ（返書）」の方が限定的な語義となっている。

次に、6 から 18 にあげた「説明表現が異なる「語釈」」の項目として、7「開墾」を取り上げる。『漢語字類』の「語釈」は「トチヲヒラク（土地を開く）」、『[校正／増補] 漢語字類』では「シンチヲヒラク（新地を開く）」とある。どちらも文章による説明であるが、「語釈」の前の部分の表現が、『漢語字類』は「トチ（土地）」、『[校正／増補] 漢語字類』は「シンチ（新地）」という違いがある。このように、文章による説明がされている「語釈」で、表現の一部が異なっている項目も確認できる。他の項目として、11「糾合」も見てみる。『漢語字類』の「語釈」は「オホクノダイミヤウヲアツメル（多くの大名を集める）」、『[校正／増補] 漢語字類』では「アハセアツメル（合わせ集める）」とあり、「オホクノダイミヤウ（多くの大名）」と「アハセ（合わせ）」の部分に違いがある。『漢語字類』は「大名」に限定された説明となっているが、『[校正／増補] 漢語字類』では対象を限定していない説明になっている。

次に 17「確説」を取り上げる。『漢語字類』の「語釈」は「タシカナハナシ（確かな話）」、『[校正／増補] 漢語字類』では「タシカナセツ（確かな説）」とある。この項目では「ハナシ（話）」と「セツ（説）」の部分に違いがみられる。「セツ（説）」を選択した『[校正／増補] 漢語字類』は「漢字列」の「確説」をそれぞれ「確」が「タシカナ」、「説」が「セツ」と対応させている。「漢字列」の漢字と対応している和訓を用いて「語釈」に置いている項目であると言える。このような項目を 16 から 18 にあげた。

ここまで、「語釈」の一部が異なっている項目について分析をおこない、両辞書間にみられる相違点として次の 3 点を指摘した。

- 1 （語の要素が異なる「語釈」）両辞書の間で「語釈」に用いられた語が多義語と単義語という違いがある。
- 2 （説明表現が異なる「語釈」）両辞書の間で「語釈」が限定的な語と、限定的でない語という違いがある。
- 3 （説明表現が異なる「語釈」）項目の「漢字列」の和訓に沿った「語釈」となっている。

### 3-4. c 「語釈」が増加、または減少している項目

「「語釈」が増加、または減少している」項目というのは、『漢語字類』を基準とした

ときに、『[校正／増補] 漢語字類』の「語釈」の説明表現に用いられる言語量が増加している、または減少している項目を指す。調査範囲では、「語釈」が増加している項目が26項目、「語釈」が減少している項目が9項目あった。その中から合わせて15項目を例示する。

〈「語釈」が増加している項目〉

1	忘却（ばうきやく）	ワスレル	37 丁裏
	忘却（バウキヤク）	ウチワスレル	42 丁裏
2	糾正（きうせい）	タマス	76 丁表
	糾正（キウセイ）	シラベタマス	47 丁表
3	沿革（ゑんかく）	ウツリカワリ	55 丁裏
	沿革（エンカク）	ヨノウツリカハリ	47 丁表
4	泣涕（きふてい）	ナク	56 丁裏
	泣涕（キウテイ）	ナミダヲダシテナク	47 丁裏
5	甥舅（せいきう）	オヂオヒ	122 丁表
	甥舅（セイキウ）	ハハカタノヲヂオヒ	118 丁表
6	輸入（しゅにふ）	ツミイレル	113 丁裏
	輸入（シュニフ）	外國ヨリツミイレル	179 丁表
7	周旋（しうせん）	セワヲスル	15 丁表
	周旋（シュウセン）	タチマハル○セワヲスル	48 丁裏
8	統領（とうりやう） <sup>(11)</sup>	ノコラズヒキウケル	78 丁裏
	統領（トウリヤウ）	トウドリ○ノコラズヒキウケル	109 丁裏
9	進退（しんたい）	スハミシリゾク	116 丁表
	進退（シンタイ）	カケヒキ○スハミシリゾク	120 丁表
10	運輸（うんしゅ）	ツミマワス	117 丁表
	運輸（ウンシュ）	ツミマハス○モチハコビ	134 丁裏

〈「語釈」が減少している項目〉

1	使節（しせつ）	タイセツナツカヒヤク	9 丁裏
	使節（シセツ）	ツカヒヤク	54 丁表

2	賊魁（ぞくくわい）	トウゾクノオヤカタ	109 丁裏
	賊魁（ゾククワイ）	ゾクノオヤカタ	128 丁裏
3	錦旗（きんき）	ニシキノミハタ	123 丁表
	錦旗（キンキ）	ニシキノハタ	178 丁裏
4	表(レ)忠（ちうをへうす）	チウギナモノヲシラセル	96 丁表
	表(レ)忠（へウスチウヲ）	チウギヲシラセル	50 丁表
5	事情（じじよう）	ワケガラ○ワケアヒ	7 丁表
	事情（ジジヤウ）	ワケガラ	53 丁裏

「語釈」が増加している項目」として2「糾正」を取り上げる。『漢語字類』での「語釈」は「タバス（正す）」、『[校正／増補] 漢語字類』は「シラベタバス（調べ正す）」とあり、『[校正／増補] 漢語字類』の方は「シラベ（調べ）」が追加されている。同じ「糾」の項目群の「糾察」の「語釈」も『漢語字類』は「ミワケル（見分ける）」であるが、『[校正／増補] 漢語字類』は「シラベミワケル（調べ見分ける）」となっている。

『[校正／増補] 漢語字類』の方は「シラベ（調べ）」が追加されている。これらの項目の場合、「語釈」の表現が追加されることにより、『[校正／増補] 漢語字類』の方が語義がより限定的になっていると考えられる。同じ例として6「輸入」を取り上げる。『漢語字類』の「語釈」は「ツミイレル（積み入れる）」、『[校正／増補] 漢語字類』は「外國ヨリツミイレル」とあり、「外國ヨリ」の部分が追加されている。「ツミイレル（積み入れる）」は共通しているが、『[校正／増補] 漢語字類』の方は「外國ヨリ」とあり、『漢語字類』よりも語義が限定されている。1から6の項目は、「語釈」の増加によって語義が限定されていると思われる。

次に、7「周旋」を取り上げる。『漢語字類』の「語釈」は「セワヲスル（世話をする）」という一つの語義があげられているが、『[校正／増補] 漢語字類』では「タチマハル○セワヲスル（立ち回る○世話をする）」とあり「○」を用いた複数の語義があげられている。「周旋」の場合、「語釈」の増加による語義の追加が確認できる。このように、「語釈」に示される語義に違いがある項目を7から10にあげた。先に見た1から6の例は「語釈」の増加により語義が限定されている項目であったが、この7から10の例は、一つの語義から複数の語義となっている項目である。

「語釈」が減少している項目」について、1「使節」を取り上げる。『漢語字類』の「語

積」は「タイセツナツカヒヤク（大切な使い役）」とあり、『[校正／増補] 漢語字類』は「ツカヒヤク（使い役）」とある。「ツカヒヤク（使い役）」は共通しているが、後者では「タイセツナ（大切な）」の部分が減少している。この項目の場合、『漢語字類』は「タイセツナ」と限定した語義であるのに対して、『[校正／増補] 漢語字類』では限定をしない語義となっている。

次に、2「賊魁」を取り上げる。『漢語字類』の「語釈」は「トウゾクノオヤカタ（盗賊の親方）」、『[校正／増補] 漢語字類』では「ゾクノオヤカタ（賊の親方）」とあり、前者では「トウゾク（盗賊）」、後者では「ゾク（賊）」の違いがみられる。この場合、両辞書の「語釈」の語義に大差はないと思われ、「トウゾク（盗賊）」と「ゾク（賊）」の語の違いのみとなっている。このように、「語釈」が減少していても両辞書間で語義に大差はないとみられる例もある。

次に 5「事情」を取り上げる。『漢語字類』の「語釈」は「ワケガラ○ワケアヒ（訳柄○分け合い）」、『[校正／増補] 漢語字類』は「ワケガラ（訳柄）」となっている。『漢語字類』は「○」を用いた複数の語義があげられているが、『[校正／増補] 漢語字類』の方は一つの語義となっている。この例の場合は多義と単義という違いがみられる。

ここまで『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の間で語釈が増加している項目と減少している項目について分析をおこなった。語釈が増加している項目にみられる相違点として 1 と 2 を指摘し、語釈が減少している項目は 3 から 5 を指摘した。

- 1 「語釈」の増加により語義の限定がみられる項目がある。
- 2 「語釈」の増加により語義が多義となっている項目がある。
- 3 「語釈」の減少により語義が限定されなくなる項目がある。
- 4 「語釈」の減少により語義が単義となっている項目がある。
- 5 「語釈」の減少がみられても語義に変化がない項目がある。

### 3-5. 分析のまとめ

ここまでの分類と分析についてまとめる。『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の「共通項目」のうち、「語釈」が異なる項目を取り上げて、両辞書間の「語釈」に見られる違いを「a 「語釈」全体が異なる」「b 「語釈」の一部が異なる」「c 「語釈」が増加、または減少している」「d 「語釈」が「上ニ同シ（全シ）」となっている」「e

「語釈」の仮名遣いが異なる」の5種類に分類した。このうち、「a 「語釈」全体が異なる」「b 「語釈」の一部が異なる」「c 「語釈」が増加、または減少している」に分類される項目について、具体例をあげながら分析をおこなった。分析結果を次にまとめる。

〈a 「語釈」全体が異なる項目〉

- 1 両辞書間で「語釈」の語義に違いがある。
- 2 両辞書間で「語釈」に費やされている言語量に違いがある。
- 3 項目の「漢字列」の和訓に沿った「語釈」となっている。
- 4 「語釈」に異なる語種の別語が置かれている。
- 5 「語釈」に同一の語種の別語が置かれている。

〈b 「語釈」の一部が異なる項目〉

- 1 （語の要素が異なる「語釈」）両辞書の間で「語釈」に用いられた語が多義語と単義語という違いがある。
- 2 （説明表現が異なる「語釈」）両辞書の間で「語釈」が限定的な語と、限定的でない語という違いがある。
- 3 （説明表現が異なる「語釈」）項目の「漢字列」の和訓に沿った「語釈」となっている。

〈c 「語釈」が増加、または減少している項目〉

- 1 「語釈」の増加により語義の限定がみられる項目がある。
- 2 「語釈」の増加により語義が多義となっている項目がある。
- 3 「語釈」の減少により語義が限定されなくなる項目がある。
- 4 「語釈」の減少により語義が単義となっている項目がある。
- 5 「語釈」の減少がみられても語義に変化がない項目がある。

#### 4. 『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』索引の漢字

ここからは『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の索引にみられる、漢字の注記についてみていく。『漢語字類』の「索引」、『[校正／増補] 漢語字類』の「目次」には収載されている項目の頭字が掲示されているが、その中には漢字についての注記がされ



ている。『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の注記について説明しながら、どのような漢字が掲載されているのか例をあげて考察する。

初めに『漢語字類』の「索引」の注記について説明する。「索引」1丁表を例にすると、項目の頭字が「一」「三」「下」「不」「再」「兩」と続き、「兩」の下には「兩ニ／同シ」とある。同じ丁には他にも、「丁」の下に「叮ト／通ス」、「事」の下には「亼ニ／同シ」などがある。注記には「〇ニ同（全）シ」と、「〇ト通ス」の二種類が確認できる。

「漢語字類序例」の漢字についての記述を引用する。なお、引用部分には句読点を補った。「[…] 字ニ正文アリ、変体アリ、省アリ、俗アリ、同音同義ニシテ字体各異ルモノアリ。若シ其一ヲ知テニヲ知ラサレハ、索引ニ於テ蓋シ惑フ。故ニ索引中各部ニ分属スル所ノ字、悉ク之ヲ聯記シ、又、各字ノ下ニ於テ某字某ト同シ、某ト通スト記ルス[…]」とある。

「某字某ト同シ」「某ト通ス」の注記は、頭字の漢字に複数の「かたち」がある場合に、項目が収載されている箇所が分かるようにするための手立てであることが分かる。しかし、「同シ」と「通ス」の違いについては辞書内では述べられていない。

次に『漢語字類』の「索引」1丁表から2丁表の中で、注記のある漢字の一部を掲出する。先に「索引」の頭字の漢字、その後に注記を載せた。なお、表示できない「かたち」については仮にアルファベットの大文字を用いて表示して別途説明を加える。

1	兩	兩ニ同シ	
2	爾	[爾 A] 尔ニ全シ	[爾 A] 下が「用」の形
3	弔	吊ニ同シ	
4	年	季ニ全シ	
5	乞	[乞 A] ニ同シ	[乞 A] 1、2 画目が「ト」の形
6	亂	[亂 A] 乱ニ全シ	[亂 A] 7 画目から 12 画目までが「冊」の形
7	丁	叮ト通ス	
8	事	亼ニ同シ	
9	亡	[亡 A] ニ同シ	[亡 A] 1、2 画目が「入」の形
10	卒	卒ニ全シ	
11	企	[企 A] ニ同シ	[企 A] 「止」の部分が連綿している（草書体）
12	伴	陽ト通ス	
13	修	脩ニ全シ	

14	倜	倜ト同シ	
15	[僧 A]	僧ニ全シ	[僧 A] 右側の「田」の4画目が二点の形
16	僥	僥ト通ス	
17	[并 A]	并 [併 A] ニ全シ	[并 A] [併 A] 「并」の1、2画目が「八」
18	眞	[真 A] ニ同シ	[真 A] 8画目から10画目が「大」の形
19	與	与ニ全シ	
20	同	[全 A] ニ同シ	[全 A] 「工」の部分が「ユ」の形

注記には「〇ニ同シ」と「〇ニ全シ」が見られるが、例20に頭字「同」の注記があることから、意味上の区別はされていないものと考えられる。「索引」の注記においても「同」「全」の二つの「かたち」が用いられており、実際に辞書内で使用されている漢字には「かたち」のバリエーションがあることが確認できる（以降、引用を除いて、注記は「同シ」に統一して表す）。「同シ」と「通ス」は、「索引」2丁裏「創」の注記に「戠ニ全シ又／勑瘡ト通ス」とあるため、「同シ」と「通ス」は区別がされていることが分かる。また、「同シ」にあげられている漢字は基本的に立項されていないのに対し、「通ス」にあげられている漢字には立項されているものもある。例えば12「倂」の「陽ト通ス」であれば、「倂」は10丁表、「陽」は128丁表に立項されている。このように「同シ」と「通ス」の注記には辞書内での機能に違いが確認できる。

『漢語字類』の「同シ」の注記の中には書体が異なっていると考えられる例が含まれている。11「企」は「[企 A] ニ／同シ」とあるが、[企 A] は「止」の部分の点画が連続した「かたち」となっている。他にも、8丁表「武」は「[武 A] ニ／同シ」とあり、[武 A] も同じように「止」の点画が連続した「かたち」となっている。これらの漢字は「止」の部分の点画が連続した、いわば「草書体」に近い「かたち」をしており、一つの漢字の中に異なる「書体」の「かたち」が混在しているように見える。[企 A] [武 A] は漢字を構成する「止」の点画だけが「草書体」のように連続しているが、それ以外の部分は点画が分かれており連続していない。このことは、一つの漢字の「かたち」全体が「草書体」になっているのではなく、漢字を構成する「止」という「パーツ」に「書体」の違いがみられる例といえる。関連して、10丁裏「正」には「[正 A] ニ／同シ」とあり、[正 A] は点画が連続した「草書体」となっている。このように、頭字として立てられている「企」「武」「正」は点画が連続しない「楷書体」の「かたち」、「同シ」注記にあげられてい

る〔企 A〕〔武 A〕〔正 A〕は、一部または全体の点画が連続した「草書体」の「かたち」をしている。注記にはこのような漢字の対応も確認できる。

次に『〔校正／増補〕漢語字類』の「目次」の注記について説明する。『〔校正／増補〕漢語字類』の「目次」は『漢語字類』とは異なり、頭字が挙げられている欄内ではなく、欄上に「凡凡同」「功功同」「无無通」のように「〇〇同」という組として注記が掲載されている（以降、このような漢字の組を「組」と呼ぶことにする）。次に、『〔校正／増補〕漢語字類』の「目次」1 丁表から 2 丁表の中で、注記の組の一部を掲出する。

1	〔乞 A〕 乞同	〔乞 A〕 1、2 画目が「乚」の形
2	凡凡同	
3	〔亡 A〕 亡同	〔亡 A〕 1、2 画目が「入」の形
4	𠂇比同	
5	吊〔弔 A〕 同	〔弔 A〕 3 画目の始点が 2 画目と繋がらず「巾」の形
6	〔分 A〕 分同	〔分 A〕 上がひとがしらの形
7	〔今 A〕 今同	〔今 A〕 ひとがしらの下が「亅」の形
8	〔切 A〕 切同	〔切 A〕 「七」が「土」の形
9	无無通	
10	𠂇左同	
11	功功同	
12	〔召 A〕 召同	〔召 A〕 「刀」が「ソ」の形
13	𠂇世同	
14	〔幼 A〕 幼同	〔幼 A〕 上が「幺」、下が「力」の形
15	本本同	
16	𠂇𠂇俗	
17	冊冊同	
18	𠂇多同	
19	攷考同	
20	兇凶通	

組には「同」「通」「俗」の 3 種があり、全体としては「同」の組が多く、「通」「俗」

の組は少数であった。「例言」に漢字の組についての記述がある。「凡ソ字ニ正俗アリ。異体アリ音通アリ。今之ヲ目次ノ上層ニ標記シ。以テ初学ニ示ス […]」とあることから、「正俗」は「俗」、「異体」は「同」、「音通」は「通」と対応していると考えられる。『漢語字類』の注記にはなかった「俗」が追加されている。また、『[校正／増補] 漢語字類』に場合においても、「同」と「俗」の組は基本的にどれか一つの漢字のみが頭字として立項されているのに対し、「通」の組には両方の漢字が立項されているものもある。「通」については「例言」に「某某通ト記スハ、本文中の両処ニ互見スル者ナリ。」とあるため、別々に立項されている漢字への注記であることが分かる。9 の「无無通」を例にすると、「无」は 16 丁裏、「無」は 121 丁裏に立項されている。9 の組は「目次」匡郭内の「无」の上部に置かれているため、使用者が「无」の項目を探しているときのための注記であることが分かる。20「兇凶通」の場合も、組は匡郭内の「兇」の上部に置かれている。「兇」は 25 丁裏、「凶」は 11 丁裏に立項されている。この場合、「兇は凶と通ず」という意味合いであると思われる、別々に立てられている頭字を関連付けるための注記であることが分かる。

「同」の組の場合は、例えば 2「凡凡同」であれば「目次」匡郭内には「凡」が立てられているが、「凡」の方は立項されていない。「同」の組の大半は、組の「同」字の一番近くに位置する漢字（例では「凡」の位置）が頭字として立項されている。「俗」の組も同じように組の「俗」字の一番近くに位置する漢字のみが立項されている。これらは「凡は凡に同じ」「叫は叫の俗字」という意味合いであると思われる。「同」と「俗」の組の漢字はいわゆる「異体字」の関係にあると考えられる。（本章で用いる「異体字」の用語は「形」「音」「義」のうち、「形」が異なる漢字の対応を指すこととする。）「同」と「俗」のうち、「俗」の方は「例言」に「正俗」とあることから、組の漢字に対して「正」と「俗」の判断がされていることが分かる。「叫叫俗」の場合は、立項されていない「叫」が「俗」、「目次」匡郭内に立項されている「叫」の方が「正」と判断されていたと考えられる。

『[校正／増補] 漢語字類』巻頭の「例言」の文章中に使われている漢字には、「目次」欄上の組にある漢字も見られる。例えば「例言」1 丁表 2 行目の「年」であれば、「目次」欄上には「季年同」の組がある。「目次」の匡郭内には「年」が立てられており、それと同じ「かたち」が「例言」でも使用されている。1 丁表 3 行目「近来」の「来」は「来来同」があるが、匡郭内に立項されているのは「來」の方である。「来」の場合は匡郭内に

立てられていない方の「かたち」が用いられている。匡郭内に立てられていない方の「かたち」が「例言」に用いられている例は他に、「凡」（「凡凡同」）、「本」（「本本同」）、「〔所 A〕」（「〔所 A〕 所同」）、「〔訓 A〕」（「〔訓 A〕 訓同」）であった。〔所 A〕は左側が「ツ」に似た形で、『大漢和辞典』では 52 番が与えられている。〔訓 A〕は右側が「荒」字の 7 画目から 9 画目と同じ形であり、『大漢和辞典』には記載がない。このように、「目次」匡郭内に立てられていない方の「かたち」も「例言」では使用されており、辞書全体で使用されている漢字には「かたち」にバリエーションがあることが確認できる。したがって、それらの「かたち」のバリエーションは、大枠としては「同じ」ととらえられていることになる。

『漢語字類』と『〔校正／増補〕漢語字類』の索引の注記は、辞書の使用者が索引から見出し項目にたどり着くための手立てとして載せられていると考えられる。そこには辞書の使用者が想定されており、当該時期にある程度通用していた漢字の「かたち」が索引の頭字や注記として載せられていると推測できる。さらに言うと、「頭字の漢字」と「注記に載せられている漢字」との間には、編者の漢字についての認識が表れている。編者はこれらの漢字を「異なる「かたち」である」と認識した上で区別をおこなっている。例えば「凡凡同」であれば、「凡」と「凡」を「同じ」ものだといったん認めて、しかし「かたち」は「異なる」ということも同時に認識されていたと考えられる。「頭字の漢字」と「注記に載せられている漢字」の間にはどのような違いがあるのか調査することにより、当該時期における「異体字」の認識を明らかにすることができると考える。

## おわりに

本章では『漢語字類』と『〔校正／増補〕漢語字類』の「項目」と「漢字」の二点に注目して対照をおこなった。一点目の「項目」については、『漢語字類』のみにみられる項目「削除項目」、『〔校正／増補〕漢語字類』のみにみられる項目「増補項目」、両辞書にみられる項目「共通項目」に整理した。次に「共通項目」について、両辞書間で「語釈」が異なる項目の分析と考察をおこなった。二つの辞書を対照することにより、「削除項目」「増補項目」「共通項目」があることを明らかにし、先行研究では言及されていなかった「削除項目」の存在を指摘した。本章での調査を通して、ある辞書をもとにして新たな辞書を編纂する際に、どのような手続きがおこなわれるのかを明らかにした。

ここで追記として、両辞書間の「語釈」に共通してみられる事象についても触れておく。

「語釈」には別語が置かれている場合と、語より長い単位のものがある。前者の場合、見出し語には同義語が存在していることになる。そのような「語釈」は和語の場合と漢語の場合がある。和語の場合には、見出し漢語と「語釈」の和語における、語義を介した「結びつき」を観察することができる。漢語の場合は、見出しの漢語の語義を「語釈」に置かれた漢語で説明していることになり、「漢語」の語義を「漢語」の言い換えによって説明している。このことから、「語釈」に置かれている漢語は見出しの漢語よりも一般的に通用していた漢語であったと考えられる。また、「語釈」は片仮名書きであるため、漢字から離れた状態でも理解される漢語が置かれていると考えてよいだろう。「語釈」に用いられている漢語にはこのような特徴があることが考えられる。「語釈」に用いられている漢語に注目することは、当該時期の漢語群の内部構造を知るための手がかりの一つとなりうると考える。

二点目の「漢字」については、両辞書の索引部分の漢字の注記について取り上げ、各辞書の注記の形式を説明しながら、どのような漢字が掲載されているのかについて例をあげて考察した。『漢語字類』には「同シ」「通ス」、『[校正／増補]漢語字類』には「同」「通」「俗」の注記があるが、「同(シ)」と「俗」は「異体字」に係る注記と考えられる。今後の展開として、「頭字の漢字」と「注記に載せられている漢字」の「同」の組に注目した調査や、これらの「辞書体資料」と、同時期の「非辞書体資料」の対照調査などが考えられる。このような調査を通して、「異体字」にまつわる事象や、実際の漢字使用の中で「辞書体資料」に提示された「異体字」がどのように位置づけられるものなのかを明らかにすることができると考える。

## 注

(1) 『漢語字類』と『[校正／増補]漢語字類』のテキストは架蔵本を使用し、必要に応じて『明治期漢語辞書体系』（大空社、1996年）を使用した。架蔵本の刊記は、『漢語字類』では「明治二己巳初春發兌／庄原謙吉纂輯／東京書林 小石川傳通院前／鴈金屋清吉」、『[校正／増補]漢語字類』は「明治九年二月十四日版權免許／同年六月三十日出版／（略・住所）／編輯人 莊原和／（略・住所）／出版人 青山清吉」とある。これらは『明治期漢語辞書体系』の影印と同じ刊記である。

(2) 山田忠雄（1981）『近代國語辭書の歩み その模倣と創意と』（三省堂）。

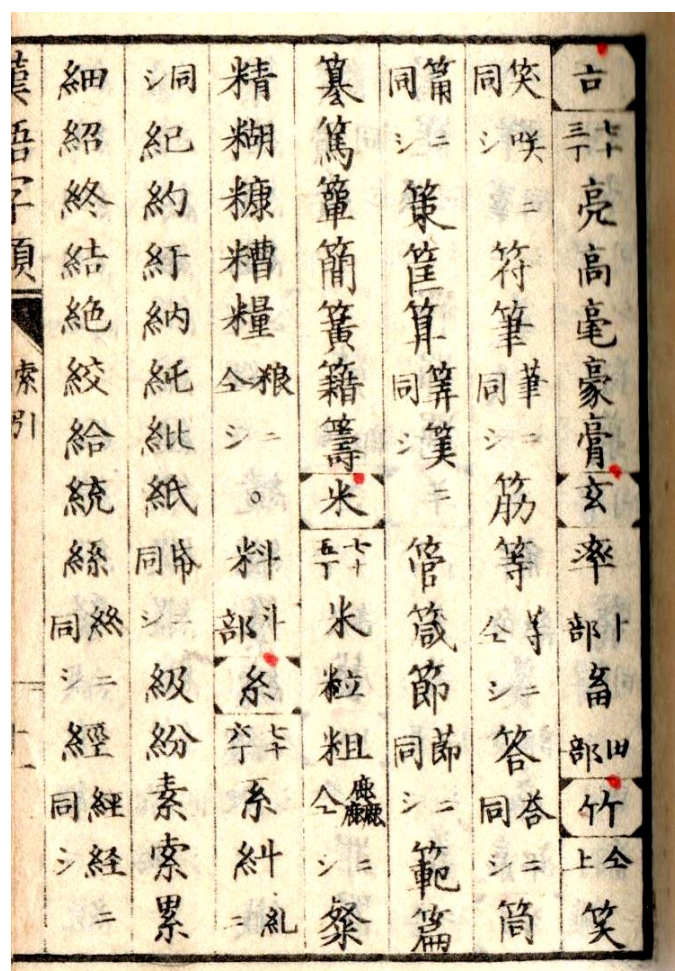
- (3) 松井利彦（1990）『近代漢語辞書の成立と展開』（笠間書院）。
- (4) 今野真二（2011）『漢語辞書論攷』（港の人）。
- (5) 本章では「楷書体」と「行書体＋草書体＝行草書体」という枠組みで漢字書体をとらえる。
- (6) 両辞書の楷書部分の「一字縦書き」について、二字漢語の漢字列の場合は横書きがされているようにも見えるが、二字以上の場合は二行の縦書きがされているため、二字漢語の場合も一字の縦書きととらえるのが自然だと考える。
- (7) 『雅俗節用』は村田徹典によって編纂された漢語辞書で、1876（明治9）年に刊行された。項目の構成は行草書体の漢字列の右側に平仮名の語形、下に一字縦書きで楷書の漢字列、その下に平仮名で語釈が置かれている。項目内は『漢語字類』や『[校正／増補] 漢語字類』に似た構成となっている。
- (8) 辞書体資料の調査範囲について、宮田和子（1999）「井上哲次郎『訂増英華字典』の典拠―増補訳語を中心に―」（『英学史研究』32号）では『訂増英華字典』の「A」「L」「Y, Z」を調査範囲とし、「最初、中央、最後部を調査することで、辞書全体の特徴がよみとれると考えたからである」と述べている。
- (9) 『漢語字類』の版面では二字以上の繰り返しを表す「くの字点」の記号が用いられているが、紙面の構成の都合上、このように表示した。
- (10) 山田俊雄（1978）『日本語と辞書』（中央公論社）。
- (11) 「統」の漢字字体は『漢語字類』では最終画が欠画した「かたち」が用いられている。『[校正／増補] 漢語字類』においては欠画はみられなかった。

#### 引用・参考文献（五十音順）

- 今野真二（2011）『漢語辞書論攷』港の人
- 松井利彦（1990）『近代漢語辞書の成立と展開』笠間書院
- 宮田和子（1999）「井上哲次郎『訂増英華字典』の典拠―増補訳語を中心に―」『英学史研究』32号
- 山田忠雄（1981）『近代國語辞書の歩み その模倣と創意と』三省堂
- 山田俊雄（1978）『日本語と辞書』中央公論社
- 江守賢治（1981）『楷行草総覧』NHK出版
- 『明治期漢語辞書大系』第2巻 大空社 1996年
- 『明治期漢語辞書大系』第27巻 大空社 1996年



【図1】『漢語字類』「總目」4丁表



【図2】『漢語字類』「索引」11丁表





回	灰	夷	兇	列	攷	豸	瓜	冊	叫	本	勞	世
因	灰	夷	凶	列	考	多	瓜	冊	叫	本	幼	世
同	同	同	通	同	同	同	同	同	俗	同	同	同
灰	交	字	只	冊	白	令	迄					
成	并	名	囚	矛	以	幼	刊					
刑	兇	各	打	四	出	末	世					
至	全	考	立	勿	北	未	史					
妄	弛	再		代	叫	他	四					
伏	舟	朽	畫	仔	市	用	叩					
企	夷	列	行	必	母	失	旦					
先	匡	耳	江	瓜	玉	本	正					
因	臣	合	多	可	田	巧	犯					

【図4】『[校正／増補]漢語字類』「目次」2丁表

回	灰	夷	兇	列	攷	豸	瓜	冊	叫	本	勞	世
因	灰	夷	凶	列	考	多	瓜	冊	叫	本	幼	世
同	同	同	通	同	同	同	同	同	俗	同	同	同

【図4】の欄上の組（拡大図）

成灰 臣匡夷 舟

【図5】『[校正／増補] 漢語字類』「辞書部分」の例（26丁表）

## Ⅱ『[校正／増補] 漢語字類』における漢字字形のバリエーションについて

### はじめに

「Ⅱ」では1876（明治9）年に刊行された漢語辞書『[校正／増補] 漢語字類』<sup>(1)</sup>にみられる漢字字形について整理と分析をおこない、「異体字」<sup>(2)</sup>の持つ内部構造を明らかにすることを試みる。「Ⅰ」では『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の目次にみられる注記について言及してきたが、本章では『[校正／増補] 漢語字類』の「目次」欄上の組と「辞書部分」にみられる漢字の「かたち」についてより詳しく分析と考察をおこなう。

『[校正／増補] 漢語字類』は「目次」匡郭内に見出し項目の頭字の1字形が提示されているが、「目次」の欄上にはその頭字と「異体字」の関係にある複数の漢字字形が注記として載せられている。また、「辞書部分」の各項目においても複数の漢字字形が確認できる。辞書内の各箇所に「異体字」の関係にある複数の漢字字形が確認できることから、この辞書内の漢字字形について調査することにより、当該時期の「異体字」がどのような構造を持っているのかを考察する。

### 0. 「Ⅱ」で用いる用語について

佐藤栄作（2013）は文字について「実現形とそれが基づくもの」を「字形」と「字体」と呼び、それについて「私たちはその字の字体に基づいて書きます。書かれたものはその字の字形です。字形は見えますが、字体は物理的存在ではないので、私たちの脳の中に」あるもので、「字形は具体的なある図形ですが、字体はその観念です」（p. 6）と述べ、「字形」と「字体」の定義をしている。「カタカナの「ロ」には「ロ」の字体があり、それがいろいろな書体（かたちの上である特徴を帯びる）で実現したものが「ロ」の字形」（p. 7）と説明している。このことは、「字体」（観念として存在）は書かれるときに「書体」を帯びて書かれ、その書かれたものが「字形」（実現形）である、と言い換えることができる。

この「字体」「書体」「字形」の定義をもとにして、調査対象とする『[校正／増補] 漢語字類』について考えると、資料内に書かれた実現形である「字形」とそれが持つ「書体」は観察ができるが、観念である「字体」は単純には観察ができないことになる。過去の資料を用いて漢字について観察するとき、現代に共有されている「字体」差の観念と、観察対象とする時代に共有されていた「字体」差の観念が合致しているかは分らないと思わ

れる。例えば、本章で使用する『[校正／増補] 漢語字類』の中に「A」と「A´」の二つの「字形」が観察できたとする。私たちの目にはこの二つの「字形」が異なる「字体」であると判断ができたとしても、その資料の編纂者や同時代の使用者には「A」と「A´」は「字形差」であり、同じ「字体」であると判断がされている可能性もある。その資料の中で用いられている「A」と「A´」が異なる「字体」であるとするには、何らかの手続きが必要であるとする。そのため、本章では『[校正／増補] 漢語字類』内の漢字を「書かれたもの」とであるという前提に基づき「字形」ととらえ、その「字形」が『[校正／増補] 漢語字類』の中でどのように「字形」あるいは「字体」として認識されていたかという判断はひとまず措くことにする。

以上の理由から、本章では資料内の漢字の「かたち」について言及する際、書かれた実現形であるという考えから「字形」（または「漢字字形」）という語を用いる。「字形」は「楷書」などの「書体」をともなって実現すると考える。その上で、漢字は基本点画からなる「パーツ」の組み合わせによって構成されている、という考えをとる。この考え方は、佐藤栄作（2013）の「いくつかの基本点画は組み合わさって部品となり、その部品がいくつか組み合わさって一字の字体となります。」（p. 85）という言説による。引用部には「字体」の語が出てくるが、本章で使用する『[校正／増補] 漢語字類』では「字体」の判断を保留しているため、同一のパーツで構成され、かつ、パーツの位置が同じであると判断できる字形を「同じ字形」と表現する。また、パーツやパーツの位置が異なると判断できる字形を「異なる（パーツからなる）字形」と呼ぶことにする。

## 1. 『[校正／増補] 漢語字類』の書誌と構成

### 1-1. 『[校正／増補] 漢語字類』の書誌

『[校正／増補] 漢語字類』は莊原和によって編纂された漢語辞書で、1876（明治9）年に刊行された。7年前の1869（明治2）年刊行の『漢語字類』（庄原謙吉編纂）に手を入れる形で編纂された。「庄原謙吉」と「莊原和」は同一人物であり、『漢語字類』の編纂者が自身で「校正増補」をおこなって『[校正／増補] 漢語字類』を編纂したと考えられている。『[校正／増補] 漢語字類』巻頭の「増補漢語字類例言」によると『漢語字類』出版から時間が経ち、再刻にあたり「是ニ於テ重テ校訂シ。冗ヲ汰シ新ヲ補ヒ」、『[校正／増補] 漢語字類』として出版する旨が書かれている。（なお、「例言」の引用部の漢字は現行の漢字字



体に改めた。) 松井利彦 (1990) によると収録語 (項目数) は 9795 語となっている。『漢語字類』の収録語 (項目数) は 4340 語とあるので、概算で約 5000 語の見出しが増補されていることになる。

## 1-2. 『[校正／増補] 漢語字類』の構成と体裁

『[校正／増補] 漢語字類』<sup>(3)</sup> は巻頭に「増補漢語字類例言」(以下、「例言」と呼ぶ)、次に「増補漢語字類目次」(以下、「目次」と呼ぶ) が置かれている。便宜上、この二つを除いた部分を「辞書部分」と呼ぶことにする。本章は「目次」と「辞書部分」に掲載された漢字字形についての考察をおこなう。そのため、本節では『[校正／増補] 漢語字類』全体の構成について説明した後に、「目次」と「辞書部分」に分けてそれぞれの体裁について説明する。

まず、構成について述べる。項目の配列は、見出しの漢字一字目 (以下、「頭字」と呼ぶ) の総画数順であり、頭字が共通する漢語が類聚されている。巻頭の「例言」には「前刻 (稿者注・『漢語字類』を指す) 収載ノ例。甚ダ搜索ニ便ナラス。今改テ画引ノ体トナス。

(後略)」と記述があり、『漢語字類』での頭字の部首の画数順による配列から、総画数順の配列に改めたと述べている。この配列方法により、本書は「漢字」から「語形」や「語義」を調べるための漢語辞書であることが分かる。

### 1-2-1. 「目次」について

「目次」(「I」【図 4】p38 参照) は匡郭内を格に分け、総画数ごとに項目群の頭字が配列されている。なお、本章では「辞書部分」で頭字類聚された項目をまとめて「項目群」と呼ぶことにする。匡郭内は半丁で 9 段×8 行=72 格に分けられ、最大で半丁に 72 字が掲載されている。格内には頭字と「辞書部分」の丁数が載せられており、漢語の頭字の総画数によって「辞書部分」の項目の掲載丁数が検索できる。「目次」は 1 丁表から 19 丁表までとなっている。収録されている頭字の総画数は 33 画の「麤」が最多である。

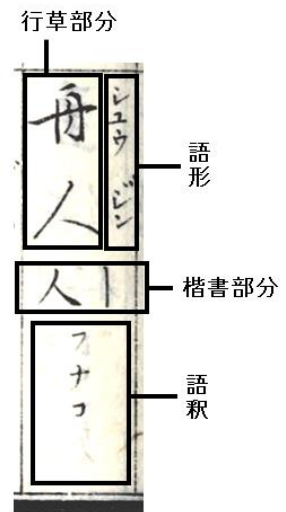


【図 1】

「目次」の匡郭の欄上には「[久 A] 久同」(【図 1】1 丁表の版面の一部) のように複数の字が「同」や「通」、「俗」の判断をともなってあげられている。本章ではこのような「目次」欄上にみられる複数の字を「目次」欄上の組」と呼ぶことにする。「目次」欄上の組、匡郭内の頭字はすべて楷書体で書かれている。

### 1-2-2. 「辞書部分」について

次に「辞書部分」について説明する。「辞書部分」(「I」【図5】p39 参照)の版面は匡郭内が半丁で3段×8行=24格に分けられている。匡郭内には同じ頭字の漢語の項目が類聚されている。格内の項目の構成は(【図2】)、格内に行草書とみられる見出しの漢字列が置かれている(以下、「行草部分」と呼ぶ)。その右側に見出し漢語の語形が片仮名表記で置かれ、その下に楷書の漢字列が置かれている(以下、「楷書部分」と呼ぶ)。その下には片仮名表記の語釈が置かれている。本章では「行草部分」と「語形」を合わせて「見出し」と呼び、「見出し」「楷書部分」「語釈」を合わせて「項目」と呼ぶことにする。



【図2】

「行草部分」と「楷書部分」については巻頭の「例言」に「草行ヲ以テ書シ。下楷字ヲ附スルハ。仍ホ前例(稿者注・『漢語字類』を指す)ニ依ル。」とある。この言説から、項目の上部の漢字列は「草行」、下部の漢字列は「楷」で表すという意識がされていると分かる。

「辞書部分」の「行草部分」には書体差による実現形の違いとは別に、頭字とは異なるパーツからなる字形が確認できる。例えば頭字「國」(91丁表)では、「國」以外に「圀」の字が用いられているのが確認できる。このことについては「3. 『[校正／増補] 漢語字類』の字形の分析」で分析をおこなう。

## 2. 先行研究

『[校正／増補] 漢語字類』の先行研究には山田忠雄(1981)、松井利彦(1990)、今野真二(2011)がある。山田忠雄(1981)では『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の見出しの一部を対照し、『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』には一部の項目に対して増補、削除、修正がおこなわれていることを指摘している。松井利彦(1990)では『[校正／増補] 漢語字類』の「例言」にある「是ニ於テ重テ校訂シ。冗ヲ汰シ新ヲ補ヒ。以テ書買ニ付ス。」に注目し、『漢語字類』との対照を通して「新ヲ補」って新漢語が増補されている点、「校訂」として項目に変更がされている点を指摘している。特に「校訂」について

内容による分類をおこない、どのような点に手が入れているのかを明らかにしている。今野真二（2011）は『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の項目の「改訂増補」について先行研究の再検討をおこなっている。

松井利彦（1990）は『漢語字類』が後続の漢語辞書に多大な影響を与えたことを指摘している。この指摘をふまえると、『[校正／増補] 漢語字類』は『漢語字類』に同一人物が手を入れているという点で注目に値すると考える。しかし、今まで『[校正／増補] 漢語字類』の研究は多くはされておらず、また、先行研究では『漢語字類』との対照を通して両辞書の違いを明らかにすることに主眼を置いた研究がおこなわれてきた。

なお、先行研究では『[校正／増補] 漢語字類』の「目次」欄上の組についての指摘や、辞書内の漢字字形についての調査はおこなわれておらず、本章で提示する「目次」欄上の組の総数は稿者によるものである。

### 3. 『[校正／増補] 漢語字類』の字形の分析

「1-2」では、「目次」欄上に複数の字形を組としたものがあること、「辞書部分」に「目次」の頭字と異なるパーツからなる字形が確認できることを指摘した。本章では「目次」欄上の組と「辞書部分」の字形について例をあげながら分析を試みる。初めに「3-1」で「目次」欄上の組、次に「3-2」で「辞書部分」の字形を分析する。

#### 3-1. 「目次」欄上の組

本節では「1-2-1」で触れた「目次」欄上の組について分析をおこなう。「目次」欄上の組の判断には「同」「通」「俗」の3種がある。組は全部で410組あり、その内「同」は377組、「通」は24組、「俗」は9組ある。「目次」欄上の組については巻頭の「例言」に以下の記述がある。「一 凡ソ字ニ正俗アリ。異体アリ音通アリ。今之ヲ目次ノ上層ニ標記シ。以テ初学ニ示ス。某某通ト記スハ。本文中両処ニ互見スル者ナリ。宜シク各部ニ就テ照会スベシ」。この記述によると、頭字に「正俗」「異体」「音通」などの複数の「字」がある場合、「目次」欄上にそれらを併記していることになる。「正俗」「異体」「音通」を「目次」欄上の組と対応させると、「正俗」は「俗」、「音通」は「通」に対応すると考えられるので、「異体」は欄上の「同」と対応すると思われる。この「異体」などの定義については辞書内で詳しく言及がされていないため詳細は不明である。しかし、「正俗」「異体」「音通」



という3つのカテゴリーが立てられているので、「異体」は「正俗」とは別の概念であるとするのが自然である。つまり、「俗」「同」「通」の字形の組はそれぞれ異なる判断基準によって立てられていると考えられる。本章ではこのうち、例数が多くあり、かつ「異体字」の問題に関わると思われる「同」の組を取り上げる。

紙幅の関係上、「目次」1丁表から2丁裏の途中までの「同」の34組を【表1】として以下に掲載する。なお、表示できない字形については仮にアルファベットの大文字を用いて表示し、字形が特定できるように別途説明を加える。(なお、字形の説明には「I」の【図4】p38の画像を用いる場合がある)

【表1】 「目次」欄上の組（1丁表から2丁裏の途中まで）

	「目次」欄上の組	「目次」 丁数	[A] の字形の説明（大漢和番号）
1	[乞A] 乞	1丁表	[乞A] 1、2画が「ト」・大漢和 2776
2	凡凡	1丁表	
3	亾亾	1丁表	
4	[久A] 久	1丁表	[久A] 「Ⅱ」【図1】参照・大漢和 119
5	𠂔比	1丁表	
6	吊 [吊A]	1丁裏	[吊A] 「吊」の3画目の始点が2画目と繋がらず、「巾」の形をとる
7	[分A] 分	1丁裏	[分A] 上がひとがしら
8	宀宀	1丁裏	「宀」実際の字形は「几」ではなく「儿」「宀」・大漢和 7056
9	[今A] 今	1丁裏	[今A] ひとがしらの下が「亅」の形・大漢和 H009
10	[切A] 切	1丁裏	[切A] 「七」が「土」・大漢和 1878
11	龙左	1丁裏	
12	切功	1丁裏	

13	瓦 [瓦 A]	1 丁裏	[瓦 A] (「瓦」字との明確な違いが判断できないため保留とする)
14	[召 A] 召	1 丁裏	[召 A] 「刀」が「ソ」・大漢和 3268
15	忝世	2 丁表	
16	[幼 A] 幼	2 丁表	[幼 A] 上が「幺」、下が「力」・大漢和 9194
17	本本	2 丁表	
18	冊冊	2 丁表	
19	瓜 [瓜 A]	2 丁表	[瓜 A] 「ム」が「レ」の形 「I」【図 4】の「目次」欄上の組を参照
20	彡多	2 丁表	
21	攷考	2 丁表	
22	[列 A] 列	2 丁表	[列 A] 「I」【図 4】の「目次」欄上の組を参照
23	[夷 A] 夷	2 丁表	[夷 A] 「I」【図 4】の「目次」欄上の組を参照
24	灰 [灰 A]	2 丁表	[灰 A] 1、2 画目が交差する・大漢和 18858 「I」【図 4】の「目次」欄上の組を参照
25	囧因	2 丁表	
26	扌捍	2 丁裏	
27	汚汙	2 丁裏	
28	回囧回	2 丁裏	
29	刂州	2 丁裏	
30	収収	2 丁裏	
31	季年	2 丁裏	
32	仝同	2 丁裏	
33	[死 A] [死 B] 死	2 丁裏	[死 A] 「匕」が「人」 [死 B] 1 画目の「一」が「ト」
34	[安 A] 安	2 丁裏	[安 A] 2 画目がワ冠を貫く

「同」は2字形の組としてあげられていることが多いが、最大では5字形がみられる（「帰皈」[帰A]<sup>(4)</sup> 歸同」・17丁表）。「同」の組は最後に位置する字形が「目次」匡郭内の頭字に立てられていることが多い。例えば「功同」の組であれば「目次」匡郭内には「功」が立てられている。このように「目次」欄上の組は「目次」匡郭内の頭字に関係付けて提示がされている<sup>(5)</sup>。「目次」欄上の組は、編者が、複数の字形を「異なる」字形であると認識した上で「同」としてまとめる、という判断をおこなっている。次に「組」となっている字形について、どのような「違い」のある漢字が「組」とされているのかを分析する。分析にあたり、漢字は基本点画からなる「パーツ」の組み合わせによって構成されているという考え方にもとづいて話を進める。まずは【表1】の組から数例をみていく。

1「[乞A] 乞同」の例では、[乞A]は上のパーツが「ト」となっている字形である。[乞A]の字形は『大漢和辞典』で2776番が与えられている。この組の字形の場合、下のパーツ「乙」は共通しているので、字形が「異なる」という判断は、上部のパーツの違いにあると考えられる。

8「宀同」は「うかんむり」と「あなかんむり」というパーツの違いがある。このパーツの対立は「富同」（「目次」10丁表）にもみられる。次に、16「[幼A] 幼同」の場合は、[幼A]は上が「幺」、下が「力」の字形である。同一のパーツで構成されているが、パーツの位置が異なる、いわゆる「動用字」が組となっている。表外の「号同」（「目次」11丁表）の場合は、「号」に対する「號」には「虎」のパーツがあり、構成するパーツの数に違いがある。前者の「号」は後者の「號」を省略した字形といえる。

「目次」欄上の組の漢字には、先に説明したようにパーツの違いによって説明できる組を確認できる。事象を整理するために、「パーツ」による組の分類を試みる。「目次」欄上にはどのような字形が組にされているのかを検討する。分類は「同」の2字形の組を対象とする。「目次」欄上の組を①「パーツの位置が異なる組」、②「パーツが異なる組」、③「パーツの数が異なる組」、④「共通するパーツがない組」、⑤「その他」に分類していく。例えば、「群羣同」のように両字形でパーツの位置が異なる、いわゆる「動用字」の組は①「パーツの位置が異なる組」に分類する。「功同」のように両字形の間に共通するパーツ「工」と、「刀」と「力」の対応するパーツがある場合は②「パーツが異なる組」に分類する。「咨諮同」は共通する「咨」のほかに、両字形の間に「言」のパーツの有無がみられる。このような組は「パーツの数が異なる」と見て③「パーツの数が異なる組」に分類する。「邕州同」のように異なるパーツで構成された字形の組を④「共通するパーツがない組」に分類

する。⑤「その他」は複数の分類に当てはまる組や、判断ができない組をここに入れる。

【表 2】 ①「パーツの位置が異なる組」(全例)

	「目次」欄上の組	丁数	「A」の字形の説明
1	凡凡	1 丁表	
2	[幼 A] 幼	2 丁表	[幼 A] 上が「ㄣ」、下が「力」・大漢和 9194
3	味和	3 丁裏	
4	胃胸	7 丁裏	
5	棋碁	10 丁表	
6	群羣	11 丁表	
7	慙慚	12 丁裏	
8	覓魂	13 丁裏	
9	槩概	14 丁表	
10	隣鄰	14 丁表	
11	蘓蘇	18 丁表	
12	鑒鑑	18 丁裏	

①「パーツの位置が異なる組」【表 2】

「パーツの位置が異なる組」は、同一のパーツ（または点画）で構成されているが、パーツの位置が異なる字形の組を指す。いわゆる「動用字」である。2「[幼 A] 幼」の [幼 A] は「ㄣ（ようへん）」が上に、「力」が下に位置する字形である。7「慙慚」の組は「心」と「忄」のパーツが対応しているが、これは位置によって形が変わる同じパーツと見なし、ここに分類する。①に該当する組は【表 2】が全例で、②③④に比べると少数である。

【表 3】 ②「パーツが異なる組」(一部)

	「目次」欄上の組	丁数	「A」の字形の説明
1	[乞 A] 乞	1 丁表	[乞 A] 1、2 画目が「ト」・大漢和 2776
2	匚亡	1 丁表	

3	吊 [弔 A]	1 丁裏	[吊 A]「弔」の 3 画目の始点が 2 画目と繋がらず、「巾」の形をとる
4	[分 A] 分	1 丁裏	[分 A] 上がひとがしら
5	[今 A] 今	1 丁裏	[今 A] ひとがしらの下が「テ」の形・大漢和 H009
6	[切 A] 切	1 丁裏	[切 A]「七」が「土」・大漢和 1878
7	龙左	1 丁裏	
8	切功	1 丁裏	
9	彡多	2 丁表	
10	[夷 A] 夷	2 丁表	[夷 A] 「I」【図 4】の「目次」欄上の組を参照

## ②「パーツが異なる組」【表 3】

「パーツが異なる組」は、構成するパーツの一部が異なる字形の組を指す。1「[乞 A] 乞同」の [乞 A] は先にも触れたように上のパーツ「(にんべん)」が「ト」となっている字形である。[乞 A] の字形は『大漢和辞典』で 2776 番が与えられている。「目次」欄上の組は、編者が複数の字形を「異なる」字形であると認識した上で「同」と判断していると考えられる。この組の字形の場合、下のパーツ「乙」は共通しているので、「異なる」字形の判断は上部のパーツの違いにあると考えられる。パーツの違いでは 2「[匚 A] 匚」は 2 画までが「入」と「一」という違いがある。4「[分 A] 分」は「(ひとがしら)」と「八 (はちがしら)」という違いがある。「目次」欄上の組の大半はこのパターンに分類できる。

## 【表 4】 ③「パーツの数が異なる組」(一部)

	「目次」欄上の組	丁数	「A」の字形の説明
1	扌扌	2 丁裏	
2	倝倝	3 丁裏	(「倝」実際は「二」でなく「一」) 「倝」大漢和 521
3	[卑 A] 卑	4 丁裏	[卑 A] 1 画目の点がない形・大漢和 21745 (または 2739)

4	咨諮	5 丁表	
5	[帥 A] 帥	5 丁裏	[帥 A] 1 画目の点がない形
6	准準	7 丁裏	
7	号號	11 丁表	
8	蜂蠶	11 丁裏	
9	点點	16 丁裏	
10	厘釐	17 丁表	

③「パーツの数が異なる組」【表 4】

「パーツの数が異なる」は「省略」字形に関して分類を設けた。漢字を構成するパーツの数に違いがある組を指す。7「号號」を例にすると、「号」に対して、「號」には「虎」のパーツがあり、この2つの字形は構成するパーツの数に違いがある。前者の「号」は後者の「號」の省略字形といえる。ここでは「パーツの数」というまとめ方をしているが、5「[帥 A] 帥」一画目の点の有無のように、点画の有無にまつわるものもここに分類する。

【表 5】 ④「共通するパーツがない組」(一部)

	「目次」欄上の組	丁数	「A」の字形の説明
1	刖州	2 丁裏	
2	季年	2 丁裏	
3	仝同	2 丁裏	(「仝」 実際は「工」でなく「ユ」の形)
4	叟更	3 丁表	
5	邨村	3 丁表	
6	[吝 A] 吝	3 丁裏	[吝 A] 「㐁」の上に「ㄨ」・大漢和 48956
7	[所 A] 所	4 丁表	[所 A] 「𠂔」・大漢和 52
8	[灑 A] 洒	5 丁裏	[灑 A] 篇がにすいの形
9	礮砲	7 丁表	
10	艸草	7 丁表	
11	庄莊	8 丁裏	

④「共通するパーツがない組」【表 5】

「共通するパーツがない」は1「𠂔州」のように、組の字形の違いがパーツに関係なく、両字形に共通するパーツのみられない組をここに分類する。ここに分類される組は、「パーツ」の点では両字形に共通性が少ない組といえる。7「[所 A] 所」の「所 A」の字形は『干禄字書』にも確認できる。「[所 A] 所」「竝上俗／下正」とされており、『干禄字書』内での判断は「所 A」を「俗」とする。『[校正／増補] 漢語字類』と『干禄字書』の関係は辞書内で言及されていないので、あくまで参考としてではあるが、【表 5】の範囲内では2「𠂔年」の字形の組み合わせが『干禄字書』内にみられる。

【表 6】 ⑤「その他」(一部)

	「目次」欄上の組	丁数	「A」の字形の説明
1	冊冊	2 丁表	
2	[光 A] 光	2 丁裏	[光 A] 上が「火」下が「几」か) 大漢和 18854
3	冰冰	2 丁裏	
4	恠怪	3 丁裏	
5	[朋 A] 朋	4 丁表	[朋 A] 「冂」の中に「氷」
6	案按	5 丁表	
7	卹恤	5 丁裏	
8	俟俟	5 丁裏	
9	𡇗旁	6 丁裏	
10	[寂 A] 寂	9 丁表	[寂 A] うかんむりに「𡇗」・大漢和 7192

⑤「その他」【表 6】

「その他」は前記の①から④の複数に当てはまる組、また、パーツに関係する違いと判断ができない組をここに入れている。

ここまで「目次」欄上の組を構成するパーツの違いによって分類を試みた。「目次」欄上の組は②「パーツが異なる組」に該当する例が多く、「同」の組は字形の違いがパーツに関係している場合が多いことが分かった。

### 3-2. 「辞書部分」の漢字列（行草部分）にみられる字形

「辞書部分」項目群の「行草部分」には、「1-2-2」で触れたように、項目の漢字列には行草書体で書かれた字形以外に、頭字と異なるパーツからなる字形が確認できる。例えば「坐」の項目群であれば、「行草部分」に「𪚩」の字形をあげた項目が確認できる。これは「坐」の書体差による実現形とは異なり、おそらく「字体差」のある字形が挙げられているのだと思われる。本章では「字体」の判断を保留しているので、ひとまず「坐」と「異なるパーツからなる字形」とみることにする。このように、「目次」匡郭内の頭字とは異なるパーツからなる字形が確認できる場合がある。その字形は「目次」欄上の組にみられる字形もあるが、「𪚩」の例のように組にない字形も確認できる。「𪚩」の例のように「目次」欄上の組にあげられていない字形が「行草部分」に確認できる例のうち、紙幅の関係上 14 例を【表 7】にまとめた。

【表 7】 「辞書部分」の「行草部分」に確認できる字形（一部）

	目次匡郭 内の頭字	目次欄上 の組	行草部分に みられる字形	辞書部分丁 数	[A] の字形の説明 (大漢和番号)
1	幻		幻 [幻 A]	16 丁表	[幻 A] 「ㄠ」が上にある形
2	夷	[夷 A] 夷	夷 [夷 A] [夷 B]	26 丁表	[夷 A] 「I」【図 4】を参照 [夷 B] 「大」の下に「弓」・大漢 和 5853
3	坐	[坐 A] 坐	坐𪚩	40 丁裏	(「𪚩」大漢和 5028)
4	姦	姦姦	姦姦姦	63 丁裏	(「姦」大漢和 6045)
5	挫		挫 [挫 A]	78 丁裏	[挫 A] 右が「𪚩」
6	射		射𪚩	79 丁裏	(「𪚩」大漢和 23974)
7	座		座 [座 A]	82 丁表	[座 A] 中が「𪚩」
8	國	国國	國囙	91 丁表	(「囙」大漢和 4759)
9	堂		堂堂	98 丁裏	(「𪚩」大漢和 4968)
10	移		移 [移 A]	104 丁表	[移 A] 右が「𪚩」
11	條		條條	104 丁裏	(「條」大漢和 14486)
12	傍		傍旁	113 丁表	(「旁」大漢和 13637)



13	激		激 [激 A]	177 丁裏	[激 A] 4 画目から 12 画目までが「身」
14	獨	独獨	獨 [獨 A]	180 丁裏	[獨 A] 「蜀」の右側に「犬」・大漢和 20726

例えば 8「國」であれば、「目次欄上の組」は「国國同」、「目次匡郭内の頭字」は「國」であるが、「行草部分にみられる字形」には「國」以外に「圀」が確認できる。「圀」の字形は「行草部分」にのみ確認できる字形である。また、6「射」は「目次欄上の組」にはないが、「行草部分にみられる字形」には「射」と「𠂔」がみられ、頭字の「射」とは異なる字形である「𠂔」が確認できる。

2「夷」を例として分析をしていく。「夷」は「目次欄上の組」には「[夷 A] 夷同」とあるが、「行草部分にみられる字形」には「夷」と [夷 A] 以外に「夷 B」の字形がみられる（「夷 B」の字形は「𠂔」【図 5】26 丁表の画像を参照・p39）。「夷 B」は「大」の下に「弓」の字形で、『大漢和辞典』では 5853 番が与えられている。各箇所を確認できる字形をまとめると以下ようになる。

「目次」欄上の組	「目次」の頭字	「辞書部分」の「行草部分」
[夷 A] 夷	夷	夷 [夷 A] [夷 B]

字形「夷」は三か所すべてに共通して確認できるが、[夷 A] は「目次」欄上の組と「行草部分」の二か所、[夷 B] は「行草部分」にのみ確認できる。このように、「目次」欄上の組、「行草部分」の二か所は「目次」の頭字とは異なる字形が提示されている場合がある。

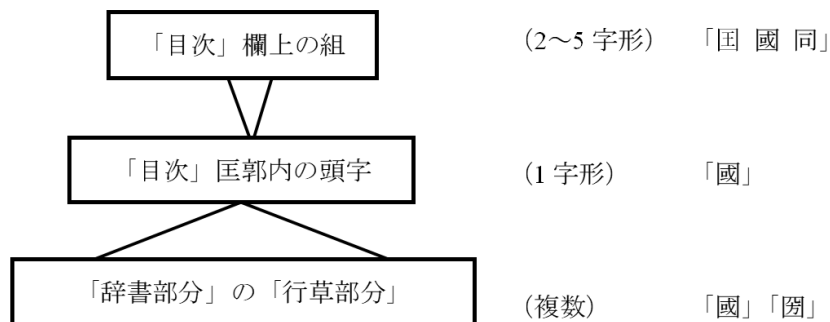
表にあげた他の例もみていく。3「坐」は「目次欄上の組」に「[坐 A] 坐同」（[坐 A] は「口」二つの下に「土」の字形）とあるが、「行草部分にみられる字形」には「坐」と「𠂔」が確認できる。14「獨」は「目次欄上の組」には「独獨同」とあるが、「行草部分にみられる字形」には「獨」と「獨 A」（「獨 A」は「蜀」の右側に「犬」の字形）が確認できる。このように、「辞書部分」の項目の「行草部分」には、「目次」欄上の組にあげられた字形とも、「目次」匡郭内の頭字とも異なる字形が用いられている場合がある。

ここまで、『[校正／増補] 漢語字類』の内部にみられる字形について、「目次」欄上の組

と「辞書部分」に分け、「目次」匡郭内の頭字とは異なる字形がみられることを指摘した。

#### 4. 『[校正／増補] 漢語字類』内部の字形

『[校正／増補] 漢語字類』は「目次」欄上の組、「目次」匡郭内、「辞書部分」の「行草部分」にそれぞれ「目次」匡郭内の頭字とは異なる字形が確認できることを前章で指摘した。辞書内の「目次」欄上の組、「目次」匡郭内の頭字、「辞書部分」の「行草部分」にみられる漢字字形について図にすると下の【図 3】のようになる。右側には辞書内の各箇所



【図 3】 『[校正／増補] 漢語字類』内の字形のバリエーション

【図 3】での「「目次」欄上の組」と「「目次」匡郭内の頭字」は楷書体、「「辞書部分」の「行草部分」」は行草書とみられる書体の字形である。「辞書部分」の「行草部分」には書体差による字形のバリエーション以外にも、「國」と「圀」のように、頭字とは異なるパーツからなる字形も確認できる。

「目次」欄上の組は、組の複数の字形のうちの 1 字形が匡郭内の頭字として立てられている。組の複数の字形には「頭字の 1 字形」と「頭字ではない複数字形」という分類ができる。「目次」が「辞書部分」の項目にたどり着くための「索引」であることから、「目次」欄上の組のうち、匡郭内の「頭字の 1 字形」は「頭字ではない複数字形」よりも「標準的」であった可能性がある。

「辞書部分」の「行草部分」は書体差のある字形以外にも、「圀」のように「目次」欄上の組や匡郭内の頭字とも異なるパーツからなる字形が確認できる。この部分には「頭字」

の様々なバリエーションを提示しているといえる。「辞書部分」の「行草部分」には頭字の字形のバリエーションを類聚して提示する目的があり、「字形のバリエーション」には書体差だけではなく、いわゆる「異体字」も含まれていることが分かる。この三か所は異なる目的で編集されているが、「囿」のように頭字の字形のバリエーションの提示を目的とした「辞書部分」の「行草部分」のみにみられる字形もある一方で、「國」のように三か所に共通してみられる1字形がある点は注目に値すると考える。この1字形は「目次」匡郭内の頭字に立てられていることから、「標準的」な字形である可能性が考えられる。この辞書には「標準的」と考えられる1字形と、それ以外の字形、という「違い」が現れていると考えられる。今後の課題として、今回の調査と考察によって確認できた漢字の字形の関係性が、同時期の「非辞書体資料」と対照した時にどのように出現するのかという調査が考えられる。このことについては「Ⅲ」で調査をおこなう。

『[校正／増補] 漢語字類』と同時期に出版された他の漢語辞書においても、「辞書部分」に頭字とは異なる字形が提示されている辞書が、少数ではあるが確認できる<sup>(6)</sup>。また、今野真二（2008）では『童蒙必讀維新御布告往来』（1872年・明治5）が漢字字形のバリエーションを提示する意図を持つ文献であることを指摘している。『[校正／増補] 漢語字類』と同じように漢字字形のバリエーションの提示を意図した資料があることから、今後、このような資料についても合わせて検討していく必要があると考える。

## おわりに

本章では前半に『[校正／増補] 漢語字類』の書誌と体裁についてまとめ、後半では辞書内にみられる漢字字形について分析と考察をおこなった。『[校正／増補] 漢語字類』の「目次」欄上には複数の字形が組としてあげられているが、「頭字の1字形」と「頭字ではない複数字形」に分けられる点、また、「辞書部分」の「行草部分」には「目次」欄上の組や匡郭内の頭字とは異なるパーツからなる字形が確認できる点を指摘した。『[校正／増補] 漢語字類』内にはこのように漢字字形のバリエーションがみられるが、中には「辞書部分」の「行草部分」のみに確認できるものや、三か所すべてに用いられている1字形などがあることを明らかにした。

『[校正／増補] 漢語字類』は「漢語辞書」であるので、最終的にたどり着く項目は「単漢字」ではなく「漢語」単位である。索引としての「目次」は「単漢字」単位で提示され

ているが、「辞書部分」は基本的に「漢語」の単位で提示される。本書は「(単漢字の) 字典」ではないため、「漢語」を収載する「辞書部分」に、日本において実際には使用されていない字形をバリエーションとして提示しているとは考えにくい。ある程度通用していたものが収載されている可能性が考えられる。また、「辞書部分」に提示された複数の字形は「単漢字」単位で通用するとともに、字形を入れ替えても「漢語」として通用すると考えるのが自然である。「通用」という視点からは、「目次」欄上の「同」のほかに「通 (通用)」の組もあわせて検討する必要がある。

『[校正／増補] 漢語字類』が出版されていた 1876 (明治 9) 年ごろまでに刊行されていた『太政官日誌』の字形と、今回考察した『[校正／増補] 漢語字類』に提示されている字形とを対照し、「目次」欄上の組の漢字字形の位置づけを探ることを今後の課題としたい。

#### 注

- (1) 本章で用いる『[校正／増補] 漢語字類』は架蔵本を使用し、必要に応じて『明治期漢語辞書大系』(大空社、1996 年)を参照した。架蔵本の刊記は「明治九年二月十四日版權免許／同年六月三十日出版／(略・住所)／編輯人 莊原和／(略・住所)／出版人 青山清吉」とある。これは『明治期漢語辞書大系』の影印と同じ刊記である。
- (2) 本章での「異体字」は、漢字の持つ「形音義」のうち「音」「義」が共通し、「形」が異なる漢字、と定義しておく。
- (3) 書名については外題と見返し部分は「[校正／増補] 漢語字類」と書かれているが、本書巻頭の「例言」と「目次」と柱題では「増補漢語字類」、「辞書部分」の内題は「莊原和漢語字類」、「辞書部分」の尾題では「莊原和増補漢語字類」となっており、各箇所では書名が異なっている。本章では外題にのっとり『[校正／増補] 漢語字類』と呼ぶ。
- (4) [帰 A] は「歸」の左下「止」のパーツが「大」の字形である。
- (5) 「目次」の頭字に対していわゆる「異体字」を掲出する漢語辞書は他にも、先述の『漢語字類』や、梅岳隠士『漢語統貂』(1873 年刊・明治 6)、池田鯉『漢語字解』(1874 年刊・明治 7) などがある。『漢語字類』の「目次」の頭字の掲出方法は『[校正／増補] 漢語字類』とは異なり、「左 [龙ニ／全シ]」のように割書きで表され、格ではなく罫線の中に追い込みで頭字を掲出している。『漢語統貂』と『漢語字解』もこれに似た形式で頭字の「異体字」が掲出されており、『[校正／増補] 漢語字類』とは掲出方法が異なる。『[校正／増補] 漢語字類』が『漢語字類』を増補したものであるとすると、『[校正／増補] 漢語字類』

では頭字の「異体字」の掲出方法を変更していることになる。

(6) 「異体字」関係にある複数の字形を「辞書部分」の項目に掲出している辞書は『[校正／増補] 漢語字類』の他に、『新撰字類』(1870 年刊・明治 3) や、『新撰字解』(1874 年刊・明治 7)、などに確認できる。

#### 引用・参考文献（五十音順）

乾善彦（2003）『漢字による日本語書記の史的研究』塙書房

今野真二（2008）『消された漱石』笠間書院（p103、註 8）

今野真二（2011）『漢語辞書論攷』港の人

笹原宏之（2003）笹原宏之ほか『現代日本の異体字 漢字環境学序説』三省堂

佐藤栄作（1996）「漢字字体の「内省報告」のために」『国語文字史の研究』3 和泉書院

佐藤栄作（2013）『見えない文字と見える文字 文字のかたちを考える』三省堂

佐藤栄作（2015）「漢字の点画について―「字体エレメント」の再検討―」『論集』11

高田智和（2013）「字形・字体・字種と異体字」『日本語学』32—5 明治書院

松井利彦（1990）『近代漢語辞書の成立と展開』笠間書院

山田忠雄（1981）『近代國語辭書の歩み その模倣と創意と 上』三省堂

江守賢治（1981）『楷行草総覧』NHK 出版

### Ⅲ『[校正／増補] 漢語字類』『目次』欄上の組の漢字字形の位置付け－『太政官日誌』との対照を通して－

#### はじめに

「Ⅲ」では、「Ⅱ」でおこなった『[校正／増補] 漢語字類』の考察をもとにして、この辞書と同じ時期に刊行された「非辞書体資料」<sup>(1)</sup>である『太政官日誌』と漢字字形の対照をおこなう。ここまでの章で調査してきたように、明治時代初期に刊行された『[校正／増補] 漢語字類』は巻頭の「目次」の欄上にいわゆる「異体字」<sup>(2)</sup>の関係にあると考えられる複数の漢字字形が組として挙げられている。この「目次」欄上の組にあげられた複数の字形のうち、1字形が「目次」匡郭内に立てられていることから、「Ⅱ」では「目次」欄上の複数の字形の間には何らかの「違い」があり、特に「目次」匡郭内に立てられている1字形がより「標準的」である可能性を指摘した。

本章では、「Ⅱ」でおこなった指摘が、当該時期の「非辞書体資料」の一つである『太政官日誌』においてどのように現れるかを調査する。この調査により、『[校正／増補] 漢語字類』内の「目次」欄上の組にみられる「異体字」の関係性が、他の資料にどのように現れるかを明らかにし、当該時期の「異体字」が持つ構造について考察する。

まず「1.『[校正／増補] 漢語字類』の書誌と構成」と「2.『太政官日誌』の書誌」で『[校正／増補] 漢語字類』と『太政官日誌』の両資料の書誌について整理した上で、「3.『[校正／増補] 漢語字類』の組と『太政官日誌』の対照」では「目次」の欄上に提示された複数の漢字字形について、同時代の「非辞書体資料」のひとつである『太政官日誌』を例に使用状況の調査をおこない、調査結果から当該時期の「異体字」の構造について考察する。

#### 0. 用語の定義

本章で用いる用語の定義については、「Ⅱ」の「0.「Ⅱ」で用いる用語について」で引用した佐藤栄作（2013）の「字体」「字形」「書体」の定義を引き続き用いる。本章での考察を進める上で必要であるため、「Ⅱ」で説明した内容に再度ふれながら簡単に説明を加える。

資料内の漢字の「かたち」について言及する際、書かれた実現形であるという考えから

「字形」(または「漢字字形」)という語を用いる。その上で、漢字は基本点画からなる「パーツ」の組み合わせによって構成されている、という考え方をとる。「Ⅱ」で説明したように、過去の時代に書かれた資料をもとにして、漢字の「かたち」の認識について考察する場合、資料内に書かれた実現形である「字形」は観察できるが、観念である「字体」については何らかの手続きを経なければ観察ができないことになる。そのため、本章で用いる『[校正／増補] 漢語字類』では「字体」の判断を保留とし、同一のパーツで構成され、かつ、パーツの位置が同じであると判断できる字形を「同じ字形」と表現することにする。また、パーツやパーツの位置が異なると判断できる字形を「異なる字形」と表現する。

## 1. 『[校正／増補] 漢語字類』の書誌と構成

『[校正／増補] 漢語字類』は莊原和によって編纂された漢語辞書で、1876(明治9)年に刊行された。1869(明治2)年に刊行された『漢語字類』(庄原謙吉編纂)に手を入れる形で編纂された。「庄原謙吉」と「莊原和」は同一人物であり、『漢語字類』の編纂者が「校正増補」をおこなって『[校正／増補] 漢語字類』を編纂したと考えられている。松井利彦(1990)は『漢語字類』が後続の漢語辞書に多大な影響を与えたことを指摘している。その『漢語字類』をもとに、同一人物が「校正・増補」をしたという点で『[校正／増補] 漢語字類』は注目に値する資料であると考ええる。『[校正／増補] 漢語字類』巻頭の「増補漢語字類例言」(以下「例言」)には、『漢語字類』出版から時間が経っているため、再刻にあたり「是ニ於テ重テ校訂シ。冗ヲ汰シ新ヲ補」って『[校正／増補] 漢語字類』として出版する旨が書かれている(なお、「例言」の引用部の漢字は現行の漢字字体に改めた。以下も同じ)。

本章の調査には架蔵本の『[校正／増補] 漢語字類』を使用する<sup>(3)</sup>。架蔵本は縦18.1センチメートル、横12.2センチメートルで、表紙に「[校正／増補] 漢語字類 莊原和輯」の題簽が貼られている。刊記は「明治九年二月十四日版權免許／同年六月三十日出版／(略・住所)／編輯人 莊原和／(略・住所)／出板人 青山清吉」とある。

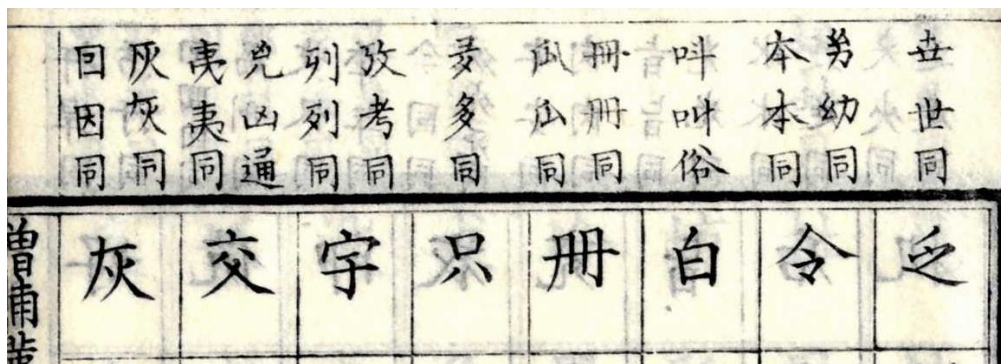
『[校正／増補] 漢語字類』全体の構成について述べる。巻頭に「例言」、次に「増補漢語字類目次」(以下「目次」)が置かれている。便宜上、この二つを除いた部分を「辞書部分」と呼ぶことにする。この三つの部分から本書は構成されているととらえることにする。

『[校正／増補] 漢語字類』は返り点が付された見出しも少数あるが、主に漢語が見出しと

して収録されている。松井利彦（1990）によると収録語（項目数）は9795語となっている。

「辞書部分」の項目の配列は、見出しの漢字1字目（以下「頭字」）の総画数順であり、頭字が共通する漢語が類聚されている。巻頭の「例言」には「前刻（稿者注・『漢語字類』を指す）収載ノ例。甚ダ搜索ニ便ナラス。今改テ画引ノ体トナス。（後略）」と記述があり、『漢語字類』での頭字の部首の画数順による配列から、総画数順の配列に改めたと述べている。この配列方法により、本書は漢語の頭字の「漢字」からその漢語の「語形」や「語義」を調べるための漢語辞書であることが分かる。

『[校正／増補] 漢語字類』巻頭の「目次」は匡郭内を半丁で9段×8行＝72格（最大）に分け、見出し漢字列の頭字を総画数順に配列している。格内には頭字と「辞書部分」の丁数が載せられており、漢語の頭字の総画数によって「辞書部分」の項目の掲載丁数が検索できるようになっている。「目次」の丁数は1丁表から19丁表までとなっている。



【図 1】『[校正／増補] 漢語字類』「目次」欄上の組（2丁表）

「目次」の匡郭の欄上（【図 1】）には「世同」のように複数の漢字が「同」や「通」、「俗」の判断をともなうて挙げられている。本章ではこのような「目次」欄上にみられる複数の漢字を「目次」欄上の組（または「組」）と呼ぶことにする。「目次」欄上の組は、匡郭内に挙げられた頭字にいわゆる「異体字」関係の複数字形がある場合に挙げられている。組は全部で410組あり、その内訳は「同」は377組、「通」は24組、「俗」は9組となっている。この三つのカテゴリーはそれぞれ異なる判断基準によって立てられていると考えられる。本章では例数が多く、また、いわゆる「異体字」の問題に関係すると思われる「同」の組について取り上げる。

「同」の組は最後に位置する字形が「目次」匡郭内の頭字に立てられていることが多い。例えば「世同」であれば、「目次」匡郭内には「世」の字形が立てられている。「目次」



匡郭内の頭字に立てられているのは1字形であるので、組のある頭字の場合は複数の字形の中から1字形を選択し、頭字として用いていることになる<sup>(4)</sup>。

## 2. 『太政官日誌』の書誌

本章の調査には『太政官日誌』を使用する。『[校正／増補]漢語字類』との対照資料とする理由としては、『[校正／増補]漢語字類』と近い時期に発行されている資料である点、また「異体字」を確定させるための条件が本資料に揃っている点による。後者については「3-1. 調査方法」で説明する。

調査に使用する『太政官日誌』について書誌と先行研究についてまとめる。『太政官日誌』は1868（明治元・慶應4）年2月から1877（明治10）年にかけて発行された。『国史大辞典』によると『太政官日誌』は「政府の機関紙で、官報の前身」としての役割を持ち、「布告・定書・被仰出書・御達書・御沙汰書などを編年式に収録し、内容的には、政体・神祇・外交・内乱・風俗・医学・学制などの各分野にわたっている。」とある。形態としては一号ずつ綴じられているものや、数号ずつ合綴されているものがある。朝倉治彦は『太政官日誌』第8巻（東京堂、1982年）の「書誌」において「全冊数は一七七冊である。この官庁日誌は、袋綴板本の形式で発行され、五年八月八十五号からは活字印刷となった」と述べている。

本章の調査には二つのテキストを使用する。一つは清泉女子大学蔵本（以下「清泉本」）、もう一つは石井良助編の影印本『太政官日誌』である。「清泉本」は縦21.5センチメートル、横14.7センチメートルで青色の表紙が付けられている。題簽はなく、10号ずつが和綴じで合綴されている。刊記は合綴された巻末にのみ付けられており、子持ち郭の内部に「官版 不許翻刻／御用御書物所／東洞院三條上ル町／村上勘兵衛／堀川二條下ル町／井上治兵衛」とある。第1号の1丁表には「安藤蔵書」の印が押されている。清泉女子大学附属図書館蔵本と同じ刊記、表紙の『太政官日誌』は第1号から第10号まで（慶應4年戊辰2月から同年4月、ID：00004921781）、第14号から第20号（慶應4年戊辰4月、ID：00004921799）、第21号から第30号（慶應4年戊辰5月から同年6月、ID：00004921806）の3冊1セットがある。

使用するもう一つのテキストは石井良助編の影印本『太政官日誌』第1巻（1980、東京堂）である。影印は国会図書館所蔵本を主な底本としている。第10号の末に刊記が付けら

れており、単郭の内部に「官版／御用／御書物所／芝三島町／和泉屋市兵衛」とある。版木は「清泉本」とは異なる。

松井利彦（1990）は『太政官日誌』に甲本・乙本・丙本の3種があることを指摘している（以下、p. 332 より引用）。

（甲）京都の村上勘兵衛と井上治兵衛によって出版された初版本。

現存のものは数号ずつ合綴。振り仮名は僅少。

（乙）数号ずつ合綴。刊記に「芝三島町 和泉屋市兵衛」とある。

甲本より振り仮名が多い。

（丙）五号ずつ合綴。第八冊まで刊記なし。第九冊目の刊記に「東

京芝明神前和泉屋市兵衛／同日本橋通壹丁目 須原屋茂兵衛」とあるもの。乙本と同版で、乙本より振り仮名が多く、熟字の左側にもある。

他にも、今野真二（2011）は10号分が合綴された丙本や、合綴されたセット内に甲本と丙本の刊記が混在したものがあることを指摘している。また、『太政官日誌』第8巻の「書誌」には刊記に「須原屋・和泉屋板と和泉屋・須原屋板」の順番が逆になった二連記本、「須原屋単独」の本、村上・井上・須原屋・和泉屋の四連記本などが確認できることを指摘している。

松井利彦（1990）の分類を参考にしながら、甲本・乙本・丙本それぞれに該当する主なテキストの刊記を以下にまとめる。

甲本：「官版 不許翻刻／御用御書物所／東洞院三條上ル町／村上勘兵衛／堀川二條下ル町／井上治兵衛」

乙本：「官版／御用／御書物所／芝三島町／和泉屋市兵衛」

丙本：「東京芝明神前 和泉屋市兵衛／同日本橋通壹丁目 須原屋茂兵衛」

「清泉本」は刊記に「村上勘兵衛」と「井上治兵衛」の二連記があるので「甲本」であるところでは判断する。石井良助編の影印本は「芝三島町／和泉屋茂兵衛」とあることから「乙本」であると判断する。本章では刊記をもとにして「甲本」を「井上本」、「乙本」

を「三島和泉屋本」、「丙本」を「明神和泉屋本」と呼ぶことにする。今回の調査の使用テキストは「井上本」である「清泉本」と、「三島和泉屋本」である石井良助編の影印本の2種類であることから、「三島和泉屋本」を指して「和泉屋本」と呼ぶことにする。

山口順子（2011）は「井上本」に分類される「横浜中央図書館蔵本の請求番号（322.1-86）」（A本）と「横浜中央図書館蔵で1-14号の合綴保存本（請求番号322.1-89）」（B本）、「名古屋市蓬左文庫蔵本（請求番号14-43）」（C本）の3冊を対象として第1号から第4号を調査し、一部に文章の違いが確認できることを報告している。論文中のA本の書誌によると刊記は「官版 不許翻刻／御用御書物所／東洞院三條上ル町／村上勘兵衛／堀川二條下ル町／井上治兵衛」となっている。この刊記は稿者の言う「井上本」と一致するが、合綴された「清泉本」とは異なり、A本は一号ずつ綴じが施されているとある。なお、BC本の刊記は論文中に記載されていないが、「A本に近似する」とあるので両本ともに「井上本」と同じ刊記を持つと仮定して話を進める。

山口順子（2011）の挙げたABC本の相違点と「清泉本」の該当箇所を対照すると、「清泉本」はおおむねB本の文章と一致しているが、第1号のみ山口順子（2011）が挙げるABC本の文章のどれとも一致しない。『太政官日誌』の版權および具体的な流通状況についてはさらなる調査が必要であると考え<sup>(5)</sup>。

『太政官日誌』に使用されている漢字字形（字体）の調査は松井利彦（1988）がおこなっている。『太政官日誌』を刊記によって「京都版」と「江戸版」とに分けた上で、『太政官日誌』の両版に「異体字」関係の複数の字形（字体）がどの程度用いられているのかを、82種の漢字を対象として第1号から第10号の間で用いられた「異体字」の総数を調査し報告している。

本章の調査では『[校正／増補] 漢語字類』に掲載された組を対象として『太政官日誌』との対照をおこなう。それにより明治初期の日本語使用者、辞書編集者の「異体字」に関わる「判断」を起点とした調査がおこなえると考え。

### 3. 『[校正／増補] 漢語字類』の組と『太政官日誌』の対照

#### 3-1. 調査方法

本章の調査には架蔵本の『[校正／増補] 漢語字類』、『太政官日誌』は「清泉本」の1冊目（第1号から第10号）と石井良助編の影印本『太政官日誌』第1巻を使用する。本章

では『太政官日誌』を例として、『[校正／増補] 漢語字類』の「目次」欄上に挙げられている「忝世同」のような複数の漢字字形が同時代の「非辞書体資料」にどのように用いられているのかを調査する。

『太政官日誌』を対照資料として用いる理由について補足する。『太政官日誌』の「井上本」と「和泉屋本」は本文に少しの違いはあるが、基本的には同一の内容を印刷した資料であるとみなせる。「同一の内容」というのは、両資料に書かれている文章、使用されている語句は基本的には同じであるということである。資料を用いて「異体字」の関係にある複数の字形について調査をおこなうには、対象とする複数の字形が同一の「音」と「義」を持ち、「形」のみが異なる関係にあることが保証される必要があると考える。『太政官日誌』の「井上本」と「和泉屋本」の同一箇所を対照し、異なる字形が確認できた場合、同じ文章中の同じ語句に用いられていることから「音」「義」が同一であることは保証され、「形」のみが異なる「異体字」の関係にある漢字とみなすことができると考える。

調査の方法について説明する。以下、「目次」欄上の組の複数の字形は仮にアルファベットで表示し、「同」の直前に位置するものを「A」として「BA 同」のように示す。「A」は「目次」匡郭内の頭字に用いられている字形である。本章では『[校正／増補] 漢語字類』の「目次」欄上の「同」の組と『太政官日誌』の漢字字形との対照をおこなう。『太政官日誌』の「井上本」と「和泉屋本」の同じ箇所を対照し、『[校正／増補] 漢語字類』「目次」欄上の組「BA 同」の「A」と「B」のどちらと同じ字形が使用されているのか、またはどちらとも異なるパーツで構成された字形（「その他」）が用いられているのかを調査する。対照する『太政官日誌』の調査範囲は第1号から第10号までとする。その範囲内で『太政官日誌』での使用例が10例以上ある63組のうち、紙幅の関係上、辞書内に掲載されている順番で前から22組を取り上げる<sup>(6)</sup>。

### 3-2. 調査結果と考察

以下の【表1】に『[校正／増補] 漢語字類』「目次」欄上の組と『太政官日誌』の調査結果を提示する。

【表 1】『[校正／増補] 漢語字類』「目次」欄上の組と『太政官日誌』の対照

	「目次」欄上の組		『太政官日誌』			備考
	A (頭字)	B	井上本		和泉屋本	
1	分	[分B]	1・3ウ2	B分ル	A分ル	[分B] 3画目の起点が 4画目の中程に 接する形
			2・1オ5	A分督	A分督	
			2・2オ6	A名分	A名分	
			2・3オ9	A當分	A當分	
			3・2ウ4	A相分り	B相分り	
	総数 A-61 B-12					
2	左	[左B]	1・1オ4	A左	A左	[左B] 「工」部分が 「七」の形
			2・3ウ7	A左	A左	
			5・2オ3	A左	A左	
			7・5オ2	B左	A左	
			9・4オ8	A左様	A左様	
	総数 A-25 B-3					
3	世	[世B]	1・1オ3	A世	A世	[世B] 【図1】の「目 次」欄上の組 を参照
			3・4オ1	A萬世	A萬世	
			5・5オ7	A世界	A世界	
			7・1ウ3	A後世	A後世	
			10・3オ3	A世人	A世人	
	総数 A-25 B-1					
4	本	本	1・1オ1	A本願寺	A本願寺	
			1・1オ6	A日本	A日本	
			4・3ウ2	A本座	A本座	
			4・6ウ5	A本國	A本國	
			7・2オ3	A本月	A本月	
	総数 A-62 B-0					
5	多	𠂔	1・6ウ6	A多難	A多難	
			4・6オ7	A幾多	A幾多	
			7・6オ5	A多分	A多分	
			8・6オ5	A多	A多	
			8・9オ8	A多事	A多事	
	総数 A-26 B-0					
6	列	[列B]	1・1オ5	A列座	A列座 (レツザ)	[列B] 【図1】の「目 次」欄上の組 を参照
			1・2オ1	A列藩	A列藩	
			3・7オ5	A列聖	A列聖	
			4・1オ2	A列侯	A列侯 (レツユウ)	
			4・5オ5	A列座	A列座	
	総数 A-48 B-0					
7	夷	[夷B]	3・3オ1	A蛮夷	A蛮夷 (バン井)	[夷B] 【図1】の「目 次」欄上の組 を参照
			3・3オ8	B攘夷	A攘夷	
			5・1オ4	B蝦夷地	A蝦夷地	
			8・4オ6	A蝦夷	A蝦夷 (エゾ)	
			8・4ウ4	A蝦夷地	A蝦夷地 (エソチ)	
	総数 A-24 B-4					

8	因	[因B]	1・5ウ2	A因て	A因て	[因B] 【図1】の「目次」欄上の組を参照
			2・3オ2	A因テ	A因テ	
			7・2オ7	A因州	A因州	
			7・7オ1	A因州	A因州	
			10・2オ4	B因循	B因循	
			総数 A-22 B-4			
9	州	効	5・9オ5	A神州（しんしう）	A神州（しんしう）	
			7・2オ2	A信州	A信州（シン）	
			7・2オ3	A甲州	A甲州（カウ）	
			7・2オ7	A因州	A因州	
			7・6オ2	A薩州長州	A薩州長州	
			総数 A-40 B-0			
10	年	[年B]	1・5オ3	A年を	A年を	[年B] 「季」の「子」部分が「千」になった形
			2・2ウ4	A四年	A四年	
			2・2ウ6	A八年	A八年	
			2・3オ1	A年限	A年限	
			3・3オ8	A近年	A近年	
			総数 A-48 B-0			
11	同	全	1・1ウ3	A會同	A會同	
			2・3オ6	A同	A同	
			3・1ウ9	A不同	A不同	
			4・2オ9	A同道	A同道	
			5・2ウ4	A同輔	A同輔	
			総数 A-158 B-0			
12	旨	[旨B]	1・1オ8	B旨意	B旨意（シイ）	[旨B] 「ヒ」部分が「上」になった形
			2・3オ1	B旨ト	B旨ト	
			3・5ウ5	B叡旨	B叡旨（エイシ）	
			4・4オ7	B勅旨	B勅旨	
			9・1ウ7	B趣旨	B趣旨	
			総数 A-0 B-70			
13	廷	[廷B]	1・1オ8	A朝廷	A朝廷（テウテイ）	[廷B] 「壬」の縦線が下に抜ける形
			1・1ウ3	A朝廷	A朝廷	
			1・2オ5	A朝廷	A朝廷	
			3・2ウ9	A朝廷	A朝廷	
			3・3ウ9	A廷	A廷	
			総数 A-58 B-0			
14	更	[更B]	1・5ウ3	A今更	B今更	[更B] 「丙」の下に「支」の形
			3・1オ6	A更始	A更始（カウシ）	
			3・3オ8	A更に	A更に	
			9・1オ5	A殊更	A殊更	
			10・1オ4	A更張	A更張（カウチャウ）	
			総数 A-19 B-1			
15	決	決	1・1ウ2	B裁決	A裁決（サイケツ）	
			2・1オ5	B定決	B定決	
			5・5オ2	B決スベシ	B決スベシ	
			7・1ウ3	B決而	B決而（ケツシテ）	
			8・7ウ1	B決定	A決定（ケツヂヤウ）	
			総数 A-4 B-16			

16	京	京	1・2ウ4	A京攝	A京攝（ケイセツ）	
			1・3オ2	A京師	A京師（ケイシ）	
			1・6オ2	A入京	A入京	
			2・1ウ4	A京畿	A京畿（ケイキ）	
			10・4オ7	B上京	A上京	
	総数 A-30 B-4					
17	和	味	1・5ウ6	A和親	A和親	
			2・5オ8	A宇和島	A宇和島	
			2・5ウ10	A仁和寺宮	A仁和寺宮	
			2・6オ10	A大和守	A大和守	
			3・2オ6	A和し	A和し	
	総数 A-38 B-0					
18	來	来	1・3オ7	B來ル	A來ル	
			1・5オ10	B往来	A往來	
			1・6オ3	B元來	A元來	
			3・3オ1	A渡來	A渡來	
			3・3オ2	A來港	A來港（ライコウ）	
	総数 A-29 B-45					
19	所	〔所B〕	1・2ウ4	A諸所	A諸所	〔所B〕 卷末の注（7） 参照
			1・2ウ8	A場所	A場所（バシヨ）	
			2・2ウ9	A議事所	A議事所	
			3・2オ7	A所以	B所以（ユエン）	
			3・6ウ8	B所	A所	
	総数 A-27 B-63					
20	定	〔定B〕	1・3オ10	A確定	A確定（カクテイ／カタクサダムル）	〔定B〕 「疋」が「之」 の形
			1・6ウ8	A決定	A決定	
			2・1オ5	A定決	A定決	
			3・5ウ2	B一定	A一定	
			7・7ウ2	B平定	A平定	
	総数 A-80 B-22					
21	勅	敕	3・5ウ6	A勅	A勅	
			4・3ウ10	A勅語	A勅語	
			4・4オ7	A勅旨	A勅旨	
			4・6オ4	A勅スル	B敕スル	
			4・6ウ7	A勅意	B敕意	
	総数 A-21 B-7					
22	拜	拝	1・3オ4	A拜謁	A拜謁（ハイエツ）	
			3・5ウ10	A拜趨	A拜趨（ハイシュ）	
			4・3ウ5	A拜	A拜	
			5・2ウ4	A拜送	A拜送（ハイソウ）	
			5・3オ5	A拜シ	A拜シ	
	総数 A-24 B-0					

【表1】のみかたについて説明を加える。左側の「目次」欄上の組の「A (頭字)」と「B」は『[校正／増補] 漢語字類』の「目次」欄上の組「BA 同」のそれぞれに位置する字形である。2「[左B] 左同」であれば「左」が「A」、「[左B] (左)」が「B」にあたる。「A」

の「左」の字形が「目次」匡郭内の頭字に立てられている。なお、表示できない字形については仮にアルファベットで表示し、「備考」で字形の説明を加えた。『太政官日誌』の欄では『太政官日誌』の対照範囲の中で組の漢字が使用されている丁数と用例を提示した。用例の箇所は「1・1 オ 4」のような数字によって「井上本」の丁数「第 1 号 1 丁表 4 行目」を表す。その右側に「井上本」と「和泉屋本」の用例を提示する。用例は紙幅の関係上、全体のうち 5 例を提示する。【表 1】の 2 を例にすると、組の「B」の字形「[左 B] (左)」と「A」の字形「左」の両方が『太政官日誌』の両本に確認できることが分かる。その下に「総数」として『太政官日誌』両本の「A」と「B」の各字形の用例数を提示する。用例数は「井上本」と「和泉屋本」の間での各字形の例数を合計しており、両本で「A」と「B」、または「その他」の字形が見られるかを分かるように示した。【表 1】の 2 の場合は、総数は「A - 25」「B - 3」とあり、「井上本」と「和泉屋本」の両本に組の「A」の「左」と「B」の「[左 B] (左)」の両字形が確認できることを表している。

【表 1】から読み取れる事柄について述べていく。【表 1】の 22 例の全体としては、組の「A」字形と「B」字形のどちらも『太政官日誌』内に用いられていることが確認できる。また、「A」「B」とは異なるパーツからなる「その他」の字形は『太政官日誌』には見られず、組の「A」か「B」の字形のどちらかが用いられていることが分かる<sup>(8)</sup>。このことは「同」の組全体に対して言える。

各例について見ていく。1「分」と「分 B」、2「左」と「[左 B] (左)」、3「世」と「[世 B] (世)」はどれも「A」と「B」の両字形が『太政官日誌』の両本に確認できた例である。1「分」の場合は「A」と「B」の両字形が「井上本」と「和泉屋本」のどちらにも見られたが、用例の全体としては「B」より「A」の字形の方が多く見られた。2「左」と3「世」の場合は「B」字形は「井上本」のみに確認できた。「井上本」には「A」と「B」の両字形が確認できたが、「和泉屋本」には「A」の字形のみが確認できた。他にも、7「夷」、16「京」、20「定」の場合も同じように「B」字形は「井上本」のみに確認できた。「井上本」には「A」と「B」の両字形が見られたが、「和泉屋本」には「A」字形のみが見られた。これらの例からは「井上本」には複数字形、「和泉屋本」では 1 字形が専用されていることが言える。これらの例とは別に、14「更」の場合は「井上本」には「A」字形のみが見られ、「和泉屋本」には「A」と「B」の両字形が見られた。どちらの場合も「A」字形が多く使用されているのが確認できる。

2「左」「左」の組について追記しておく。この組では「B」字形には「左」が置かれてい



るが、右側に同じパーツを持つ「佐」においても、人偏に「𠂔」となっている字形（「佐 B」とする）が「井上本」（3 号 4 丁裏 2 行目など）に確認できた。『太政官日誌』の同じ個所で「井上本」では「佐 B」、「和泉屋本」では「佐」が用いられていることから、「佐」と「佐 B」は「異体字」の関係にある字形だといえる。ここでの「左」と「𠂔」の「異体字」関係の複数字形の対立は、「佐」のように同じパーツを持つ別の漢字に対しても見られることが『太政官日誌』の中で確認できる。

4「本」と「𠂔」、5「多」と「𠂔」、6「列」と「列 B」の場合は両本で「A」の字形のみが使用され、「B」の字形が調査範囲内に確認できない例である。他にも 9「州」、10「年」、11「同」、13「廷」、17「和」、22「拜」が同じように両本で「A」のみが使用されている例であった。この例とは反対に、両本で「B」のみが使用されている例も 12「旨」と「旨 B」（旨）の 1 例がある。この例は組の「B」の「旨」の字形のみが『太政官日誌』に用いられている例である。このように「A」または「B」の一方の字形のみが使用されている組の例も確認できる。

【表 1】の対照結果としては『[校正／増補] 漢語字類』の組の「A」と「B」の両字形が『太政官日誌』内に用いられていると言える。このことは「同」の組の全体について言える。そして、対照結果に対する両字形の割合としては「A」の方が多く用いられていることが分かる。『[校正／増補] 漢語字類』の組の両字形が、同じ時期に発行された「非辞書体資料」のひとつである『太政官日誌』内にも使用が確認できることから、『[校正／増補] 漢語字類』の組には、同時期に刊行された「非辞書体資料」の中にも使用が確認できる「異体字」関係の複数の字形が挙げられていると言える。その上で組の「A」の字形が「目次」匡郭内の頭字に立てられていることと、『太政官日誌』内に多く用いられていることについて考察を加えたい。

### 3-3. 組の字形の位置づけに関する考察

『[校正／増補] 漢語字類』と『太政官日誌』の二つの資料はそれぞれ「辞書体資料」と「非辞書体資料」のひとつであり、異なる性質を持つ資料であるといえる。「辞書体資料」である『[校正／増補] 漢語字類』の「目次」は本文の見出し漢語を検索する目的で編纂されている。検索のための「目次」の頭字に選ばれている字形は、標準的・一般的に使用されていた字形である可能性が考えられる。また「目次」欄上に組のある字形についても、その中の「A」の 1 字形が頭字に立てられていることから、可能性として標準的・一般的な

字形の方を頭字として用いていることが考えられる。このような仮説を立てた上で話を進める。

組に挙げられた頭字のように、「異体字」関係の複数字形がある漢字の場合、「目次」の頭字を立てるためには複数字形の中から1字形を選び出す必要がある。複数字形から1字形を選ぶという点に注目すると、「目次」欄上の組に挙げられた複数の字形は「頭字に用いられた「A」の1字形」と、「頭字に用いられなかった「B」などの字形」の2種類に分類ができる。この「頭字に用いられた「A」の1字形」が先の仮説のように標準的・一般的に用いられていた字形であるとするならば、この辞書と同時代の「非辞書体資料」に使用されている字形にも重なりがあると予想される。

今回調査した『太政官日誌』との対照結果を、この「頭字に用いられた「A」の1字形」と、「頭字に用いられなかった「B」などの字形」の分類と合わせると、次のことが言える。『[校正／増補] 漢語字類』の組の字形は「A」「B」とともに『太政官日誌』両本の中での使用が確認できる。その上で頭字に用いられなかった「B」より、頭字に用いられた「A」の字形の方が今回の調査範囲では『太政官日誌』には多く使用されていることが分かる。このことから、『[校正／増補] 漢語字類』と『太政官日誌』の間で中心的に用いられている字形に重なりがあると言える。先の仮説では『[校正／増補] 漢語字類』の頭字に立てられた「A」字形が「標準的・一般的な字形」である説をとらえた。『[校正／増補] 漢語字類』と『太政官日誌』の間には中心的に用いられている字形（「A」）と、そうではない字形（「B」）に重なりがあることから、「A」字形がより「標準的・一般的な字形」で、「B」字形はその「標準的・一般的な字形」の周辺で用いられていた字形ととらえることができるのではないだろうか。

組の字形に「A」が「標準的・一般的な字形」、「B」がその「周辺の字形」という違いがあるのだとすると、【表1】の「A」の使用例が多く「B」の使用例が少数にとどまる傾向についても、標準的な「A」字形が中心に用いられ、「B」字形は周辺的に用いられていると説明できる。『[校正／増補] 漢語字類』は「A」「B」を組として掲載するが、実際には「A」字形が標準的に用いられる傾向にあったと言えるだろう。言い換えると、いわゆる「異体字」の関係にある「非標準的」と呼べる複数の字形が「標準的」な1字形の周辺を取りまいているという構造が『[校正／増補] 漢語字類』と『太政官日誌』との対照結果から観察される。今回の調査では『太政官日誌』を「非辞書体資料」の一例として取り上げ、『[校正／増補] 漢語字類』「目次」欄上の組の一部と対照をおこなった。今後、他の「非辞書体

資料」に対しても調査をおこない、今回の調査結果をもとにした考察が他の資料においても有効であるのかを調査していきたいと考える。

## おわりに

本章では前半に『[校正／増補] 漢語字類』と『太政官日誌』の書誌について整理をおこない、後半で両資料の漢字字形の対照をおこなった。『[校正／増補] 漢語字類』の組と『太政官日誌』の漢字字形を対照することにより、『[校正／増補] 漢語字類』の組の「A」「B」字形に「中心的に用いられている」、「周縁的に用いられている」という違いがあることを明らかにした。このことから「標準的」な「A」字形の周辺を取りまくかたちで「非標準的」な「B」が存在している構造が考えられる。『[校正／増補] 漢語字類』「目次」欄上の組からは、この時期の漢字字形の「標準的」と「非標準的」という位置付けができ、このことは明治初期の漢字字形のあり方を探るための手がかりになると考える。今回は『太政官日誌』を調査対象として取り上げ、先に述べたようなことが明らかになった。今後、『太政官日誌』のように「異体字」を確定するための条件の揃っている他の「非辞書体資料」も参照し、『[校正／増補] 漢語字類』「目次」欄上の組の字形の位置付けを探っていきたいと考える。

## 注

(1) 「辞書体資料」と「非辞書体資料」の定義は、今野真二 (2008) 「ある文献から情報を抜き出して「編集」といった「操作」が行なわれている、すなわち何らかのかたちで情報の取捨選択が行なわれている文献を「辞書体資料」とまず呼び、それに対して、そうしたことが行なわれていない文献を「非辞書体資料」と呼ぶ」ことにする (p. 50、註 6)、という排他的な概念設定によった。

(2) 本章で用いる「異体字」は、漢字の持つ「形音義」のうち「音」「義」が共通し、「形」が異なる漢字と定義する。

(3) 調査に用いる『[校正／増補] 漢語字類』は架蔵本を使用し、必要に応じて『明治期漢語辞書大系』(大空社、1996 年) を参照した。

(4) 『[校正／増補] 漢語字類』「目次」欄上の字形の組の典拠については、辞書の本文中に記述はなく、先行研究においても典拠の指摘はされていない。「目次」に挙げた漢字のいわゆる「異体字」を掲出する

漢字辞書は『[校正／増補] 漢語字類』の他、先述した『漢語字類』や梅岳隠士『漢語統貂』(1873 年刊・明治 6)、池田観『漢語字解』(1874 年刊・明治 7) などがある。

(5)「井上本」と「和泉屋本」には収録されている記事に移動があることが確認できた。「井上本」で第 8 号 8 丁表 1 行目から 9 丁裏 6 行目に収録されている「議事所ニテ差出候見込書二通」の記事は、「和泉屋本」では第 9 号 1 丁表 1 行目から 2 丁裏 8 行目に収録されている。

(6)『[校正／増補] 漢語字類』の「今」「安」「別」の組は『太政官日誌』内での字形の違いの判断が難しいため、調査対象から外した。

(7) [所 B] は「**所**」の字形にあたる。

(8)「来」「年」「世」の『太政官日誌』での字形の判断について、『太政官日誌』内には「来」の 2、3 画目が繋がって横線になっている字形、「年」は 4 画目が横線になっている字形、「世」は 4 画目が省略され、2、3 画目が外側に払われている字形がそれぞれ少数確認できた。本章では江守賢治『楷行草総覧』を確認した上で「A」の書体差であると判断し、今回の調査では「A」の例数に含めた。この例数は少数であるため、対照結果に大きな変動はない。

#### 引用・参考文献（五十音順）

今野真二 (2008)『消された漱石 明治の日本語の探し方』笠間書院

今野真二 (2011)『漢語辞書論攷』港の人

佐藤栄作 (2013)『見えない文字と見える文字 文字のかたちを考える』三省堂

松井利彦 (1988)「太政官布告の漢字」『漢字講座第 8 巻 近代日本語と漢字』明治書院

松井利彦 (1990)『近代漢語辞書の成立と展開』笠間書院

山口順子 (2011)『『太政官日誌』の発刊 史料による実態の考察』出版研究 42 号

『国史大辞典』吉川弘文館 1997 年

『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店 1999 年

江守賢治 (1981)『楷行草総覧』NHK 出版

『明治期漢語辞書大系』第 27 巻 大空社 1996 年

石井良助編『太政官日誌』第 1 巻 東京堂 1980 年

清泉女子大学附属図書館蔵本『太政官日誌』(慶応 4 年戊辰 2 月から同年 4 月 ID : 00004921781)

#### IV『玉石童子訓』の書体と振仮名について—江戸期整版本の表記体考察のために—

##### はじめに

ここまでの「Ⅰ」「Ⅱ」「Ⅲ」章では明治時代初期の「辞書体資料」である『[校正／増補]漢語字類』を用いて、当該時期の漢字、特に「異体字」が持つ構造について調査と考察をおこなった。これらの章では「漢字」に注目してそれ自体が持つ構造や関係性を明らかにすることを試みたが、後半の「Ⅳ」「Ⅴ」章では「漢字」を含めた、より大きな枠組みとしての「表記体」に注目した調査を試みる（本章で用いる「表記体」は「言語をどのように文字化するか」という表記の在り方を指す）。本章では江戸時代後期の「非辞書体資料」である『玉石童子訓』を調査対象とする。『玉石童子訓』は大半の漢字列<sup>(1)</sup>に振仮名が施されている、いわゆる「総ルビ」の表記体を選択しているテキストであるが、振仮名が施されていない少数の漢字列も確認できる（本章では、漢数字と少数の漢字列を除いた漢字列に振仮名が施されている表記体を便宜的に「総ルビ」と呼び、考察を進める）。このテキストを用いて、「総ルビ」の表記体（以下、「総ルビ」表記体と呼ぶ）のテキストの中でどのような漢字列に振仮名が施されていないのかを調査する。また、「玉石童子訓」の版面には複数の書体が併用されていることが確認できる。版面上の振仮名が施されていない漢字列は「草書体」で印刷される傾向にあり、振仮名と書体の間に関係性があることがうかがえる。本章では版面上の振仮名と書体についての調査をおこない、振仮名が施されていない漢字列と書体の関係性について明らかにしたいと考える。

##### 1. 用語の定義と本章の構成

本章で用いる用語の定義については、「Ⅱ」の「0.「Ⅱ」で用いる用語について」で引用した佐藤栄作（2013）の「字体」「字形」「書体」の定義を引き続き用いる。「書体」の定義と「楷書体」「行書体」「草書体」の本章での判断については、本章での考察を進める上で必要であるため、「Ⅱ」で説明した内容に再度ふれながら簡単に説明を加える。

「書体」については、本章では「楷書体」「行書体」「草書体」に区別する。書体を「楷書体／行書体／草書体」の三種類に分ける考え方の他にも、「楷書体／行草書体」や、「楷行書体／草書体」、「真／草」のように二種類に分ける考え方などがあるため、論文内での書体の捉え方を示す必要があると考えるからである。また、それぞれの書体の判断基準は、

漢字を構成する一つ一つの画が明確で、画数がはっきりと数えられるような形状のものを「楷書体」、漢字を構成する点画（の一部）に連続性があり、当該字全体の画数が数えにくいような形状をしているものを「行書体」、点画が一筆書きに近い形状で連続している字形は「草書体」と判断する<sup>(2)</sup>。この基準に加えて、適宜、江守賢治『楷行草総覧』を参照し、具体的に検討しながら書体を判断する。

本章の構成は、「2.『玉石童子訓』の書誌と構成」で調査に用いる『玉石童子訓』の書誌とテキストの版面の構成について整理した上で、三つの視点から調査をおこなう。まず「3.「玉石童子訓」版面の書体調査」において、『玉石童子訓』のテキストに印刷されている漢字の書体について概観するために、先の書体の判断基準に沿って版面の漢字を「楷書体」「行書体」「草書体」の書体別に分類し、版面上に書体の状態について整理する。次に、振仮名と書体の関係性について検証するために「4.「玉石童子訓」振仮名が施されていない漢字列の調査」において、版面上に見られる振仮名が施されていない漢字列を抜き出し、漢字の種類と書体の相関関係について調査をおこなう。この二つの調査を踏まえた上で、「5.「玉石童子訓」の「事」の実現形の調査」では、版面の漢字「事」における振仮名の有無と書体の関係性について調査をおこなう。そして、これら三つの調査から分かることを「6. 振仮名の有無と書体との関わりについて」で整理し、当該時期の表記体のあり方について考察する。

本章では『玉石童子訓』テキストから引用をおこなう場合、漢字列に施されている振仮名を漢字列のうしろの丸括弧に入れて示す。また、平仮名は現行の仮名に改め、合字は一字ずつに分けて表示する。テキスト内の漢字を例として載せる際には適宜テキスト内での書体を記載する。

## 2.『玉石童子訓』の書誌と構成

今回の調査で扱うテキスト『玉石童子訓』は滝沢馬琴作の読本である。『近世説美少年録』の続編として、弘化2年（1845）から同5年（1848）にかけて「六輯」全30巻（5巻で1輯）の体裁で、整版印刷で刊行されている。本調査には早稲田大学図書館所蔵本（請求番号・へ13 01279 0016）を使用した<sup>(3)</sup>。（以下、総称として指す場合には二重鍵括弧の『玉石童子訓』で示し、本調査で扱う個別的なテキストを指す場合には「玉石童子訓」と鍵括弧で示すこととする。）「玉石童子訓」の表紙の絵は「輯」のひとまとまりの5冊ごとに変

えられている。1 卷（「卷之一上冊」）は巻頭に「新局玉石童子訓小序（しんきよくぎよくせきどうじくんしょうじょ）」（蓑笠漁隠重序）を置き（1 丁表裏）、次に「一輯（5 卷）」分の目次（2 丁表）、「絵」「附言」（2 丁裏から 5 丁裏）が収められ、6 丁表から 18 丁裏までが本文となっている。内題は「新局玉石童子訓（しんきよくぎよくせきどうじくん）」となっている。本章では省略して「玉石童子訓」と呼ぶことにする。

「玉石童子訓」の本文の行数は半丁で 11 行を基本としている。先述したように、版面上の漢字の書体は「楷書体」を中心としているが、「行書体」と少数の「草書体」の漢字も確認できる。ひとつの版面上に「楷書体」「行書体」「草書体」と判断できる漢字が使用されており、複数の書体が併用されているといえる。特に「草書体」の漢字については「給」や「候」「事」「也」「得」「聞」などの特定の漢字にみられる傾向にある。

また、ほとんどの漢字列に振仮名が施されており、「総ルビ」の資料と見なすことができる。「総ルビ」とされている資料であっても、すべての漢字列に振仮名が施されているわけではなく、漢数字には振仮名が施されない事が一般的で、その他の少数の漢字列に振仮名が施されていないこともある<sup>(4)</sup>。振仮名が施されていない漢字列については本章の直接の考察対象となるので、これについては論の中で詳しく述べていく。

### 3. 「玉石童子訓」版面の書体調査

はじめに、版面の状態を把握するための調査として「玉石童子訓」版面に印刷されている漢字の書体の分析をおこなう。版面の表記の状態について概観するために、本文の一部の字種と書体の内訳を調査し、データとして次に示す。「玉石童子訓」調査範囲の平仮名と漢字の例数、漢字は先の判断基準に沿って「楷書体」「行書体」「草書体」に分類し、併せて【表 1】として提示する。調査範囲は「玉石童子訓」の 6 丁表から 8 丁裏までとした。版面の状態を概観するための調査であるので、調査は本文の一部を対象とした。紙幅の関係上、6 丁のデータを掲出する。

【表1】「玉石童子訓」版面の字種、書体内訳

6丁裏

行数	文字数	平仮名	漢字	楷書	行書	草書	保留
1行目	35	18	17	11	4	1	1(道)
2行目	31	13	18	13	5	0	
3行目	32	14	18	17	1	0	
4行目	31	8	23	23	0	0	
5行目	31	12	19	14	4	0	1(商)
6行目	33	13	20	19	0	1	
7行目	34	19	15	12	2	1	
8行目	36	23	13	8	4	1	
9行目	32	13	19	14	3	2	
10行目	33	15	18	13	5	0	
11行目	39	23	16	14	1	1	
合計	367	171	196	158	29	7	2
書体別の割合(%・小数点以下切捨)				81	14	3	—

6丁表

行数	文字数	平仮名	漢字	楷書	行書	草書	保留
5行目	32	12	20	17	2	1	
6行目	32	17	15	9	5	0	1(儒)
7行目	33	14	19	9	7	3	
8行目	35	19	16	11	3	2	
9行目	34	13	21	15	4	2	
10行目	34	14	20	16	4	0	
11行目	36	14	22	17	2	2	1(作)
合計	236	103	133	94	27	10	2
書体別の割合(%・小数点以下切捨)				71	20	7	—

【表1】の見方について説明する。左から「玉石童子訓」調査範囲の「行数」を載せる。  
 (書名と巻の題名が書かれている6丁表の冒頭の1行目から4行目までは今回の調査範囲からは外した。)次に各行の「文字数」と、字種ごとの内訳として「平仮名」と「漢字」の文字数を載せる。その内の「漢字」を書体別に「楷書」「行書」「草書」に分類した例数を載せる。書体の判断がつけられなかった漢字は「保留」とした。

「玉石童子訓」版面の漢字の書体は「楷書体」が7、8割を占めているが、少数の「草書体」の存在も確認できる。なお、一冊全体を調査対象としても、版面上の書体ごとの割合



はおおよそ【表 1】と大差はないと思われる。このように、一つの版面上に「楷書体」「行書体」「草書体」が併用されていることが確認できる。特に、少数の「草書体」の漢字が混在していることは注目に値すると考える。

版面における複数の書体の併用をくわしく見ていくために、1 巻 7 丁裏 3 行目の文章を例として引く。

豈（あに）優（まさ）らんや。最（いと）烏滸（をこ）也。恁（かう）とは知（し）らで浮（うか）れ來（き）て。可惜（あたら）錢（ぜに）を費（つひや）しにき。悔（くや）しき事をしてけり。と

引用箇所漢字を書体ごとに見ていくと、「優」「最」「知」「可」「錢」「費」は「楷書体」、「豈」「烏」「滸」「恁」「浮」「惜」「悔」は「行書体」、「也」「來」「事」は「草書体」で印刷されている。これらの漢字のうち、「草書体」の「也」と「事」には振仮名が施されていない。

この調査から分かることを整理する。「玉石童子訓」版面の書体には「楷書体」「行書体」「草書体」の併用が見られる。また、一部の漢字列は振仮名が施されている例と、「也」や「事」のように振仮名が施されていない例が確認できる。これらの現象はテキスト全体にわたって確認できる。

#### 4. 「玉石童子訓」振仮名が施されていない漢字列の調査

ここからは「玉石童子訓」の表記体の面から調査をおこなう。先述したように、「玉石童子訓」の版面は大半の漢字列に振仮名が施されている「総ルビ」の版面であるが、一部、振仮名が施されていない少数の漢字列が確認できる。次の調査では「玉石童子訓」の版面の中から振仮名が施されていない漢字列を抜き出し、書体と併せて検討をおこなう。書体調査により版面にみられる漢字の書体について概観したが、この調査では振仮名の有無に注目し、振仮名と書体との関係性について考察する。

調査範囲は「玉石童子訓」1 巻から 4 巻まで（「卷之一上冊」から「卷之二下冊」まで）とし、序文や「附言」等を除いた本文のみを調査対象とする。次頁に「玉石童子訓」内の振仮名が施されていない漢字列の調査結果を【表 2】として次頁に掲出する。紙幅の関係

上、1巻のデータを掲出する。

【表2】「玉石童子訓」振仮名が施されていない漢字列

丁数	振仮名のない漢字列	書体の判断	備考
1冊目			
6ウ4	四十八（年:ねん）	楷	数字
6ウ6	給・ひ	草	
6ウ7	給・ひ	草	
6ウ9	也	草	
7オ1	也	草	
7ウ3	也	草	
7ウ3	事	草	
7ウ8	也	草	
8オ6	也	草	
8オ11	給・ひ	草	
8ウ1	也	草	
8ウ2	給・へ	草	
9オ5	也	草	
9オ6	也	草	
9ウ1	四五（名:にん）	楷	数字
9ウ7	二十六（回:くわい）	楷	数字、割書きの中
10オ2	也	草	
10オ2	七八（稔前:ねんさき）	楷	数字
10オ3	候・て	草	
10オ3	候・へ	草	
10オ4	候・は	草	
10オ5	候・へ	草	
10オ5	候・は	草	
10オ7	也	草	
11ウ5	給・は	草	
11ウ9	也	草	
11ウ11	也	草	
12オ9	事	草	
12ウ1	也	草	
12ウ8	（荷三:にさう）太	楷	
12ウ10	候・へ	草	
12ウ10	候・ひ	草	
12ウ11	也	草	
13オ3	候	草	
13オ6	候・ひ	草	
13オ7	候・は	草	
13オ9	候・へ	草	
13オ9	候・は	草	
13オ10	候	草	
13オ10	也	草	
13ウ2	也	草	
13ウ4	候	草	
13ウ5	候・へ	草	

13ウ7	候	草	
13ウ7	也	草	
13ウ8	也	草	
13ウ9	候・ひ	草	
14オ7	候	草	
14オ8	候	草	
14オ9	候・は	草	
14オ10	候	草	
14ウ3	候・は	草	
14ウ5	也	草	
14ウ6	給・ふ	草	
15オ4	事	草	
15オ4	候・ひ	草	
15オ5	候	草	
15オ5	也	草	
15オ9	候	草	
15ウ7	(百:ひやく) 九十五 (金:きん)	楷	数字
15ウ11	候・へ	草	
16オ1	候・へ	草	
16オ2	候・は	草	
16オ2	給・は	草	
16オ4	候	草	
16オ9	(両:もろ) 手	草	
18オ4	候・は	草	
18オ5	給・は	草	
18オ5	候・は	草	
18オ5	也	草	
18ウ1	事	草	

はじめに【表 2】の見方を説明する。左から「丁数」としてテキスト内での漢字列の所在を示した。「6 ウ 4」は6 丁裏の4 行目を指す。次に「振仮名のない漢字列」を載せる。一単語に振仮名のある漢字列と振仮名のない漢字列が見られる場合は「四十八 (年:ねん)」のように振仮名のある漢字列を丸括弧で括って表示する。また、活用語尾は「給・ひ」のように表示する。その次に「書体の判断」として、漢字列の書体を「楷」「行」「草」に分類して載せる。

調査範囲内で振仮名が施されていない漢字列は 297 例あり、その内訳は「也」82 例、「候」65 例、「給」63 例、「事」56 例 (合計で 266 例)、漢数字が 27 例、その他が 4 例であった<sup>(5)</sup>。振仮名が施されていない「也」「候」「給」「事」は版面中で繰り返し用いられており、すべての例が草書体であった。これらの「也」「候」「給」「事」の漢字列の例は、前後の文脈と

併せるとそれぞれ助動詞「ナリ」、補助動詞「ソウロウ」、補助動詞「タマ（ウ）」、名詞「コト」にあてられていると判断できるものであった。振仮名が施されていない漢字列は「也」「候」「給」「事」という特定の草書体の漢字列と、漢数字に見られると説明できる。

振仮名が施されていない漢字列と書体について見ていくため、【表 2】の漢字列のうち、5 例を前後の文と併せて引用する。振仮名が施されていない漢字列は下線で示す。

10 丁表 4 行目「外（ほか）に縁処（よるべ）は候はず。」

15 丁表 4 行目「現（げ）に然（さ）る事も候ひき。」

15 丁表 5 行目「人（ひと）に聞（きゝ）しこと候也。」

16 丁表 2 行目「岳母落葉（しうとめおちは）を召（めし）よせて。問（とは）せ給はゞ」

16 丁表 9 行目「然（さ）うでも両（もろ）手を縛（しば）られて」

引用した例の書体について説明を加える。10 丁表 4 行目の「外」と「処」は楷書体、「縁」は糸偏が行書体、振仮名のない「候」は「い」のようなかたちの草書体で印刷されている。補助動詞「候」は調査範囲内ではすべて草書体で印刷されていた<sup>(6)</sup>。15 丁表 4 行目の「現」は楷書体、「然」は烈火の筆画が連続した行書体、振仮名のない「候」は先の例と同じかたちの草書体、同じく振仮名のない「事」は一筆書きのかたちの草書体で印刷されている。「事」は調査範囲内において楷書体と草書体の両方の書体が使われていることが確認できた。版面の漢字「事」については次に詳しく調査をおこなう。次の 15 丁表 5 行目は、「人」は楷書体、「聞」は草書体で印刷されている。振仮名のない「候」と「也」はどちらも草書体で印刷されている。「也」も調査範囲ではすべて草書体で印刷されていた。16 丁表 2 行目の「岳母落葉」と「召」は楷書体、「問」は門構えを崩した行書体、振仮名のない「給」は一筆書きのようなかたちの草書体で印刷されている。「給」も調査範囲内ではすべて草書体であった。16 丁表 9 行目の「然」は烈火の筆画が連続した行書体、「縛」は糸偏が行書体に近いかたちで印刷されている。漢字列「両手」には「両」の部分に「もろ」の振仮名が施されており、「モロテ」という語をあらわしていると推測できる。この「モロテ」の語にあてられている漢字列「両手」は「両」が楷書体、「手」が草書体となっており、語の単位でも書体の併用が確認できる。この「モロテ」のように、一つの語にあてる漢字列に複数の書体が併用されている例は他にも確認できる。書体の併用例としては 1 巻 15 丁表 3 行目「手迹（しゆせき）」、2 巻 24 丁裏 1 行目「行客等（たびゝとら）」などがある。「手迹」

は「手」が草書体、「迹」が楷書体で印刷されており、「行客等」は「行」「等」が草書体、「客」が楷書体で印刷されている<sup>(7)</sup>。

今回の調査範囲の中では、振仮名が施されていない「草書体」の漢字列「事」「給」「候」「也」は、すべて平仮名に近い大きさを印刷されていた。文字の「大きさ」は相対的なものであり、基準をたてることは難しいが、版面を見る限りでは漢字と仮名は文字の大きさが異なっており、仮名の方が漢字よりも小さく、連綿したかたちで印刷されている。このように、この版面では基本的には字種ごとに大きさが異なっているが、振仮名が施されていない「草書体」の漢字の場合は仮名に近い大きさを印刷されている。「事」の漢字は「楷書体」と「草書体」の両方が版面上に確認できることを先に述べたが、振仮名が施されていない「草書体」の場合は仮名に近い大きさを、すなわち「楷書体」「行書体」の漢字よりも小さく印刷されており、振仮名が施されている「楷書体」の場合は他の漢字に近い大きさを印刷されていることが確認できる。振仮名の有無と漢字の書体、版面上での文字の大きさは互いに関係していることがうかがえる。

ここまで、「玉石童子訓」の版面には振仮名が施されていない漢字列があり、それらは特定の草書体の漢字列と漢数字に見られるということと、版面に複数の書体の漢字列が併用されていること、振仮名の有無と漢字の書体、版面上での文字の大きさに関係性がうかがえることを指摘した。

## 5. 「玉石童子訓」の「事」の実現形の調査

「玉石童子訓」版面の漢字のうち、「事」については、先の調査で次の二点について言及した。一点は「事」に振仮名のある例とない例が確認できるという点、二点目は「事」の書体には「楷書体」と「草書体」が確認でき、「楷書体」は他の漢字に近い大きさ、「草書体」は平仮名に近い大きさを印刷されている点である。このことを踏まえて、「玉石童子訓」版面の漢字のうち、「事」の実現形について調査をおこない、書体と振仮名の関係性について考察する。ここまでの調査では「振仮名」の面に注目し、「振仮名」の施されていない漢字列について考察してきたが、そのうちの「事」の漢字の実現形について調査する。この調査は「書体」と「振仮名」の有無がどのように関係して現れているかを見ることを目的とする。調査範囲は「玉石童子訓」の序文や「附言」等を除いた1巻から4巻までとし、この範囲内の「事」の書体と振仮名を調査する。

次に調査結果を【表3】として載せる。紙幅の関係上、1巻のデータを掲出する。

【表3】「事」の実現形

丁数	「事」の実現形	書体判断	振仮名有無	前後の文脈	文法判断	備考
1冊目						
6ウ3	事（こと）	楷	○	原夢（ゆめあはせ）をもて／の吉凶（きつけう）を	実質	
6ウ4	事（こと）	楷	○	夢（ゆめ）を取（と）る／あり。	形式	「事」の「口」が「八」の形
6ウ6	事（こと）	楷	○	給ひし／。	形式	「事」の「口」が「八」の形
6ウ10	其事（そのこと）	楷	○	／の	実質	
6ウ11	事（こと）	楷	○	其後（そののち）の／は	形式	「事」の「口」が「八」の形
7オ1	亼（こと）	楷	○	其後（そののち）の／いへばさら也	形式	
7オ3	事（こと）	楷	○	思（おも）ひし／に	形式	
7オ8	事（こと）	楷	○	是等（これら）の／の趣（おもむき）は。	実質	
7ウ3	事	草	×	悔（くや）しき／をしてけり。	形式	
7ウ9	這事（このこと）	楷	○	今（いま）／の光景（ありさま）に	実質	
7ウ9	事（こと）	楷	○	惜（をし）まず。／あり	実質	
7ウ10	亼（こと）	楷	○	／あり。	実質	
8オ2	事（こと）	楷	○	朱之介（あけのすけ）が／ありとて	実質	
8ウ2	一事（いちじ）	楷	○	／も	実質	
9ウ2	這事（このこと）	楷	○	／の凶変（けうへん）を。	実質	
9ウ7	事（こと）	楷	○	／は	実質	割書きの中
9ウ10	事（こと）	楷	○	横死（わうし）の／。其客（そのきやく）	形式	
9ウ10	事（こと）	楷	○	朱之介（あけのすけ）の／の趣（おもむき）さへ	実質	
9ウ11	亼（こと）	楷	○	として。／の虚実（きよじつ）を	実質	
10オ5	亼（こと）	楷	○	召（よび）よせて。／の顛末（もとすゑ）を	実質	
10オ6	其事（そのこと）	楷	○	説示（ときしめ）しし。／の顛末（もとすゑ）を	実質	
12オ9	事	草	×	答（こたふ）る／始（はじめ）のごとく。	形式	

12ウ1	事（こと）	楷	○	召（めし）よせて。／の 虚実（きよじつ）を	実質	
14オ4	事（こと）	楷	○	この餘（よ）の／は豫 （かねて）より	実質	
14オ5	事（こと）	楷	○	聞（きゝ）たる／は侍 （はべ）らずかし。	実質	
15オ4	事	草	×	現（げ）に然（さ）る／ も候ひき。	形式	
15オ9	事（こと）	楷	○	それにて／皆（みな）亮 察（りやうさつ）したり 。	実質	
15ウ4	其事（そのこと）	楷	○	欲（ほつ）せしに。／竟 （つひ）に	実質	
15ウ5	事（こと）	楷	○	この／往日（いぬるひ） 大内家（おほうちけ）よ り	実質	
16オ7	実事（まこと）	楷	○	孰（たれ）か／とせん。	実質	
17ウ3	事（こと）	楷	○	松屋（まつや）があら ずなりしとて。／を好（こ の）みて	実質	
18ウ1	事	草	×	諮（たづ）ぬべき／もな し。	形式	

【表3】は左から「丁数」、その次に「事」の実現形として版面内の「事」を載せる<sup>(8)</sup>。振仮名は丸括弧に入れて示した。次に「書体」として「事」の書体を「楷」「行」「草」に分類して載せる。次に「振仮名有無」、「前後の文脈」は「事」の前後の文脈を引用する。その次に「文法判断」として「形式名詞／実質名詞」の判断を載せる。なお、表内で「？」と表示されている漢字はすべて「𠄎」（実際には上が「古」、下が「又」の形）である。

調査範囲の全体の「事」は133例あった。まず「書体」の面について整理する。書体別の内訳は楷書体が76例、草書体が57例であった。草書体の「事」については振仮名が施されていない例が大半であった（57例中56例）。楷書体の「事」の場合は76例すべてに振仮名が施されていた。施されている振仮名は「こと」または「じ」のいずれかであり、1例のみ「わざ」（2巻28丁表8行目）となっていた。

草書体の「事」57例は一字漢字列の例が大半（57例中54例）であり、振仮名は施されていない。これらの例は前後の文脈から名詞「コト」にあてられていると判断できる（以降、語形を表す際には片仮名を用いる）。残りの3例は二字漢字列であり、「其事（そのこと）」（4巻19丁表4行目）、「這（この）事」（4巻19丁表5行目）、「憂（うき）事」（4巻23丁表7行目）だった。「其」「這」「憂」は楷書体であり、ひとつの語にあてる漢字列の中に楷書体と草書体の漢字が併用されている。また、この例のうち「這事」と「憂事」は、

「這（この）」と「憂（うき）」には振仮名が施されているが、草書体の「事」には振仮名は施されておらず、ひとまとまりとみなし得る一語の漢字列に、振仮名のある字とない字が混在していることが確認できる。

この調査から分かることを整理する。「玉石童子訓」版面の「事」字には、楷書体と草書体のものが確認できる。「事」字は、楷書体の場合には振仮名が施されており、草書体の場合には基本的に振仮名は施されていない。このことから、漢字の書体と振仮名の有無との間には関係性があることが推測できる。

## 6. 振仮名の有無と書体との関わりについて

ここまで、「玉石童子訓」版面における「書体」の調査、「振仮名が施されていない漢字列」の調査、「漢字「事」の実現形」の調査をおこない、振仮名と書体の関係について分かることを各章で指摘してきた。ここまでに指摘したことを総合しながら、「振仮名」と「書体」の関係について考察する。振仮名と書体の関係を論じるにあたり、はじめに「振仮名」の機能について整理する。今野真二（2009）から、漢字列と振仮名の関係についての記述を引用する。

日本語 X を書くのに漢字 Y を使ったとして、X と Y との結びつきがひろくみとめられていなければ、いいかえれば両者の結びつきが安定していなければ、読み手は漢字 Y をみてすぐに日本語 X を書いたものだとわからない。(中略)したがって、このように、漢字 Y と日本語 X との結びつきがつよくない場合には、漢字 Y が日本語 X を書いたものであることを読み手にわかってもらうためには振仮名を付ける必要が生じる。この場合の振仮名は「読みとしての振仮名」であることになる。(P30)

ある語を漢字で書く「書き方」が「ヤマ」→「山」のように（ほぼ）一つしかないのであれば、「読み手」が迷うことはないはずで、振仮名も必要がなくなる。しかし「二つの語形」が候補として存在するのであれば、振仮名によって語形を示す必要がある。

つまり振仮名が「読み＝理解」を保証していることになる。(P92)

振仮名の主な機能は漢字の「語形」（「発音形」や「読み」とも言い換えられる）を示すことであり、振仮名によってその「漢字」がどのような「語」と結びついているのかが読み手に示されている。ある「漢字」とある「語」が 1 対 1 で対応しており、その「漢字」と結びついている「語」を読み手が想起できるのであれば、振仮名を施す必要はない。反



対に、「漢字」に対応している「語」が複数ある、または「語」を想起するのが難しいといった理由で、その「漢字」と結びついている「語」を判断しづらいと思われた場合には振仮名を施す必要が出てくる。

このことを踏まえて、振仮名のない「事」と振仮名のある「事」について、ここまでの調査で分かったことについて整理と考察をおこなう。振仮名のない「事」(57 例)は、すべて草書体で印刷されており、前後の文脈から名詞の「コト」と結びついていると判断できるものであった。反対に、振仮名のある「事」(76 例)は、1 例を除きすべてが楷書体で印刷されており、振仮名は「こと」または「じ」、「わざ」が確認できた。草書体で振仮名のない「事」と、楷書体で振仮名のある「事」は、版面上で異なる動きをしていることが観察できる。

「玉石童子訓」のテキスト上では、振仮名のない草書体の「事」は語「コト」と 1 対 1 で結びついているが、振仮名のある楷書体の「事」は「コト」「ジ」「ワザ」の複数の語と結びついている。どちらも同じ漢字「事」であるが、草書体で印刷されている「事」は必ず「コト」をあらわしているために、振仮名を施さなくてもよいという判断がされていたと考えられる。そして、それが草書体で印刷されていた。すなわち、草書体で印刷されていることが語「コト」との結びつきを表していたと考えることができる。一方、「コト」とも結びつき、「ジ」や「ワザ」とも結びついている場合には、「事」は楷書体で書かれ、「コト」と「ジ」、「ワザ」のどの語と結びついているのかを振仮名で示す必要がある。また、「玉石童子訓」は「総ルビ」表記体を選択しているため、振仮名のある楷書体の「事」はこの表記体の中で「総ルビ」ということ、すなわち漢字に振仮名を施すということに沿った動きをしていると考えられる。楷書体の「事」と草書体の「事」は語との結びつきに違いがあり、楷書体の場合は複数の語と結びついているのに対し、草書体の場合は語「コト」と 1 対 1 で結びついており「揺れ」がない状態であることがうかがえる。草書体の「事」は結びついている語の「揺れ」がないために振仮名を施す必要がなかったのだと考えられる。同じ「事」字であるが、草書体の「事」は楷書体の「事」とは版面上で異なる動きをしている。振仮名によって語形を示している楷書体の「事」の動きは、「総ルビ」表記体の中であってごく自然なものであると考えられる。版面の「書体」の面からみると、このテキストの表記体は、「楷書体」と「行書体」を基調とする中に、(何らかの傾向を持った)「草書体」が「持ち込まれている」と考えるのが自然であると思われる。このことから、表記体に漢字の「書体」が関係していることがうかがえる。この「草書体」の持つ「何ら

かの傾向」の考察については後述する。

「玉石童子訓」のような「総ルビ」表記体を本章では「漢数字と少数の漢字列を除いた漢字列に振仮名が施されている表記体」と定義している。版面のすべての漢字列に振仮名が施されているということは、言い換えるならば、版面で用いられている漢字と結びついている、すべての語形が振仮名によって表示されている、ということになる。このような版面は語形についての最大限の情報を版面上に提示していると言える。「総ルビ」は語形について安定した情報を読み手に示す「表記体」であり、この「表記体」を選択することは、書き手の意図する語形（発音形）についての最大限の情報を読み手に提示していることになる。本章ではこのような「総ルビ」の版面上に見られる、少数の振仮名が施されていない漢字列を考察対象としている。先に「総ルビ」を「漢字と結びついているすべての語形を振仮名によって表示している」と説明したが、これまでに見てきたように調査対象の「玉石童子訓」には少数の振仮名が施されていない漢字列が確認できる。「4」で調査したように、振仮名が施されていない漢字列の例は大半が草書体の「也」「候」「給」「事」の漢字列と「漢数字」であった。「漢数字」に振仮名が施されていない理由については、「漢数字」は漢字のあらわす発音形（語形）が仮に特定できなかったとしても、その漢字の示す「数」の意味が理解できる、いわば「記号」に近いものであるために、振仮名で発音形（語形）を示す必要がなかったと考えられる。その一方で、草書体の「也」「候」「給」「事」の漢字列の例は、それぞれ助動詞「ナリ」、補助動詞「ソウロウ」、補助動詞「タマ（ウ）」、名詞「コト」と結びついていると判断できるものであった。振仮名の有無については、漢字列と語が1対1で対応しており、漢字列と結びつく語に「揺れ」がない場合には、原則として振仮名を施す必要はない。振仮名の機能から考えると、振仮名が施されていない草書体の漢字列の一群は、語との対応に「揺れ」のない状態であったと推測できる。

「玉石童子訓」版面の振仮名が施されていない漢字列は、語との対応に「揺れ」がないのに加えて、「総ルビ」表記体の中で他の振仮名が施された漢字列とは異なるふるまいをしている。これらの漢字列は振仮名が施されない状態でも、その漢字列と結びついている語を読み手が判断することが可能であったと考えられる。言い換えると、振仮名が施された他の漢字列よりも、これらの漢字列は語との結びつきが安定していたと説明できる。さらに、「総ルビ」の版面において振仮名を施さない漢字列であったことを併せて考えると、これらの漢字列は「特別な漢字列」であり、表語的な機能を持っているのに近い状態であったと考えられる。これらの漢字列については「4」で「仮名」と近い大きさで印刷されてい

ることを指摘した。版面上の「漢字」と「仮名」の大きさは「漢字」の方が大きく、「仮名」の方が小さく印刷されている。これらの漢字列と「仮名」の大きさが近いことから、版面上の表音的な機能を持つ文字と近い扱いをされていたとみなすことができると考える。

ここで、「玉石童子訓」版面の振仮名が施されている「草書体」の漢字列も含めた、版面上の「草書体」の漢字について「書体」の面から考察を加える。調査範囲内では「行」「來」「得」「歟（左側が「与」）」「折」「手」「聞」「傳」「奉」などが草書体で印刷されており、これらの漢字は草書体の「かたち」で実現し、版面上で繰り返し用いられていることが確認できた。版面上の「草書体」の漢字の種類が限定されている理由の一つとして、これらの漢字は（何らかの場面、文字社会において）草書体で書かれることが他の漢字よりも多かった、という推測が自然であると考えられる。草書体で用いられている漢字に「候」や「也」があることを考え合わせると、そのような漢字列があらわす語が頻繁に書かれる文書や文献における使用実績と関わりがあることが推測できる。

「3」の版面の書体調査で「玉石童子訓」版面の漢字列は「楷書体」と「行書体」の書体を中心として用いられていることを概観したが、「楷書体」と「行書体」の漢字と「平仮名」を用いる表記体の中に、特定の「草書体」の漢字が見られる、という状態が「玉石童子訓」の版面であると考えられる。このような「楷書体」と「行書体」の中に少数の「草書体」という、複数の書体が版面上に併用されているテキストは、「玉石童子訓」以外の整版本にも広く確認できると推測する。「玉石童子訓」は「漢字平仮名混じり」と称することのできるテキストである。従来、表記体は「漢字と仮名とによってどのように文字化するか」という観点からとらえられてきた。しかし、ここまでの調査から考察してきたように、表記体の漢字については「書体」を考慮する必要があるといえる。

ここまで、「玉石童子訓」の版面上の振仮名が施されない漢字列と版面上の漢字の書体について、「振仮名」の機能と「総ルビ」表記体、「書体」の面から考察をおこなった。版面上にみられる「振仮名が施されない漢字列」は「草書体」で出現しており、「振仮名」の有無と「書体」には重なりがあることがうかがえる。版面上の「草書体」の漢字は文書や文献における使用実績と関わりがあると推測したが、使用実績が多い語であれば、漢字列と語形の結びつきが比較的安定していた可能性が考えられ、振仮名を施す必要がなくなる。そのような漢字列が「振仮名」が施されない「草書体」で実現しており、現象に重なりがあることが考えられる。

## おわりに

本章は「玉石童子訓」のテキストにおける振仮名と書体にかかわる調査を通して当該時期の整版本の表記体についての考察をおこなった。まず、書体についての調査を通して、版面上に「楷書体」「行書体」と少数の「草書体」の漢字が併用されていることを指摘した。振仮名についての調査では、「総ルビ」の版面上に振仮名が施されていない「草書体」の漢字が見られることを確認した。調査結果から「玉石童子訓」は「楷書体・行書体」の漢字を中心とした中に、少数の「草書体」（その中には振仮名が施されていない「草書体」が含まれる）が併用されている表記体であると考察した。「草書体」はこれまでに蓄積された文書や文献での使用実績との関係があることが推測できる。中でも振仮名が施されない「草書体」の漢字列の一群は「漢字」と「語」の結びつきが安定しており、表語的な機能を有しているのに近い一群であったと考えることができる。これらの調査をふまえ、「表記体」の「漢字」については「書体」を考慮する必要があることを述べた。次の「V」では、本章で考察した「振仮名」と「書体」の関係性について他のテキストも用いながら調査し、また、振仮名が施されない漢字列が「総ルビ」の表記体の中でどのように位置づけられているのかを考察する。

## 注

(1) 「漢字列」の用語については、今野真二（2008）「文字（列）に語としての資格、具体性を与えられない場合、あるいはそのような「段階」で、この文字（列）を「漢字列」とよぶことにすると、語を特定しないままでも観察、考察を続けられることになる。」（p79）と説明している。本章でもこの考え方をとり、語を特定せずに漢字の文字列を指す場合に「漢字列」の語を使用する。なお、一字の文字列の場合も「漢字列」に含める。

(2) 「行書体」について、書体の「線引き」によっては「楷行書体」または「行草書体」として「楷書体」と「草書体」のどちらかに「行書体」を含める考え方もある。例えば、明治初期の漢語辞書『[校正／増補] 漢語字類』には見出し項目内に書体の異なる二種類の漢字列が印刷されているが、「凡例」によると「草行」と「楷」に区別がされていることが分かる。この場合は「行書体」は「草書体」に含められている。「行書体」の位置づけについて、時代は遡るが、今野真二（2020）は『東大寺献物帳』に記録されている「真草千字文」が現存する「小川本千字文」であると仮定した上で、「八世紀の日本列島上に「楷書

体」と「草書体」とが並べられたテキストがあったことになる」と述べている。「当該時期（稿者注・八世紀）において「行書体」をどのように位置付ければよいかについては、不分明であるが、「行書体」を「楷書体」と「草書体」の中間に位置付けてよいとすれば、「両極」はみえていたことになる。」と述べ、「現時点では、漢字の「楷書体＝真」「行書体」「草書体＝草」に関しては、「楷書体＝真」と「草書体＝草」を「両極」ととらえ、「行書体」は中間に位置し、かつ「楷書体」との間に「回路」を形成していると考えているが、そうしたことについては今後さらに整理していきたい」としている。

(3) 本章で使用した「玉石童子訓」テキストの閲覧には早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」を使用した。〈<https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>〉（2020年9月12日最終閲覧）

(4) 「総ルビ」と呼びうる資料の中に少数の振仮名が施されていない漢字列が見られることについて、屋名池誠（2009）は「すべての漢字にルビがつく「総ルビ」（やさしい漢字にはルビがない場合もあるが、これも「総ルビ」に含める）」と述べており、このような場合も「総ルビ」としている。

(5) 4例の内訳は「太」（楷書体）、「手」（草書体）、「玉へ」（楷書体）、「來」（草書体）である。少数であるため、考察からは除外する。

(6) 補助動詞以外の「候」字は調査範囲内に漢語「時候（ころ）」が15例見られた。この場合はすべて振仮名が施され、書体は楷書体であった。同じ「候」字であるが、「補助動詞」の場合と「漢語」の場合とでは異なる書体で印刷されている。

(7) 版面上にみられる漢字の書体について、一字の漢字の中に複数の書体を確認できる例がある。1巻14丁裏9行目「拿」は「合」部分が楷書体、「手」部分が草書体のかたちをしている。漢字「手」は本文中でも草書体で印刷されている例を確認できるが、漢字を構成する部品（パーツ）においても草書体として実現している例を確認できる。

(8) 版面の楷書体の「事」には、「事」以外に「𠂔」字など、異体字とみられるものも確認できるが、異体字については今回の調査では詳しく取り上げないことにする。

## 引用・参考文献（五十音順）

- 佐藤栄作（2010）「草の字体へ」アクセント史資料研究会『論集』6
- 佐藤栄作（2013）『見えない文字と見える文字 文字のかたちを考える』三省堂
- 今野真二（2008）『消された漱石 明治の日本語の探し方』笠間書院
- 今野真二（2009）『振仮名の歴史』集英社新書
- 今野真二（2020）「草の字体」『清泉女子大学人文科学研究紀要』41
- 屋名池誠（2009）「「総ルビ」の時代—日本語表記の十九世紀」『文学』10—6

米谷隆史（2006）「楷書はむずかしい—江戸の人々と漢字（二）」『文彩』2

江守賢治『楷行草総覧』NHK 出版 1981 年

『日本古典文学大辞典』岩波書店 1984 年

## V 「総ルビ」表記体における書体と振仮名の機能について—『夢想兵衛胡蝶物語』と『玉石童子訓』を通して—

### はじめに

「IV」章の調査をふまえて、本章では江戸時代後期に出版された読本『玉石童子訓』と『夢想兵衛胡蝶物語』のテキストを用いて、表記体のひとつである、「総ルビ」の表記体について考察をおこなうことを目的とする。『玉石童子訓』と『夢想兵衛胡蝶物語』の版面はほとんどの漢字列に振仮名が施されており、いわゆる「総ルビ」の表記体とみなすことができる資料である（本章では、大半の漢字列に振仮名が施されている表記体を「総ルビ」表記体と呼び、考察を進める。）。その表記体の中には少数の振仮名が施されていない漢字列が混在していることが確認できる。本章では「振仮名が施されない漢字列」に注目し、これらの一群がどのような傾向を持つ漢字列であるのかを、複数のテキストを用いて調査する。これらの調査を通して、「振仮名が施されない漢字列」の「総ルビ」表記体における位置付けを考える。また、「振仮名が施されていない漢字列」の一群はどのような特徴をもつ一群であるのかを考察する。

まず「1. 用語の定義」において本章で使用する用語の定義を整理したうえで、「2. 『夢想兵衛胡蝶物語』と『玉石童子訓』の書誌と版面」で『夢想兵衛胡蝶物語』と『玉石童子訓』の書誌とテキストの版面について説明する。「3. 「夢想兵衛胡蝶物語」と「玉石童子訓」の振仮名の調査」では二つのテキストの「振仮名が施されない漢字」の調査と分析をおこない、それぞれの版面から分かることを整理する。整理した結果をもとにして、「4. 「振仮名」と「書体」の関係性についての分析と考察」では「総ルビ」表記体において、「振仮名」と「書体」の要素がどのように「表記体」と「漢字」に関係しているのかを考察する。

### 1. 用語の定義

本章で用いる用語の定義については、「II」の「0. 「II」で用いる用語について」で引用した佐藤栄作（2013）の「字体」「字形」「書体」の定義を引き続き用いる。「書体」の定義と「楷書体」「行書体」「草書体」の本章での判断については「IV」の「1. 用語の定義と本章の構成」での説明に再度ふれながら説明する。それぞれ書体の判断基準は、漢

字を構成する一つ一つの画が明確で、画数がはっきりと数えられるような形状のものを「楷書体」、漢字を構成する点画（の一部）に連続性があり、当該字全体の画数が数えにくいような形状をしているものを「行書体」、点画が一筆書きに近い形状で連続している字形を「草書体」と判断する。この基準に加えて、適宜、江守賢治『楷行草総覧』を参照し、具体的に検討しながら判断する。

「漢字列」の用語については、今野真二（2008）は次のように説明している。「文字（列）に語としての資格、具体性を与えられない場合、あるいはそのような「段階」で、この文字（列）を「漢字列」とよぶことにすると、語を特定しないままでも観察、考察が続けられることになる。」（p79）。また、多賀糸絵美（2014）は、草双紙の版面にみられる漢語を表す漢字列に和語の振仮名が施されている例をあげ、「このような場合に、語を特定せずに（また、その語を「読む」ことを前提とせずに）その文字列を指し示す必要があることになり、「漢字列」という用語が意味をなす」と述べている。本章では「漢字列」と「振仮名（によって示される語形）」について問題とするため、この考え方が必要となる。これらの説明によって、語を特定せずに漢字の文字列を指す場合に「漢字列」の語を使用する。なお、本章では一字の文字列の場合も「漢字列」に含める。

なお、テキストから引用をおこなう場合、漢字列に施されている振仮名は「人（ひと）」のように漢字列の後に丸括弧に入れて示す。また、平仮名は現行の仮名に改め、合字は一字ずつに分けて表示する。

## 2. 『夢想兵衛胡蝶物語』と『玉石童子訓』の書誌と版面

『夢想兵衛胡蝶物語』は滝沢（曲亭）馬琴作の読本で、文化7年（1810）に刊行された。体裁は9巻9冊（前編5巻、後編4巻）で、整版印刷で刊行されている。今回の調査には早稲田大学図書館所蔵本（請求番号・へ 13 03096）を使用した<sup>(1)</sup>。以降、特定のテキストを指す場合は一重の鍵括弧に書名を入れて示す。出版元については5巻（「巻之五」）巻末の刊記に「東都書肆寶聚堂 両國米澤町三丁目 釜屋又兵衛」とある。1巻（「巻之一」）は巻頭に「胡蝶物語自叙」（曲亭主人識）を置き（1丁表から2丁表）、その次に物語の舞台となる「国」が絵と文によって説明されている（2丁裏から4丁表）。次に「夢想兵衛胡蝶物語目録」として前編5巻分の「目録」が載せられており（4丁裏）、本文は5丁表から27丁裏までとなっている。



「夢想兵衛胡蝶物語」の本文は半丁で 11 行を基本としている。このテキストは大半の漢字列に振仮名が施されており、「総ルビ」表記体の資料であるといえる。その「総ルビ」の版面の中には、少数の振仮名が施されていない漢字が確認できる。一般的に「総ルビ」とされている資料であっても、すべての漢字列に振仮名が施されているわけではなく、漢数字には振仮名が施されない事が多く、その他の少数の漢字列に振仮名が施されていないこともある<sup>(2)</sup>。先述したように本章では、大半の漢字列に振仮名が施されている表記体を便宜的に「総ルビ」表記体と呼び、考察を進める。振仮名が施されていない漢字列については調査の直接の考察対象となるので、このことについては論の中で詳しく述べていく。

版面の漢字には行書体と楷書体の「かたち」が交じっており、少数の草書体の「かたち」も使われている。版面の状態を概観するために、一例として 1 巻 6 丁裏の版面を分類すると、平仮名（振仮名を除く）188 字、漢字 149 字となっており、平仮名の割合が多く、いふなれば「平仮名漢字交じり」の版面となっている。漢字 149 字の書体の内訳は、楷書体が 60 例、行書体が 67 例、草書体が 22 例となっていた。「楷書体」「行書体」「草書体」の書体が一つの版面上に混在しているといえる。書体ごとの多寡、特に草書体の漢字の多寡は丁によって違いがみられるが、テキスト全体の書体の割合はおおよそ同じであると思われる。

今回の調査で扱うもう一つのテキストの『玉石童子訓』も、同じく馬琴作の読本である。今回の調査には早稲田大学図書館所蔵本（請求番号・へ 13 01279 0016）を使用した<sup>(3)</sup>。『玉石童子訓』の書誌は「IV」の「2. 『玉石童子訓』の書誌と構成」に記載したため、本章では版面の構成と書体について説明しておく。「玉石童子訓」の本文の行数は半丁で 11 行を基本としている。このテキストもほとんどの漢字列に振仮名が施されている「総ルビ」の版面であるが、「夢想兵衛胡蝶物語」同様に振仮名が施されていない少数の漢字が確認できる。また、版面は楷書体を中心とし、それに行書体が交じり、少数の草書体の漢字が使われている。一例として 1 巻 6 丁裏の版面を分類すると、平仮名（振仮名を除く）171 字、漢字 196 字となっており、いふなれば「漢字平仮名交じり」の版面となっている。漢字 196 字の書体の内訳としては、楷書体は 158 例、行書体は 29 例、草書体は 7 例（保留 2 例）となっている。版面の漢字の書体に楷書体と行書体、少数の草書体が確認できる点は、「玉石童子訓」と「夢想兵衛胡蝶物語」に共通しているが、「夢想兵衛胡蝶物語」は「楷書体」と「行書体」の書体を中心とした版面のテキスト、「玉石童子訓」は「楷書体」の書体を中心とした版面のテキストであると言える<sup>(4)</sup>。

### 3. 「夢想兵衛胡蝶物語」と「玉石童子訓」の振仮名の調査

今回の調査では「夢想兵衛胡蝶物語」と「玉石童子訓」の版面にみられる、振仮名が施されていない漢字列について取り上げる。先述したように、これらのテキストは「総ルビ」表記体の版面であるが、少数の振仮名が施されていない漢字列が確認できる。本章では、二つのテキストの「振仮名が施されていない漢字列」に注目し、具体的な例を確認しながら、版面のあり方について観察する。

「総ルビ」のテキストの「振仮名が施されていない漢字列」の存在については、屋名池誠（2009）の「総ルビ」の定義でも触れられている。「すべての漢字にルビがつく「総ルビ」（やさしい漢字にはルビがない場合もあるが、これも「総ルビ」に含める）」と説明しており、「総ルビ」には振仮名が施されない漢字があることを指摘している。「やさしい漢字」の内実については触れられていないが、「総ルビ」と見なせる表記体の版面には「振仮名が施された漢字列」と少数の「振仮名が施されない漢字列」が混在していることになる。今回の調査対象とする江戸時代後期の整版本のテキストである「夢想兵衛胡蝶物語」と「玉石童子訓」の版面も、「振仮名が施された漢字列」の中に少数の「振仮名が施されていない漢字列」が混在している。「総ルビ」表記体における「振仮名が施されていない漢字列」を調査することにより、ひとつの表記体のあり方の内実を探ることができる考える。

#### 3-1. 「夢想兵衛胡蝶物語」の振仮名

本節では「夢想兵衛胡蝶物語」の版面上の振仮名が施されていない漢字列を抜き出し、その漢字列の書体と併せて検討を加える。調査範囲は1巻と2巻（「巻之一」と「巻之二」）とし、「自叙」や「目録」などを除いた本文のみ（1巻20丁、2巻20丁の合計40丁分）を今回の調査対象とする。以下に調査結果を【表1】として載せる。紙幅の関係で1巻の10丁裏までのデータを掲載する。

【表 1】「夢想兵衛胡蝶物語」振仮名が施されていない漢字列

巻	丁数	振仮名のない 漢字列	書体の判 断	前後の文脈	備考
巻 1					
1	5 表	五十（年:ねん）	楷		数字
1	5 表	七十八	楷		数字
1	5 表	九六	楷		数字
1	5 表	百	行		数字
1	5 裏	思へば	草	こゝを <b>思</b> へば	
1	5 裏	五尺	楷		数字
1	5 裏	見て	草	<b>見</b> て羨むものもなし	
1	5 裏	人	(楷)	肌脱ぬ <b>人</b> もあり	
1	6 表	事	草	いふ <b>事</b> は	
1	6 表	一ツ	(楷)		数字
1	6 表	三ツ	行		数字
1	6 表	見て	草	風流を <b>見</b> て	
1	6 裏	十人（前:まへ）	楷		数字
1	6 裏	四十（年:ねん）	楷		数字
1	6 裏	十六	楷		数字
1	6 裏	四十七（字:じ）	楷		数字
1	6 裏	見て	草	冊子を見 <b>て</b> 思ふやう	
1	6 裏	思ふ	草	見て <b>思</b> ふ	
1	7 表	見らるゝ	草	顔の <b>見</b> らるゝは	
1	7 表	見て	草	飯を見 <b>て</b> は	
1	7 裏	事	草	おそろしい <b>事</b> を	
1	7 裏	見て	草	物を生で <b>見</b> てこそ	
1	7 裏	人	(楷)	<b>人</b> のまだ見ぬ處を	

1	7 裏	見ぬ	草	人のまだ見ぬ處を	
1	7 裏	見ば	草	處を見ば	
1	7 裏	又	(楷)	これは又あやにくに	
1	7 裏	思は	草	枕に思はずも	
1	7 裏	(夷:えびす) 三郎	行		数字・人名
1	7 裏	給へ	草	これ起給へ／＼	
1	8 表	(夢想:むそう) 兵衛	楷と行		人名
1	8 表	(夢想:むそう) 兵衛	行		人名
1	8 表	三百 (餘年:よねん)	行		数字
1	8 表	事	草	わが事也	
1	8 表	也	草	わが事也	
1	8 表	川	行	假名川は	
1	8 表	也	草	生れし郷也	
1	9 裏	三百 (年:ねん)	行		数字
1	9 裏	一十日	(楷)		数字
1	9 裏	見ぬ	草	見ぬ世のことを	
1	9 裏	見た	草	世のことを見たやうに	
1	9 裏	見ぬ	草	見ぬ物は猶	
1	9 裏	見た	草	見たがり	
1	9 裏	五尺	楷		数字
1	9 裏	事	草	かはつた事はなし	
1	9 裏	人	(楷)	人の見ぬものが	
1	9 裏	見ぬ	草	人の見ぬものが	
1	9 裏	見たい	草	ものが見たい	
1	9 裏	給へ	草	誤としり給へ	

1	9 裏	見る	草	人が <b>見る</b> ことは	
1	9 裏	見る	草	ことは <b>見る</b> けれど	
1	10 表	見る	草	気のつかぬ所を <b>見る</b> を	
1	10 表	見ん	草	これを <b>見ん</b> こと	
1	10 表	見ん	草	陣中を <b>見ん</b> 為に	
1	10 表	也	草	語るはくだ <b>也</b>	
1	10 表	事	草	離るゝ <b>事</b> 遥なりとも	
1	10 表	見え	草	よりよく <b>見え</b>	
1	10 表	也	草	奇特 <b>也</b>	
1	10 裏	也	草	自在 <b>也</b>	
1	10 裏	事	草	疑ふ <b>事</b> なれと	
1	10 裏	大き	楷	大なる紙老鴟	
1	10 裏	(夢想:むさう) 兵衛	行		人名

【表 1】の見方を説明する。左から「巻」と「丁数」としてテキスト内の漢字列の所在を示した。「5 裏」は 5 丁裏を指す。次に「振仮名のない漢字列」を載せる。振仮名のあ  
る漢字列と振仮名のない漢字列が連続している場合は「五十（年:ねん）」や「（夢想:む  
さう）兵衛」のように振仮名のある漢字列を丸括弧で括って表示する。その次に「書体の  
判断」として、漢字列の書体の判断を「楷」「行」「草」に分類して載せる。画数が少な  
く、書体の判断が難しいものは「（楷）」のように丸括弧で括って表示する。その後「前  
後の文脈」として振仮名のない漢字列を含む箇所を引用する（数字と人名の場合は省略す  
る）。引用部の振仮名は省略し、振仮名が施されていない漢字列は太字で表示する。

調査範囲内で振仮名が施されていない漢字列は 474 例あった。例の内訳は、一字の漢字  
列「事」「也」「給」「見」「思」「又」「日」「人」「心」と、漢数字、助数詞、主人  
公の名前である「夢想兵衛」が大半を占めていた<sup>(5)</sup>。これらの漢字列は、「総ルビ」表  
記体にありながら、何らかの「条件」を満たしているために振仮名が施されていないとい  
うことが考えられる。このうち、漢数字に関しては語形が明示されていなくとも「数」の

意味が理解される、いわば「記号」に近いものであったと考えられる。また、助数詞についても漢数字と連続するために振仮名が施されていない可能性が考えられる。人名の「夢想兵衛」は題名にも含まれており、版面にも複数回出てくる漢字列であるために振仮名が施されていない可能性が考えられる。

調査範囲内の「事」「也」「給」「見」「思」「又」「日」「人」「心」の例数を次に示す。「事」32例、「也」20例、「給」25例、「見」104例、「思」51例、「又」21例、「日」17例、「人」44例<sup>(6)</sup>、「心」17例となっていた。これらの振仮名が施されない漢字列はすべての例が、「思へば」や「給ふ」のような一字の漢字列（以下、「一字漢字列」と呼ぶ）であった。二字以上の漢字列（以下、二字以上の漢字列も含めて「二字漢字列」と呼ぶ）で振仮名が施されていない例は、漢数字と「夢想兵衛」、「注5」に挙げた「正月」（3例）と「上上吉」（人名・1例）であった。振仮名が施されていない漢字列には、書体についても傾向がみられる。振仮名が施されていない漢字列のうち「事」「也」「給」「見」「思」「心」は、すべての例が一筆書きに近い「草書体」の「かたち」で印刷がされていた<sup>(7)</sup>。「夢想兵衛胡蝶物語」の版面の漢字の「かたち」は「楷書体」と「行書体」中心で、その中に少数の「草書体」がみられることは先に述べたが、この「少数の草書体の漢字」と「振仮名が施されていない漢字列」には重なりがある。

次に、「夢想兵衛胡蝶物語」の1巻の本文から、振仮名が施されていない漢字列を引用する。各漢字について版面の書体の説明を加えたあとで、振仮名が施されていない漢字列の分析をおこなう。引用文では振仮名が施されていない漢字列を下線で示す。また、振仮名は「身(み)」のように丸括弧で括って示し、仮名は現在通用の仮名に置き換えて表示する。

- 1 5丁裏4行目「こゝを思へば室庫（いへくら）は。」
- 2 6丁表1行目「身（み）だしなみといふ事は。」
- 3 6丁表9行目「昔（むかし）の人（ひと）の風流（ふり）を見て。」
- 4 6丁裏10行目「和莊兵衛（わさうひやうゑ）といふ冊子（さふし）を見て思ふやう。」
- 5 7丁表10行目「綿（わた）を盛（もつ）た飯（めし）を見ては。」
- 6 8丁表9行目「浦嶋仙人（うらしませんじん）とはわが事也。」
- 7 9丁裏10行目「慾（よく）にかはつた事はなし。」
- 8 10丁表11行目「これその紙鳶（たこ）の奇特（きどく）也。」

- 9 12 丁裏 7 行目「その無礼（ぶれい）を咎（とが）め給はず。」
- 10 13 丁表 2 行目「十三月めで生（うま）れた人でも。」
- 11 14 丁表 4 行目「又盈（みつ）るを缺（かく）が商賣（せうばい）也。」
- 12 18 丁裏 8 行目「ちつとは思ひやらしやらぬか。」
- 13 19 丁裏 3 行目「神（かみ）の導（みちび）き給ふとて。」
- 14 20 丁表 7 行目「主（しゅう）の益（やく）にたとふと心がけるを。」
- 15 22 丁表 3 行目「毎日（まいにち）てらし給ふ日輪（にちりん）は。」
- 16 22 丁表 5 行目「入（い）り且なれば甚（はなはだ）大（おほ）きし。」
- 17 24 丁表 8 行目「その心をやすめまゐらせんとす。」
- 18 26 丁裏 1 行目「羨（うらやま）しいとも思はず。」

#### A「思」

「1 5 丁裏 4 行目」の例では、「思」は一筆書きの形の草書体、「室」と「庫」は楷書体で印刷されている。調査範囲内の「思」字は 56 例あり、その内、振仮名が施されていない例は 51 例あった。この例はすべて「一字漢字列」であり、当該漢字列の前後と、送り仮名とから「オモ（フ）」（以下、語形を示す際は片仮名を用いる）を文字化したもの判断したが、同様の判断は当該時期の「読み手」にも可能であったと考える。振仮名が施されていない例は、書体はすべて草書体の「かたち」で印刷されていた。参考として、振仮名が施されている例についても触れておく。振仮名が施された「思」は 5 例あり、すべて「二字漢字列」の例であった。5 例の内訳は、「不思議（ふしぎ）」（1 巻 10 丁裏 11 行目、2 巻 23 丁表 7 行目）と、「思案（しあん）」（2 巻 4 丁表 7 行目、13 丁裏 2 行目、14 丁裏 8 行目）であり、書体は 4 例が草書体、1 例が行書体（「心」の 3、4 画目が連続する形）であった。

#### B「見」

「3 6 丁表 9 行目」の例では「見」は一筆書きの形の草書体、「人」と「風」は楷書体、「昔」は 7、8 画目が連続した行書体、「流」はさんずいの筆画が連続した行書体で印刷されていた。調査範囲での「見」字は 116 例あり、その内、振仮名が施されていない例は 104 例あった。この例はすべて「一字漢字列」であり、前後の文と送り仮名から「ミ（ル）」を文字化したものと判断した<sup>(8)</sup>。振仮名が施されていない例は、書体はすべて草書体で

印刷されていた。振仮名が施された「見」は12例あり、1例を除く11例は「二字漢字列」の例であった。振仮名が施されている「二字漢字列」の場合も草書体で印刷されている例が大半であるが、楷書体や行書体で印刷されている例も確認できる。楷書体の例は「像見（かたみ）」（2巻1丁裏8行目）、「異見（いけん）」（2巻3丁表10行目）、「見識（けんしき）」（2巻22丁裏9行目）、行書体の例は「花見（はなみ）」（2巻1丁表10行目）であった。

### C「也」

「6 8丁表9行目」の例は、「也」と「事」はどちらも一筆書きの形の草書体、「浦」はさんずいの筆画が連続した行書体、「嶋」は「𡵓」の筆画が連続して「一」の形となっている行書体、「仙」と「人」は楷書体で印刷されていた。調査範囲での「也」字は21例あり、その内、振仮名が施されていない「也」は20例あった。この例はすべて「一字漢字列」であり、前後の文から助動詞「ナリ」を文字化したものと判断した。振仮名が施されていない例は、書体はすべて一筆書きの形の草書体で印刷されていた。振仮名が施された「也」は「於曾也此君（おそやこのきみ）」（1巻8丁表8行目）の1例で、書体は楷書体で印刷されていた。

### D「事」

「7 9丁裏10行目」の例は、「慾」は「心」の3、4画目が連続した行書体、「事」は一筆書きの草書体で印刷されていた。調査範囲内の「事」字は60例あり、その内、振仮名が施されていない「事」字は32例あった。この例はすべて「一字漢字列」であり、前後の文から名詞「コト」を文字化したものと判断した。振仮名が施されていない例は、書体はすべて一筆書きの形の草書体で印刷されていた。振仮名が施された「事」は28例あり、「一字漢字列」（名詞の「事（こと）」11例、動詞の「事（つかふ）」1例）の例と「二字漢字列」の例が確認できた。「二字漢字列」の例は「故事（こじ）」（1巻9丁裏4行目）、「仕事（しごと）」（1巻18丁裏10行目）などであり、書体は楷書体と草書体が確認できた。「仕事（しごと）」の例では「仕」は楷書体、「事」は一筆書きの草書体で印刷されており、「シゴト」の一語に対応する漢字列に複数の書体が混在している。「故事（こじ）」の例は「故」「事」ともに草書体で印刷されていた。



## E「給」

「9 12 丁裏 7 行目」の例は、振仮名のない「給」は一筆書きの形の草書体、「無」「礼」は草書体の形、「咎」は楷書体の形で印刷されていた。調査範囲での「給」字の例は 27 例あり、その内、振仮名が施されていない例は 25 例あった。この例はすべて「一字漢字列」であり、前後の文と送り仮名から補助動詞「タマ（ウ）」を文字化したものと判断した。振仮名が施されていない例は、書体はすべて一筆書きの形の草書体で印刷されていた。振仮名が施された「給」は「給銀（きうぎん）」（1 巻 19 丁裏 10 行目）と、「給事（きうじ）」（1 巻 20 丁表 10 行目）の 2 例があり、どちらも「二字漢字列」の例で、書体は行書体で印刷されていた。

## F「人」

「10 13 丁表 2 行目」は漢数字「十三月」と「人」に振仮名が施されていない例である。調査範囲での「人」字の例は 136 例あり、その内、振仮名が施されていない例は 44 例あった。この例はすべて「一字漢字列」であり、前後の文から名詞「ヒト」を文字化したものと判断した。書体については「注 7」で述べたように、総画数が少ないため楷行草の判断は保留とする。振仮名が施された「人」は 92 例あり、「一字漢字列」（「人（ひと）」26 例）と「二字漢字列」（66 例）の例が確認できた。「二字漢字列」の例は「人生（じんせい）」（1 巻 5 丁表 1 行目）、「仙人（せんじん）」（1 巻 8 丁表 6 行目）、「小人（こひと）」（1 巻 9 丁裏 9 行目）などの例があった。

## G「又」

「11 14 丁表 4 行目」は「又」と「也」に振仮名が施されていない例である。「盈」「缺」「賣」は楷書体、「商」は 3、4 画目が連続した行書体、「也」は一筆書きの草書体の形で印刷されていた。「又」は画数が少ないため、書体の判断は保留する。調査範囲での「又」字の例は 27 例あり、その内、振仮名が施されていない例は 21 例あった。この例はすべて「一字漢字列」であり、前後の文から副詞「マタ」を文字化したものと判断した。振仮名が施された「又」は 6 例あり、すべて「一字漢字列」（副詞の「又（また）」）の例であった。

## H「心」

「14 20 丁表 7 行目」の例は、振仮名のない「心」は一筆書きの形の草書体、「主」は楷書体、「益」は1、2画目が連続した行書体の形で印刷されていた。調査範囲での「心」字は40例あり、その内、振仮名が施されていない例は17例あった。この例はすべて「一字漢字列」であり、前後の文から名詞「ココロ」を文字化したものと判断した。振仮名が施されていない例は、書体はすべて一筆書きの形の草書体で印刷されていた。振仮名が施された「心」は23例あり、「一字漢字列」（「心（こゝろ）」13例）と「二字漢字列」（10例）の例が確認できた。書体は草書体と行書体で印刷されていた。

## I「日」

「16 22 丁表 5 行目」の例は、「入」「日」「甚」「大」は楷書体で印刷されていた。調査範囲での「日」字は65例あり、その内、振仮名が施されていない例は17例であった。この例はすべて「一字漢字列」であり、前後の文から名詞「ヒ」を文字化したものと判断した。所在は1巻22丁表と、2巻8丁表裏に集中しており、他の漢字列の例とは異なる動きをしている。この二か所には振仮名が施された「日」字も頻出している。振仮名が施された「日」は48例あり、調査範囲内では振仮名が施された例の方が多い。内訳は「一字漢字列」（「日（ひ）」11例）と「二字漢字列」（37例）となっていた。

調査結果からは二つの要素が考えられる。「振仮名」の有無と「書体」である。この二点を組み合わせて調査結果をみていく。振仮名が施されていない漢字列に共通しているのは「一字漢字列」である点と、草書体の書体で印刷されている点であった。

まず「振仮名」の要素から調査結果を整理する。調査結果から振仮名が施されていない漢字列と語の対応を整理すると次のようになる。振仮名が施されていない漢字列はそれぞれ、「思」は語「オモ（フ）」、「見」は「ミ（ル）」、「也」は「ナリ」、「事」は「コト」、「給」は「タマ（フ）」、「人」は「ヒト」、「又」は「マタ」、「心」は「ココロ」、「日」は「ヒ」を文字化したものであると判断できる。同様の判断は当該時期の「読み手」も可能であったと考える。この状態について、表記的な面からの説明では「文字化」という用語を使って説明できるが、語彙的な面からの説明の場合には、漢字列「思」と語「オモ（フ）」が「結びついている」と説明することができる。振仮名が施されていない漢字列は、テキスト内では同じ語を文字化した箇所に確認できる。これらの漢字列は、テ

キスト全体の漢字列に振仮名を施そうとする「総ルビ」表記体においては、特別な漢字列であるといえる。「書体」の要素については、振仮名が施されていない漢字列のうち、(画数の少ない「人」「又」と、動きの異なる「日」を除いた)「事」「也」「給」「見」「思」「心」は草書体の字形で印刷されており、振仮名が施されていない漢字列と書体の動きに関係性が認められる。

例のうち「也」「給」「見」「思」字にみられた傾向として、振仮名が施されていない例は草書体の「一字漢字列」であり、振仮名が施されている例は「二字漢字列」である点があげられる。「思」字を例にすると、振仮名が施されていない例はすべて「一字漢字列」の「思」(51例)であり、語「オモ(フ)」を文字化した例であった。振仮名が施されている例は「不思議(ふしぎ)」や「思案(しあん)」のような「思」字を含む「二字漢字列」(5例)であった。書体についても「一字漢字列」の場合はすべて草書体であったが、「二字漢字列」は草書体以外に行書体でも印刷されていた。もう一つの例として「見」字をあげると、振仮名が施されていない例はすべて「一字漢字列」の「見」(104例)であり、語「ミ(ル)」を文字化した例であった。振仮名が施されている例は「像見(かたみ)」や「花見(はなみ)」、「見識(けんしき)」のような「見」字を含む「二字漢字列」(11例)が大半であった。書体についても「一字漢字列」の場合は草書体の字形に限られていたのに対し、「二字漢字列」は楷書体、行書体、草書体の字形で印刷されていた。「振仮名が施されていない例」と「振仮名が施されている例」の間には「書体」と「語」に関係した動きがあることが推測できる。語彙的な面から説明すると、「見」字の場合、漢語「ケンシキ」と結びついた漢字列「見識」の場合には振仮名が施されており、また、「見(ミ)」を構成要素に持つ和語「花見(はなみ)」にも振仮名は施されている。振仮名が施されていない例は、「一字漢字列」の「見」と動詞「ミ(ル)」の語が結びついている場合のみとなっている。漢字列と振仮名の有無の関係については、漢語・和語といった語種の面からは説明がつかない。そのため、ここでは「一字漢字列」「二字漢字列」という、漢字列の字数によって区別をすることとする。

振仮名が施されていない漢字列は二つの種類に分けられる。「一字漢字列」の場合には必ず振仮名なしで現れるものと、「一字漢字列」であっても振仮名が施されている例と施されていない例とが混在しているもの、の二種類である。前者の「必ず振仮名なし」で印刷されている漢字列は「思」「見」「也」「給」であり、後者の「混在している」ものは「事」「人」「又」「日」であった。前者の「思」「見」「也」「給」の場合は「オモ(フ)」

「ミ（ル）」「ナリ」「タマ（フ）」と結びついた「一字漢字列」の例には、すべて振仮名が施されていない。後者の「事」「人」「又」「日」の場合はそれぞれ、語「コト」「ヒト」「マタ」「ヒ」と結びついた「一字漢字列」に、振仮名が施されていない例と、振仮名が施されている例が混在していた（しかし、振仮名が施されていない例の方が多い）。振仮名が施されていない漢字列を調査すると、前者のような「必ず施さない」例と、後者のような「混在している」例があることが分かる。このことから、特定の語と結びついている場合には、漢字列に振仮名を施さなくてもよいという「条件」があることがうかがえる。この「条件」については「4. 「振仮名」と「書体」の関係性についての分析と考察」で考察する。

ここまでの調査についてまとめる。このテキストの振仮名が施されていない漢字列は、特定の語と結びついていることが分かった。「一字漢字列」の「事」「也」「給」「見」「思」「又」「日」「人」「心」の漢字列はそれぞれ結びついている語が定まっており、それらを文字化した場合に「振仮名が施されていない」状態で版面上に現れる。さらに「草書体」の「かたち」となる傾向があると考えられる。語彙的な面では、漢字列と語の結びつきが他の（振仮名が施された）漢字列より「強い」場合にこの現象が現れると説明できる。この場合の「強い」は当該漢字列から想起される語が限定されている状態を指す。

ここで、テキストの版面の「書体」のあり方について触れておく。「2」で説明したように、「夢想兵衛胡蝶物語」と「玉石童子訓」の版面は、楷書体と行書体、少数の草書体の漢字が混在して印刷されている<sup>(9)</sup>。先にあげた「夢想兵衛胡蝶物語」の例を引く。

「浦嶋仙人（うらしませんにな）とはわが事也。」（8丁表9行目）

漢字は「浦」「嶋」は筆画が連続した行書体の字形、「仙」「人」は点画が連続していない楷書体の字形、「事」「也」は筆画が連続した一筆書きの草書体の形で印刷されている。「夢想兵衛胡蝶物語」の調査範囲の漢字は、楷書体と行書体で印刷されているものが大半であり、草書体の漢字は限られた漢字にみられる。草書体の漢字と、振仮名が施されていない漢字列には重なりがある。振仮名が施されていない漢字列と書体の間に関係性があることがうかがえる。

### 3-2. 「玉石童子訓」の振仮名

本節では「玉石童子訓」を用いて同じ調査をおこなう。版面上の振仮名が施されていない漢字列を抜き出し、書体と併せて検討を加える。調査範囲は1巻から4巻まで（「巻之

一上冊」から「卷之二下冊」まで)とし、序文や「附言」等を除いた本文のみ(1巻11丁、2巻12丁、3巻14丁、4巻13丁の合計50丁)を対象とする。以下に調査結果を【表2】として載せる。紙幅の関係上、1巻の13丁裏までのデータを掲出する。

【表2】「玉石童子訓」振仮名が施されていない漢字列

巻	丁数	振仮名のない 漢字列	書体の判 断	前後の文脈	備考
巻1					
1	6 裏	四十八 (年:ねん)	楷		数字
1	6 裏	給ひ	草	定め <b>給</b> ひし事	
1	6 裏	給ひ	草	大位に即 <b>給</b> ひにき	
1	6 裏	也	草	人成りはさら <b>也</b>	
1	7 表	也	草	其後の事いへばさら <b>也</b>	
1	7 裏	也	草	最烏滸 <b>也</b>	
1	7 裏	事	草	悔しき <b>事</b> をしてけり	
1	7 裏	也	草	那身はさら <b>也</b>	
1	8 表	也	草	いへばさら <b>也</b>	
1	8 表	給ひ	草	今様を殺し <b>給</b> ひたる	
1	8 裏	也	草	暖簾次是 <b>也</b>	
1	8 裏	給へ	草	愚まず告 <b>給</b> へ	
1	9 表	也	草	這故 <b>也</b>	
1	9 表	也	草	趣真 <b>也</b> とも	
1	9 裏	四五 (名:にん)	楷		数字
1	9 裏	二十六 (回:くわい)	楷		数字、割書きの中
1	10 表	也	草	出処西國 <b>也</b> と聞しのみ	

1	10 表	七八（稔前:ねんさき）	楷		数字
1	10 表	候て	草	乾父候て	
1	10 表	候へ	草	娼婦にて候へども	
1	10 表	候はず	草	縁処は候はず	
1	10 表	候へ	草	知らず候へども	
1	10 表	候はず	草	熟客には候はず	
1	10 表	也	草	胡論也	
1	11 裏	給は	草	問せ給はゞ	
1	11 裏	也	草	宿也といふ	
1	11 裏	也	草	いへばさら也	
1	12 表	事	草	答る事始のごとく	
1	12 裏	也	草	宿也といふ	
1	12 裏	（荷三:にさう）太	楷		人名
1	12 裏	候へ	草	うち臥て候へば	
1	12 裏	候ひ	草	参り候ひぬ	
1	12 裏	也	草	里長等はさら也	
1	13 表	候	草	然（ン）候	「（ン）」は小書き
1	13 表	候ひ	草	立去らせ候ひき	
1	13 表	候はず	草	これある者には候はず	
1	13 表	候へ	草	御詮では候へども	
1	13 表	候はね	草	縁のある者に候はねども	
1	13 表	候	草	舊縁候也	
1	13 表	也	草	舊縁候也	
1	13 裏	也	草	最烏滸也	

1	13 裏	候	草	然（ン）候	「（ン）」は小書き
1	13 裏	候へば	草	船出して候へば	
1	13 裏	候	草	参り候也	
1	13 裏	也	草	参り候也	
1	13 裏	也	草	適きし者也	
1	13 裏	候ひ	草	召俱させ候ひき	

【表 2】は左から「巻」と「丁数」としてテキスト内の漢字列の所在を示した。次に「振仮名のない漢字列」を載せる。その次に「書体の判断」として、漢字列の書体を「楷」「行」「草」に分類して載せる。その後に「前後の文脈」として振仮名のない漢字列を含む箇所を引用する。

調査範囲内で振仮名が施されていない漢字列は 297 例あった。例の内訳は「事」「也」「給」「候」と、漢数字が大半を占めていた。各漢字列の例数を次に示す。「事」56 例、「也」82 例、「給」63 例、「候」65 例（これらの合計で 266 例）、漢数字が 27 例、その他が 4 例<sup>(10)</sup>であった。「玉石童子訓」で振仮名が施されていない漢字列は「夢想兵衛胡蝶物語」のそれよりも限定的であることが指摘できる。振仮名が施されていない「事」「也」「給」「候」はすべての例が「一字漢字列」であった。このことから、調査範囲内での振仮名が施されていない漢字列は、漢数字と「その他」のうち 2 例を除くと「一字漢字列」に限られていると言える。書体についても、漢数字と「その他」のうち 2 例を除くすべての例が草書体で印刷されていた。振仮名が施されていない漢字列が「草書体」の「一字漢字列」にみられる点は「夢想兵衛胡蝶物語」と共通している。また、振仮名が施されていない漢字列の内、「事」「也」「給」字は「夢想兵衛胡蝶物語」と「玉石童子訓」に共通して確認できる（なお、「候」字は「夢想兵衛胡蝶物語」調査範囲内では用いられていない）。「玉石童子訓」の版面の漢字の字形は楷書体を中心としており、それに次いで行書体と、少数の草書体の漢字がみられる。この「少数の草書体の漢字」と「振仮名が施されていない漢字列」には重なりがある。この点も「夢想兵衛胡蝶物語」と「玉石童子訓」の間で共通している。

次に、「玉石童子訓」の1巻の本文から、振仮名が施されていない漢字列を含む例を引用する。各漢字について書体の説明を加え、振仮名が施されていない漢字列について分析する。引用文では、振仮名が施されていない漢字列は下線で示す。

- 1 6丁裏7行目「大位（おほみくらみ）に即（つき）給ひにき。」
- 2 7丁裏3行目「最（いと）烏滸（をこ）也。」
- 3 8丁表6行目「主人夫婦（あるじふうふ）の驚（おどろ）き。いへばさら也。」
- 4 8丁裏11行目「今様（いまやう）を殺（ころ）し給ひたる。」
- 5 9丁裏1行目「四五名（にん）其里（そこ）に集合（つどひ）居（を）り。」
- 6 10丁表4行目「外（ほか）に縁処（よるべ）は候はず。」
- 7 12丁表9行目「又（また）答（こたふ）る事始（はじめ）のごとく。」
- 8 13丁裏5行目「船出（ふなで）して候へば。」
- 9 15丁表4行目「現（げ）に然（さ）る事も候ひき。」
- 10 15丁表5行目「人（ひと）に聞（きゝ）しこと候也。」
- 11 16丁表2行目「岳母落葉（しうとめおちは）を召（めし）よせて。問（とは）せ  
給はゞ」
- 12 18丁表5行目「愚（おろか）也里長等（さとをさら）。」
- 13 18丁裏1行目「又（また）諮（たづ）ぬべき事もなし。」

#### A「給」

「1 6丁裏7行目」の例は、「大」と「即」は楷書体、「位」は5、6画目が連続した行書体、振仮名が施されていない「給」は一筆書きの草書体で印刷されていた。調査範囲での「給」字は64例あり、その内、振仮名が施されていない例は63例あった。この例はすべて「一字漢字列」であり、前後の文と送り仮名から補助動詞「タマ（ウ）」を文字化したものと判断した。振仮名が施されていない例は、書体はすべて一筆書きの草書体の形で印刷されていた。振仮名が施された「給」は「給仕（きうじ）」（2巻27丁表9行目）<sup>(11)</sup>の1例で、書体は楷書体で印刷されていた。

#### B「候」

「6 10丁表4行目」の例は、「外」と「処」は楷書体、「縁」は糸偏の4から6画目



が連続して「一」の形となっている行書体、振仮名が施されていない「候」は「い」のような形の草書体で印刷されていた。調査範囲での「候」字は80例あり、その内、振仮名が施されていない「候」は65例あった。この例はすべて「一字漢字列」であり、前後の文から補助動詞「ソウロウ」を文字化したものと判断した。振仮名が施されていない例は、書体はすべて草書体の形で印刷されていた。振仮名が施された「候」は15例あり、すべて「二字漢字列」の「時候（ころ）」の例であった。これらの書体はすべて楷書体であった。

### C「也」

「10 15 丁表 5 行目」の例は、「人」は楷書体、「聞」は草書体で印刷されている。振仮名のない「候」と「也」はどちらも草書体で印刷されている。調査範囲での「也」字は83例あり、その内、振仮名が施されていない「也」は82例あった。この例はすべて「一字漢字列」であり、前後の文から助動詞「ナリ」を文字化したものと判断した。振仮名が施されていない例は、書体はすべて草書体の形で印刷されていた。振仮名が施された「也」は「尔也々々（しかなり／＼）」（3 卷 9 丁表 1 行目）の1例で、書体は楷書体で印刷されていた。

### D「事」

「13 18 丁裏 1 行目」の例は、「又」と「諮」は楷書体、振仮名が施されていない「事」は一筆書きの草書体で印刷されている。調査範囲での「事」字は133例あり、その内、振仮名が施されていない「事」は56例あった。この例はすべて「一字漢字列」であり、前後の文から名詞「コト」を文字化したものと判断した。振仮名が施されていない例は、書体はすべて一筆書きの形の草書体で印刷されていた。振仮名が施された「事」は77例あり、「一字漢字列」（振仮名「こと」58例、「わざ」1例）の例と「二字漢字列」（18例）の例が確認できた。「二字漢字列」の例は「這事（このこと）」（1 卷 7 丁裏 9 行目）、「一事（いちじ）」（1 卷 8 丁裏 2 行目）、「実事（まこと）」（1 卷 16 丁表 7 行目）などであり、書体は1例（草書体）を除いて楷書体で印刷されていた。

振仮名が施されていない「事」字は「一字漢字列」で「草書体」、振仮名が施された「事」字は「一字漢字列」と「二字漢字列」で「楷書体」である傾向がみられ、振仮名の有無による書体の違いが確認できる。

調査範囲内の振仮名が施されていない漢字列に共通している要素は「一字漢字列」である点と、草書体で印刷されている点であった。この二点は「夢想兵衛胡蝶物語」の例と共通している。「振仮名」の面から調査結果を整理する。調査結果から漢字列と語の対応を整理すると次のようになる。振仮名が施されていない漢字列の「給」は語「タマ（フ）」、「候」は「ソウロウ」、「也」は「ナリ」、「事」は「コト」をそれぞれ文字化したものであると判断できる。同様の判断は当該時期の「読み手」も可能であったと考える。振仮名が施されていない漢字列は、テキスト内では同じ語を文字化した箇所に確認できる。また、「事」「也」「給」字は「夢想兵衛胡蝶物語」と共通している（「候」字は「夢想兵衛胡蝶物語」の調査範囲内には使用されていなかった）。

傾向としてみられた点は、漢字列のうち「給」「候」「也」字において、振仮名が施されていない例は草書体の「一字漢字列」であり、振仮名が施されている例では「二字漢字列」である点があげられる。「給」字を例にすると、振仮名が施されていない例はすべて「一字漢字列」の「給」であり、語「タマ（フ）」を文字化した例であった。振仮名が施されている例は「給仕（きうじ）」のような「給」字を含む「二字漢字列」であった。書体についても「一字漢字列」の場合はすべて一筆書きの草書体の形であったが、「二字漢字列」は楷書体で印刷されていた。「候」字の場合も振仮名が施されていない例はすべて「一字漢字列」の「候」であり、語「ソウロウ」を文字化した例であった。振仮名が施されている例は「時候（ころ）」のような「候」字を含む「二字漢字列」であった。「也」字の場合も振仮名が施されていない例はすべて「一字漢字列」の「也」で、「ナリ」を文字化した例であった。

この「傾向」についてもう少し整理すると、振仮名が施されていない漢字列は二種類に分けられる。「一字漢字列」の場合には必ず振仮名なしで印刷されているものと、「一字漢字列」であっても振仮名がある例と施されていない例とが混在しているもの、である。前者の「必ず振仮名なし」の漢字列は「給」「候」「也」であり、後者の「混在している」ものは「事」であった。「給」「候」「也」の場合は「タマ（フ）」「ソウロウ」「ナリ」と結びついた「一字漢字列」の例には、すべて振仮名が施されていない。「事」の場合は「コト」と結びついた「一字漢字列」であっても、振仮名が施されていない例と施されている例が混在していた。このことから、「玉石童子訓」においても、特定の語と結びついている場合には、漢字列に振仮名を「施さなくてもよい」という「条件」があることがうかがえる。

ここまでの調査についてまとめる。このテキストで振仮名が施されていない漢字列は特定の語「事」「也」「給」「候」という限られた漢字列を中心にみられる。それぞれ結びついている語が定まっており、それらを文字化したときに「振仮名が施されない」状態で版面に現れる。さらに「草書体」の「かたち」となる傾向があると考えられる。語彙的な面でも、漢字列と語の結びつきが他の（振仮名が施された）漢字列より「強い」場合にこの現象が現れると説明できる。「夢想兵衛胡蝶物語」の調査でおこなった考察は「玉石童子訓」にも共通していると考ええる。また、振仮名が施されていない漢字列の傾向についても「事」「也」「給」のように「夢想兵衛胡蝶物語」と共通しているものがあり、両テキストの重なりが確認できる。

#### 4. 「振仮名」と「書体」の関係性についての分析と考察

ここまで「夢想兵衛胡蝶物語」と「玉石童子訓」の二つのテキストの振仮名が施されていない漢字列について、版面上の例をあげて整理をおこなった。本章では、二つのテキストの調査結果を対照しながら、「総ルビ」表記体の中の「振仮名が施されていない漢字列」について考察する。考察を進める上で必要な場合、先述した内容に再度ふれながら説明を加える場合がある。

「夢想兵衛胡蝶物語」と「玉石童子訓」の本文はどちらも「総ルビ」の版面である。「総ルビ」表記体については屋名池誠（2009）が「すべての漢字にルビがつく「総ルビ」（やさしい漢字にはルビがない場合もあるが、これも「総ルビ」に含める）」と説明しており、「総ルビ」と見なせる版面に「ルビがない」漢字列があることに言及した上で、このような版面も「総ルビ」に含めている。この定義にしたがうと、一部の漢字列に振仮名が施されていない「夢想兵衛胡蝶物語」と「玉石童子訓」の版面も「総ルビ」表記体とみることができる。では、「総ルビ」表記体における「振仮名が施されない漢字列」の存在からどのようなことが分かるだろうか。

「総ルビ」表記体は、テキスト全体の漢字列に振仮名を施そうとしている表記体であり、言い換えれば、テキスト全体の語形の情報をもれなく示そうとしている表記体といえる。そのような表記体の枠組みの中では「振仮名が施されない漢字列」は振仮名による語形の明示がない、特別な存在となる。「総ルビ」表記体が全体として、表記システムを保っているのだとすれば、「総ルビ」表記体において、振仮名が施されていない漢字列も、その

表記システムを破綻させていないことになる。先に「総ルビ」は「語形の情報をもれなく示そうとしている」と述べたが、その推測が正しいのであれば、振仮名を施さなくても語形の情報が示されていることになる。「総ルビ」表記体の中にある「振仮名が施されない漢字列」は、「例外」なのではなく、何らかの「条件」を満たしているためにこのようなふるまいが可能になっていると仮定して、以下整理してみる。

「条件」について考察するために、ここで「振仮名」の機能について整理しておく。今野真二（2009）から、漢字列と振仮名の関係についての記述を引用する。

日本語 X を書くのに漢字 Y を使ったとして、X と Y との結びつきがひろくみとめられていなければ、いいかえれば両者の結びつきが安定していなければ、読み手は漢字 Y をみてすぐに日本語 X を書いたものだとわからない。（中略）したがって、このように、漢字 Y と日本語 X との結びつきがつかない場合には、漢字 Y が日本語 X を書いたものであることを読み手にわかってもらうためには振仮名を付ける必要が生じる。この場合の振仮名は「読みとしての振仮名」であることになる。（P30）

ある語を漢字で書く「書き方」が「ヤマ」→「山」のように（ほぼ）一つしかないのであれば、「読み手」が迷うことはないはずで、振仮名も必要がなくなる。しかし「二つの語形」が候補として存在するのであれば、振仮名によって語形を示す必要がある。つまり振仮名が「読み＝理解」を保証していることになる。（P92）

「振仮名」の存在には漢字（漢字列）と語の結びつきの「強弱」が関係していることが主張されている。漢字列と語の「結びつき」が「強い」（漢字列に結びつく語が一つに近い状態）場合は振仮名で語形を示す必要はなくなるが、漢字列と語の「結びつき」が「弱い」（漢字列に結びつく語が複数ある状態）場合や、安定した語形の情報を「読み手」に明示的に伝えたい場合には振仮名が必要とされる。このことは当然「読み手」のリテラシーにかかわってくるが、今そのことは話題にしない。語彙面から振仮名を説明するならば、「書き手」が文字化の際に選択した語の語形を「振仮名」として漢字列に施していることになる。「総ルビ」表記体の場合、個々の漢字列と「結びついている」語の情報が、テキスト全体の漢字列に示されている状態といえる。テキスト全体の漢字列に振仮名を施すことにより、語形の情報が安定して提示される。語形の情報を最も安定した状態で読み手に提示しているのが「総ルビ」表記体であると説明できる。

では、「総ルビ」表記体のテキスト「夢想兵衛胡蝶物語」と「玉石童子訓」にみられた、「振仮名が施されない漢字列」の一群についてはどのように説明できるだろうか。振仮名

の機能面から考えると、漢字列と語の「結びつき」が「強い」場合に振仮名が施されない状態となる。語との「結びつき」が「強い」というのは、「読み手」が漢字列を見ていかなる語が書かれているのかを理解できる状態、言い換えると、漢字列を見て「結びついて」語が（ほぼ）特定できる状態を指す。「書き手」が振仮名を施さなくても「読み手」が語を確実に判断できると推測した場合には、振仮名は施されない。振仮名に関する表記体のうち、「パラルビ」の表記体のテキストであれば、個々の漢字列ごとに「振仮名を施す／施さない」という選択がされている。一方、「総ルビ」表記体は「すべての漢字列に振仮名を施す」という選択がされていると言える。

これまでに見てきたように、実際の「総ルビ」のテキストには「振仮名を施さない」という選択がされている一群の漢字列が存在する。「3」での調査により、これらの漢字列は「草書体」で印刷される傾向にあることが分かった。振仮名の機能から考えると、この「振仮名を施さない漢字列」の一群は、語との「結びつき」が他の漢字列よりも「強く」、語が特定できる状態にあることが推測できる。「総ルビ」表記体の中でこれらの漢字列には「振仮名」を施さなくてよい、という判断がされていた。言い換えれば、語との「結びつき」が「強く」、語が特定できる場合には「振仮名」を施さなくてよいという「条件」があると考えられる。これらの漢字列も「総ルビ」表記体のシステムの中で動いていることがうかがえる。

さらに「条件」について考えるため、「3-2」から「玉石童子訓」の「候」字の調査結果をとりあげる。振仮名が施されていない「候」は調査範囲内に65例あり、すべての例が補助動詞「ソウロウ」を文字化したものと判断できる例だった。書体はすべて草書体の形で印刷されていた。振仮名が施されていない全例が「ソウロウ」にあたる部分であることから、この漢字列は特定の語と「結びついて」いると言える。他の漢字列の例も、「給」は補助動詞「タマ（フ）」、「也」は助動詞「ナリ」というように、特定の語と「結びついて」いる。これらの漢字列と特定の語の「結びつき」が「強く」、「結びついて」いる語が「読み手」との間に共有されているのであれば、漢字列のみが提示されていても語を特定することができる。「候」「給」「也」のような漢字列については、文中の位置も「結びついて」いる語の判断の一助になると考えられる。また、使用頻度も高く、読み手自身のリテラシーによっても判断ができたことが想像できる。さらに、ほとんどの例が「草書体」で印刷されていることも、「結びついて」いる語の明示に関係していると思われる。「条件」の背後にはこのような要素があると考えられる。

二つのテキストの振仮名が施されていない漢字列は、漢字列の種類にも重なりが確認できる。「夢想兵衛胡蝶物語」では「事」「也」「給」「見」「思」「又」「日」「人」「心」、「玉石童子訓」では「事」「也」「給」「候」が例の大半であるが、二つのテキストでは「事」「也」「給」が共通しており、「結びついて」いる語も同じであった。異なるテキストに共通した漢字列と語の「結びつき」が確認できる。「総ルビ」表記体の中に「振仮名を施さない漢字列」の一群があること、また、「振仮名を施さない漢字列」の具体的な種類について、異なるテキストで共通性が確認できる。

振仮名が施されていない漢字列の「書体」の面についても、振仮名の有無と併せて考える。二つのテキストの振仮名が施されていない漢字列は、大半が「草書体」の形で印刷されている。版面上の「草書体」の漢字と振仮名が施されていない漢字列には重なりがあり、「書体」と「振仮名」の要素が関係している可能性が考えられる。「書体」の側から整理すると、版面上の「草書体」の漢字は「振仮名が施されていないもの」と「振仮名が施されているもの」に分けることができる。「楷書体」「行書体」の漢字は大半が「振仮名が施されているもの」であることを考えると、「草書体」の漢字のみが「振仮名の有無」による分類ができる。「振仮名が施されていない漢字列」の側から見ても、大半の例は「草書体」で印刷されている。「書体」の側、「振仮名」の側のどちらにも現象に重なりが確認でき、版面上で関連した動きをしていることが観察できる。ここまでの考察により、「漢字」に係する要素の「振仮名」と「書体」は、「総ルビ」表記体の中で動きに重なりがあることが確認できた。

「振仮名が施されない漢字列」の一群について、「総ルビ」表記体の面だけではなく、ここからは「漢字」の面についても考察する。テキストの漢字列には語との「結びつき」が「強い」一群が存在し、「総ルビ」表記体の中では、「振仮名」が施されない「草書体」という特徴をもって現れている。この一群の漢字列は、他の漢字列とは異なるものとして位置付けることができると考える。書き手と読み手の視点に立つと、これらの「漢字」は、「結びついて」いる「語」を特定できるために「振仮名」が必要とされていなかったと推測できる。テキストの文中に「草書体」の「候」字が出てきたとき、読み手はこれが「ソウロウ」であることを振仮名なしに特定できた。「草書体」の「候」、「草書体」の「給」というように、ある「漢字（列）」に「振仮名」と「書体」の要素が重なって現れたとき、版面上の「漢字（列）」の中にある「振仮名が施されない草書体」の一群を抽出することができる。これらの一群は他の漢字列とは異なる動きをしていることが観察できるため、

仮に「草漢字」と呼ぶことにする。「草漢字」は整版印刷のテキストで、「総ルビ」という表記体という条件下にあるテキストで観察することができた。「漢字」の中には、語との「結びつき」が強い「草漢字」の一群があり、これらの一群は「語」との「結びつき」が強く、「草漢字」自体が表語的（表音的）な機能を持っているのに近い状態であると考えられる<sup>(12)</sup>。「草漢字」は語形（発音形）を示している状態に近いことから、漢字列の中でも「仮名」に近い位置付けを考えることができる。

「草漢字」とする漢字に関して、時代は下るが、佐藤栄作（2005）は夏目漱石の『坊ちゃん』の自筆原稿の分析の中で、特定の語に対して「草書化」が進んだ漢字が用いられている例があることを指摘している。「敬語の接頭辞の「お」「ご」には徹底して簡略化した「御」を用いて」おり、他にも「事」字の場合は「極めて草書化の進んだもの」と「楷書体に近い」ものがみられ、形式名詞の「こと」は簡略形で書かれる傾向にあることや、作中の「候文」の文面において「申候」の「候」字や「被下度候」に極端な草書化がみられることも指摘しており、本章の「草漢字」、「事」「候」などと重なりがある。「草漢字」とする漢字は、近代においても「手書き」のテキストの中に観察できることがうかがえる。

「草漢字」を表語的（表音的）機能から「仮名」に近い位置付けを考えられる、と述べたことに関して、今野真二（2020）は、佐藤栄作（2010）による平仮名を「漢字の草書体をさらに簡略化した一種の「極草」」とする見方を示し、そうみなすことによって、「漢字の「草書体」と「平仮名」との間に積極的に連続性を「みる」ことになる」と述べている。平仮名を「極草」とみなす見方をとると、「草漢字」（草書体）は「かたち」の上でも「極草」に近い文字として位置付けられる。語との「結びつき」の面から見ても、「草漢字」と「仮名」の間には「連続性」があると見なすことができる。佐藤栄作（2010）は「江戸の寺子屋で子どもたちが学ぶことはまず手習いであり、それは、仮名に続いて「真（楷書体）」ではなく「草（行草書体）」の漢字を書くことであったとされる。庶民が関わる漢字は、第一義的には「真」ではなく「草（行草書体）」であった」と説明している。具体的な「草漢字」の例を見ても、この一群は使用頻度の高い漢字列であることが想像でき、そのような漢字列が「草書体」で実現していることは、当時のリテラシーとも関係していると想像できる。ひとつのテキストの中の漢字列がどのような「かたち」で実現しているかに注目することは、江戸時代の表記・漢字の内実を知るために必要な観点であると考えられる。

「草漢字」の存在は、「総ルビ」の定義にも関係してくる。本章では「総ルビ」の定義を「語形の情報をもれなく示そうとしている表記体」と仮定して論を進めてきた。本章で扱った「夢想兵衛胡蝶物語」と「玉石童子訓」のテキストでは、ほとんどの漢字列は「振仮名」によって「結びついて」いる語の語形が示されている。言い換えれば、語形の情報が「振仮名」によって明示されている。「総ルビ」の定義を「すべての漢字列に振仮名が施された表記体」とした場合、「振仮名が施されない漢字列」は定義に沿わない「例外」として処理するほかない。しかし、調査で見てきたように、「振仮名が施されない漢字列」は語との「結びつき」が強い一群であり、「草書体」という「かたち」の上での要素を持ってテキストに現れていた。振仮名が施された漢字列とは異なる特徴を持ち、異なる動きをしているのが確認できることから、これらの漢字列も「総ルビ」表記体の「あり方」に沿っていると考えるのが妥当である。この一群に上記の傾向が見られることから「草漢字」と本章では呼んでいるが、「草漢字」は語との「結びつき」に揺れがなく、「草書体」の「かたち」や文中の位置なども手掛かりとして確実に特定できる漢字列であるために「振仮名」が施されていない。そのように考えると、「草漢字」は語形が明示されているのと同等の状態であったと推測することができる。この表記体では、漢字列は「振仮名」によって語形を明示しており、「草漢字」はそれ自体が語形を明示している。したがって、「総ルビ」表記体の内実は「振仮名」の有無という事柄ではなく、「振仮名」の機能である「語形の明示」にあると考えられる。この表記体は、本章で仮定したように「語形をもれなく明示している表記体」とであると説明することができる。

## おわりに

本章では「総ルビ」表記体にみられる「振仮名が施されない漢字列」に注目し、「夢想兵衛胡蝶物語」と「玉石童子訓」のテキストの分析を通して「総ルビ」のテキストの定義と、「漢字」における草書体の漢字の位置づけについて考察した。

本章でおこなった考察をまとめる。これまで「総ルビ」と呼ばれる表記体は、テキスト全体の漢字列に振仮名を施す表記体と説明されてきた。このことを「振仮名」の機能にもとづいて言い換えると、すべての漢字列に振仮名を施すことによって語形の情報を最も安定した状態で提示している表記体であると説明できる。しかし、「総ルビ」のテキスト「夢想兵衛胡蝶物語」と「玉石童子訓」を調査すると、少数の「振仮名が施されない漢字列」



があることが分かった。両テキストの「振仮名が施されない漢字列」は特定の語と「結びついて」おり、「草書体」の「かたち」で印刷されているという特徴がある。この特徴から、語との「結びつき」の「強さ」や「草書体」の「かたち」などを手掛かりとして「読み手」が語を判断できることを「条件」に、「総ルビ」表記体のシステム上で「振仮名を施さない」というふるまいが可能になっていると考察した。これらの漢字列は他の（振仮名が施された）漢字列とは異なる動きをしていることが観察できる。「総ルビ」表記体を「振仮名」の機能からとらえることで、よりテキストの実態に沿った説明が可能になると考える。また、「漢字」の面から整理すると、テキストの漢字列には語との「結びつき」が「強い」一群が存在していることが分かる。この一群は「草書体」の「かたち」で「振仮名が施されない」という特徴を持つことから、「総ルビ」テキストの他の漢字列とは異なる位置付けが考えられる。本章ではこれらの「漢字（列）」を仮に「草漢字」とした。「草漢字」は「語」との「結びつき」の強さから、「漢字（列）」自体が表語的（表音的）な機能を持つと考えられる。また「草書体」の「かたち」で現れることから、「漢字（列）」の中では「仮名」に近い位置付けが考えられる。表記体の中の「漢字」の性質が「書体」による「かたち」の違いに現れていることを明らかにした。

## 注

(1) 今回の調査で使用した「夢想兵衛胡蝶物語」と「玉石童子訓」のテキストの閲覧には早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」を使用した。〈<https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>〉（2021年9月12日最終閲覧）

(2) 屋名池誠（2009）「『総ルビ』の時代—日本語表記の十九世紀」（『文学』10巻6号、岩波書店）にも記述がある。

(3) 「注1」に同じ。

(4) 一つの版面に複数の書体がみられることについて、今野真二（2017）は為永春水の人情本『春色田家の花』の版面の分析を通して「楷書に近い形、行書、草書に近い形が一つの文献の版面にすべてみえている」ことを指摘し、「一つの文献で使われている漢字字体（のバリエーション）については、あまり注目されないけれども、楷書一辺倒、草書一辺倒で書かれた文献は案外とないのであって、よく使う漢字の形は省略されやすいということをもとにして、漢字字体もひろがりをもって使われているということには留意しておきたい」としている。

(5) 「夢想兵衛胡蝶物語」の振仮名が施されていない漢字列のうち、調査範囲内では例が少数だったものを参考として載せる。「大」4例、「正月」3例、「今」2例、「女」2例、「子」2例、「申」2例、「川」「小」「何」「共」<sup>ㄣ</sup>「水」「月」「目」「上」「所」「上上吉(人名)」がすべて1例であった。「正月」と「上上吉」以外の例はすべて「一字漢字列」であった。例が少数であるため本文の分析からは外したが、「振仮名が施されていない漢字列」が「一字漢字列」にみられる点は、本文で分析対象とした例と共通している。ちなみに、「共」<sup>ㄣ</sup> (1巻26丁表6行目)は草書体の字形で、濁点が施されている。漢字列とみられる草書体の「共」字が「仮名」のように扱われているように観察される。

(6) 「助数詞」は今回の調査から外しているため、「助数詞」として用いられている「人」の漢字列は除いた例数である。

(7) 振仮名が施されない漢字列と書体の関係性をみるにあたり、「又」と「人」はどちらも総画数が2画と少ないため、崩された字形にはなりにくいと思われる。また、「日」の例は、調査範囲では1巻22丁表と2巻8丁表裏に集中して現れており、他の漢字列のような調査範囲の全体に確認できる例とは異なる出現状況となっている。このような理由から「又」「人」「日」に関しては他の漢字列とは異なる動きをしていると考えられる。

(8) 2巻16丁表2行目の1例は「みな同じ」の「み」にあたる箇所であり、平仮名の字母として「見」が用いられているとも考えられる例である。この「見」字は漢字「見」と接近している箇所に現れている(「[...] などを見てもみな同じ」)。なお、調査範囲で平仮名の「見」字が使用されているのはこの1例のみであった。漢字の草書体として用いられている「見」字と「かたち」は同じである。調査範囲での振仮名が施されていない「見」字はこの1例以外はすべて動詞「見る」に該当する箇所に使用されている。振仮名が施されず、一筆書きにちかい草書体で印刷されている「見」字の場合、テキストの「書き手」が「漢字」として使用したのか、「平仮名」として使用したのかを観察するのは難しい。「振仮名が施されず一筆書きにちかい草書体の漢字の“見”」と「平仮名の“見”」は「かたち」の上では判別ができないほど接近していると思われる。

(9) 版面の漢字に複数の書体の字形が混在している現象については、「注4」に引用したように今野真二(2017)が人情本『春色田家の花』の版面上に複数の書体の形の漢字が見られることを指摘している。複数の書体がテキストの版面上に印刷されていることは「夢想兵衛胡蝶物語」の版面のみに限らず、他のテキストにも広く確認できる現象である。近世期の版本テキストの表記体の内実を明らかにするためには、テキスト内での漢字と仮名(平仮名・片仮名)、さらに漢字の書体(楷行草)のレベルでの調査も必要になると考える。

(10) 「玉石童子訓」での振仮名が施されていない漢字列のうち、調査範囲内では例が少数だったものは、

「(荷三:にさう)太」(楷)(1巻12丁裏)、「(両:もろ)手」(草)(1巻16丁表9行目)、「玉へ」(楷)(2巻27丁表8行目)、「来ず」(草)(3巻1丁裏6行目)の4例であった。「玉へ」の例は「タマ(フ)」(給ふ)の語と結びついている例である。

(11) 今回の調査で扱う「玉石童子訓」テキストは2巻の本文に印字された丁数が1巻からの続き(19丁から)となっている。本章でもテキストに印字された丁数にしたがって表示する。

(12) 振仮名が施されていない漢字列に「共 ヽ」(「夢想兵衛胡蝶物語」1巻26丁表6行目)という例がある。「共」は草書体で印刷されている。本来「漢字」であるはずの「共」字に濁点が施されている状態であり、これは「ドモ」という語を示していると考えられる。「漢字」が「仮名」のように扱われている例であると思われるが、調査範囲内では1例のみであるため、ここでは例の紹介にとどめる。

#### 引用・参考文献(五十音順)

今野真二(2008)『消された漱石 明治の日本語の探し方』笠間書院

今野真二(2009)『振仮名の歴史』集英社

今野真二(2017)『漢字とカタカナとひらがな 日本語表記の歴史』平凡社

今野真二(2020)「草の字体」『清泉女子大学人文科学研究紀要』41

佐藤栄作(2005)「『坊っちゃん』原稿に現れた漱石の手書きルールについての覚え書き」

『国語文字史の研究』8 和泉書院

佐藤栄作(2010)「草の字体へ」『論集』6

佐藤栄作(2013)『見えない文字と見える文字 文字のかたちを考える』三省堂

多賀糸絵美(2014)「「漢字列」のとらえ方—明治期の資料を緒として—」『言語教育研究』6

屋名池誠(2009)「「総ルビ」の時代—日本語表記の十九世紀」『文学』10-6

江守賢治『楷行草総覧』NHK出版 1981年

『日本古典文学大辞典』岩波書店 1984年

## おわりに

本論文は江戸時代後期から明治時代初期の資料をもとにして、当該時期の「表記体」と「漢字」の内実を明らかにすることを目的として各章で調査をおこなった。

「Ⅰ」「Ⅱ」「Ⅲ」では『[校正／増補] 漢語字類』の漢字の分析と考察を通して、当該時期の漢字のあり方を探ることを目的としてきた。「Ⅰ『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』における相違点について」では、まず『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の書誌と構成などを整理した上で、「項目」の調査と「索引の注記」の調査をおこなった。「項目」の調査については『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の関係性という観点から両辞書の項目の対照をおこなった。対照調査からは、「増補項目」と「削除項目」の存在や、「共通項目」にも相違点があることが明らかとなった。「索引の注記」の調査では、両辞書の索引に設けられた「注記」の存在について指摘し、辞書内での記述や具体例をあげながら「注記」を概観した。本章での作業は『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』それぞれの「注記」の内容について整理し、「Ⅱ」「Ⅲ」の調査につなげるものであった。『漢語字類』と『[校正／増補] 漢語字類』の索引の注記は、辞書の利用者が調べたい漢語の「項目」にたどり着くための手立てとして掲載していると考えられるため、利用者が辞書を引くときに思い浮かべる可能性があった「かたち」が注記に掲載されていると考えることができる。そこには当該時期の「言語生活」で接することのあった漢字の「かたち」が反映されていると推測できる。また、「頭字の漢字」と「注記に載せられている漢字」には、編者の漢字の「かたち」の認識が表れている。これらの漢字は、編者が「異なる「かたち」である」という認識をした上で、「同シ」や「俗」などの判断が載せられていると考えられる。「頭字の漢字」と「注記に載せられている漢字」にはどのような部分に異なりがあるのか調査することにより、当該時期におけるいわゆる「異体字」の認識を明らかにすることができる考えた。

「Ⅰ」でおこなった「注記」の整理をふまえて、「Ⅱ『[校正／増補] 漢語字類』における漢字字形のバリエーションについて」では『[校正／増補] 漢語字類』の「目次」欄上の「同」の組に注目した。まず「同」の漢字の組の例をあげて、どのような漢字が「組」とされているのかを考察した。考察では、漢字について「基本点画からなる「パーツ」の組み合わせによって構成されている」という「みかた」に従い、「目次」欄上の組の漢字を「パーツ」の構成から分類することを試みた。「同」の漢字の組には、漢字を構成する「パーツ」

の異なりや、「パーツ」の位置の違い（動用字）として説明できるものが多くあったことから、漢字を「パーツ」の組み合わせとしてとらえる観点は有効であると考えられる。

次に、「目次」欄上の組と、「目次」匡郭内の頭字、「辞書部分」項目群の「行草部分」の頭字を通して、辞書内での漢字の「かたち」について調査をした。「目次」欄上の組は2～5字形があげられているが、そのうちの1字形が「目次」匡郭内の頭字が立てられている。「目次」部分の漢字は「頭字の1字形」と「それ以外の複数字形」に分けることができる。「目次」部分は「辞書部分」の項目にたどり着くことを目的としているため、頭字に選択された1字形は「頭字ではない複数字形」よりも「標準的・一般的」であった可能性が高い。また、「辞書部分」の「行草部分」においては、「目次」部分にはあげられていない字形が確認できたことから、「辞書部分」には字形のバリエーションを類聚して提示する目的があることを指摘した。『[校正／増補] 漢語字類』内部の漢字を整理すると、「辞書部分」の「行草部分」にのみ見られる「かたち」がある一方で、「目次」欄上の組、匡郭内の頭字、「辞書部分」の「行草部分」の三か所にみられる「かたち」も確認できる。そして後者の方が「標準的・一般的」な「かたち」であった可能性がある。

「Ⅲ『[校正／増補] 漢語字類』「目次」欄上の組の漢字字形の位置付け－『太政官日誌』との対照を通して－」では、「Ⅱ」で指摘した『[校正／増補] 漢語字類』内部での漢字の「かたち」のあり方が、同時期の「非辞書体資料」である『太政官日誌』にどのように現れるかを調査した。調査では、版木の異なる二種類の『太政官日誌』のテキストを用いて、『[校正／増補] 漢語字類』の「目次」欄上の組にあげられた「かたち」の出現状況を調べた。『太政官日誌』を対照資料に選択した理由には、政府の刊行物である点、また、版木の異なるテキストが存在し、同箇所を対照することにより「異体字」の確定ができるという点、条件が揃っているテキストであることがあげられる。結果は組の「頭字の1字形」（「A」群とする）と「それ以外の字形」（「B」群とする）のどちらも『太政官日誌』のテキストに確認できた。組の「A」群と「B」群のどちらの「かたち」も『太政官日誌』に見られることから、同時期の「非辞書体資料」にも使用が確認できる「異体字」関係の複数の字形が『[校正／増補] 漢語字類』の組に挙げられていることが言える。その一方で、調査範囲全体の傾向としては「B」群の字形よりも「A」群の字形の方が多く用いられていると分かった。「A」群については「Ⅱ」の考察で「標準的・一般的」な「かたち」であった可能性を指摘したが、『太政官日誌』においても出現傾向に差があることが確認できる。整理すると、『[校正／増補] 漢語字類』の「頭字の1字形」（「A」群）と「それ以外の字形」（「B」

群)は『太政官日誌』でも出現傾向に差があることから、「A」群の字形がより「標準的・一般的な字形」と認識されていた可能性がある。「標準的・一般的な字形」である「A」群の周辺を取りまくように「非標準的な字形」である「B」群が存在している、という構造が考えられると結論付けた。

「Ⅳ」「Ⅴ」では江戸時代後期の版本の「玉石童子訓」と「夢想兵衛胡蝶物語」のテキストの「振仮名」と漢字の「書体」について分析し、当該時期の表記体について考察を試みた。「Ⅳ『玉石童子訓』の書体と振仮名について—江戸期整版本の表記体考察のために—」では「総ルビ」表記体を選択しているテキスト「玉石童子訓」の版面に、少数の振仮名が施されていない漢字列がみられることを指摘した上で、どのような漢字列に振仮名が施されていないのかを調査した。調査結果は、振仮名が施されていない漢字列は「事」「也」「給」「候」がほとんどの例を占めており、すべて草書体の「かたち」で実現していた。このことから、振仮名が施されていない漢字列と書体の間に関係性がうかがえることを指摘した。次に「振仮名」の有無と書体の関係性を明らかにするため、版面上の「事」字を例として実現形の調査をおこなった。その結果、「事」字は楷書体の場合には振仮名が施されており、草書体の場合には振仮名は施されない傾向があることが確認できた。振仮名が施されていない草書体の「事」は、すべて名詞「コト」と結びついていると判断できる例であった。振仮名が施されていない「事」は草書体の「かたち」で印刷されており、振仮名のない「事」と振仮名のある「事」とは版面上で異なる動きをしていることを指摘した。振仮名が施されていない漢字列は特定の語と結びついていることが観察でき、「草書体」の書体で印刷されている。このテキストの調査からは振仮名の有無と書体に関係性が観察できると指摘した。また、これらの漢字列は「総ルビ」表記体の中にあって他の漢字列とは異なるふるまいをしている「特別な漢字列」であり、振仮名の機能から考えると、漢字列と語の結びつきが他の漢字列よりも安定しており、表語的な機能を持っているのに近い状態であることがうかがえる。「書体」の面からは、「楷書体」と「行書体」の漢字と「平仮名」を用いる表記体の中に、特定の「草書体」の漢字が見られる、という状態が「玉石童子訓」の版面であると説明した。「草書体」の漢字は当該時期の文書や文献における使用実績と関係していると推測できると述べた。

「Ⅴ「総ルビ」表記体における書体と振仮名の機能について—『夢想兵衛胡蝶物語』と『玉石童子訓』を通して—」では「Ⅳ」で「玉石童子訓」におこなった調査と考察をふまえて、他のテキストも対照しながら考察を深めることを試みた。前章で扱った「玉石童子

訓」とともに、近い時期に刊行された「夢想兵衛胡蝶物語」を取り上げ、「総ルビ」表記体の中にみられる「振仮名が施されていない漢字列」を調査した。「玉石童子訓」と「夢想兵衛胡蝶物語」はどちらの版面にも振仮名が施されていない漢字列が確認でき、草書体の「かたち」で印刷される傾向にあることが分かった。また、漢字の種類にも重なりがあった（「事」「也」「給」）。「総ルビ」表記体は「すべての漢字列に振仮名を施す」という選択がされていると考えられるが、その中に「振仮名を施さない漢字列」の一群がある、ということになる。「振仮名」の機能面から考えると、語形との「結びつき」が「強い」場合には漢字列に振仮名が施されない状態となる。「振仮名を施さない漢字列」の一群は、「結びつき」が他の漢字列よりも「強く」、語形が特定できる状態にあることが推測できる。そのような漢字列には振仮名を施さなくてもよいという「条件」があると考えられ、これらの一群も「総ルビ」表記体のシステムの中で動いていることがうかがえる。「振仮名が施されない漢字列」の一群を「漢字」の面から考察すると、語形との「結びつき」が「強い」一群は、「総ルビ」表記体の中では「振仮名」が施されない「草書体」という特徴をもって現れる。これらの一群は他の（振仮名が施された）漢字列とは異なる動きをしていることが観察できるため、仮に「草漢字」と呼ぶこととした。「草漢字」は「語（発音形）」との「結びつき」が強く、「草漢字」自体が表語的（表音的）な機能を持っているのに近い状態であると考察した。このような機能をもつ漢字列が「草書体」の「かたち」で版面上に現れているといえる。「草漢字」の存在をふまえた上で、「総ルビ」表記体の定義について再考した。「振仮名」と「草漢字」のもつ機能から説明すると、この表記体は「振仮名」によって語形を明示した漢字列と、それ自体が語形を明示している「草漢字」があることになる。この表記体の本質は「振仮名」の有無ではなく、「振仮名」の機能である「語形の明示」にあると考えられ、「語形をもれなく明示している表記体」とであると説明できる、と結論付けた。

「Ⅰ」「Ⅱ」「Ⅲ」と「Ⅳ」「Ⅴ」では漢字と表記体についての調査と考察をおこなってきた。今後の課題として、各章で観察対象としてきた資料にみられる、「書体」に関する事象について今後の展開として考えられることを以下に述べておく。

「Ⅳ」「Ⅴ」で調査してきたように、「玉石童子訓」と「夢想兵衛胡蝶物語」の版面には複数の書体の漢字が確認できる。「玉石童子訓」は版面上の漢字に「楷書体」の割合が多いテキスト、「夢想兵衛胡蝶物語」は「楷書体」と「行書体」の割合が多いテキストとみることができるが、版面上に「楷書体」「行書体」と少数の「草書体」の漢字が混在している点は両テキストに共通している。このことから、両テキストの版面は単一の書体によって

実現しているのではなく、おそらくは語を単位として書体の選択が異なっていることが観察される。版面上の「書体」の選択に関わる要素として、漢字列の表している「語」が考えられる。テキスト全体にどのような書体を使うかという選択と、語ごとにはたらく選択との、(少なくとも)二つの表記体選択がはたらいっていると考えられる。「語ごとにはたらく選択」の一例として「玉石童子訓」の版面から「候」字を例にすると、同じ「候」字であっても語「ソウロウ」を表す場合には「草書体」の「かたち」で現れているが、語「ジコウ」を表す場合には「楷書体」の「かたち」で印刷されている。この「候」字の例からは、漢字列と「結びついて」いる語が「書体」の選択に関係していると推測することができる。また、「V」では、両テキストの「草書体」の「かたち」で印刷されている漢字列のうち、「総ルビ」の版面上で振仮名が施されない漢字列の一群を「草漢字」と呼び、考察をおこなった。「草漢字」は語との「結びつき」が他の(振仮名が施された)漢字列よりも「強く」、表語的な機能をもつ一群であり、「総ルビ」表記体の中では他の漢字列とは異なる動きをしている。この一群は、両テキストの中で「草書体」の「かたち」で実現している。言い換えると、表語的な機能をもつ漢字列の一群は、「草書体」という「かたち」の上での特徴をもって版面上に実現しており、「書体」が漢字列の持つ表語的な機能を示す一要素となっていると考えられる。版面上で漢字列が「草書体」の「かたち」で実現している背景には、漢字列や語と関係した複雑な「構造」があることがうかがえる。

「Ⅰ」「Ⅱ」「Ⅲ」で扱った『漢語字類』と『[校正／増補]漢語字類』の「書体」についてもみていく。『漢語字類』と『[校正／増補]漢語字類』の「辞書部分」の項目には「行草部分」に見出しの漢字列が掲示されているが、この部分には「楷書体」よりの「かたち」や、「草書体」よりの「かたち」などの「書体差」とみられるバリエーションや、また、異なるパーツからなる「異体字」も確認できる。特に『[校正／増補]漢語字類』の「行草部分」は頭字が(『漢語字類』での「|」の記号ではなく)漢字表記されているため、同じ頭字で複数の項目がある場合には、版面に頭字の「かたち」のバリエーションが一覧のように並べられている状態となっている。両辞書の項目内には「行草部分」のほかに楷書体の「かたち」も載せられている(「楷書部分」)。本論文では便宜上「行草部分」「楷書部分」と呼んでいるが、両辞書は「書体差」だけではなく「異体字」も含めた、漢字の「かたち」のバリエーションを項目に掲示することを目的としていると考えられる。

「書体差」と「異体字」に関して、『漢語字類』の「索引」の注記の中で「書体」に関わる「異体字」を取り上げて、漢字の「かたち」について考察する。「Ⅰ」では『漢語字類』



「索引」の注記に、漢字の全体、または一部の点画が連続した「草書体」の「かたち」をしたものがあることを指摘した。「索引」の「正」「企」「武」にはそれぞれ〔正 A〕〔企 A〕〔武 A〕が「同シ」として注記にあげられており、〔正 A〕は点画が連続した「草書体」の「かたち」、〔企 A〕〔武 A〕は「止」のパーツのみ「草書体」の「かたち」をしている。この注記のうち、〔企 A〕と〔武 A〕は漢字を構成する「止」のパーツのみが「草書体」の「かたち」をしており、点画が連続した「草書体」のパーツと、点画が連続していない「楷書体」のパーツが混合している（ように見える）「かたち」となっている。「同シ」にあげられた〔企 A〕〔武 A〕は、頭字の「企」「武」とは異なる「かたち」であり、漢字を構成するパーツに「書体差」のある「かたち」が、頭字とは異なる「かたち」と判断されていると説明できる。この例からは、当該時期の「異体字」の認識の中に「書体差」による漢字の「かたち」の違いも含まれていた可能性があることが推測できる。また、漢字の全体がひとつの「書体」で実現しているのではなく、「書体」が漢字を構成するパーツのレベルで動いている例も観察できる。『漢語字類』の「索引」や「注記」については、当時の「言語生活」で接することのあった「かたち」が辞書の索引部分に反映されていると考えられる。これらの例からは、当該時期の「異体字」のような漢字の「かたち」の認識に「書体」がどのように関係しているのかを調査していく必要があると考える。

漢字を構成するパーツにおける「書体」の混合については、「IV」と「V」で扱った「玉石童子訓」や「夢想兵衛胡蝶物語」のテキストにも確認できる。ひとつの漢字の中に、点画が連続している「草書体」のパーツと、連続していない「楷書体」のパーツが組み合わさっている「かたち」の例が確認できる。「玉石童子訓」にみられる例として、「手」の例があげられる。テキストの「手」字と「手」をパーツに含んだ漢字「拿」「掌」「撃」「摩」の「かたち」をみてる。調査範囲内の「手」字は大半の例が点画が連続した一筆書きの「草書体」の「かたち」で印刷されている。「手」をパーツに含んでいる漢字の場合も「手」のパーツは同様に「草書体」の「かたち」となっている。1 巻 14 丁裏 9 行目の「拿」は下部の「手」は「草書体」の「かたち」、上部の「合」は点画が連続していない「楷書体」の「かたち」をしている。2 巻 30 丁裏 2 行目の「掌」、3 巻 4 丁表 3 行目の「撃」、2 巻 26 丁表 1 行目の「摩」も下部の「手」は「草書体」、上部は「楷書体」の「かたち」となっていた。「手」をパーツにもつ漢字においても、点画の連続した「草書体」の「かたち」で実現していることが確認できる。ひとつの漢字の中に複数の「書体」のパーツが混合しており、これらの漢字においては、「書体」が漢字を構成するパーツのレベルで動いているとみるこ

とができる。「玉石童子訓」版面の「書体」は「楷書体」を中心としているが、「行書体」と少数の「草書体」の漢字もみられ、ひとつの版面上に複数の「書体」の漢字の「かたち」が混在しているといえる。さらに、漢字の内部においても複数の「書体」のパーツで構成されている例が確認できた。

ここまで、本論文で扱った資料にみられる「書体」に関して今後の展開として考えられる事象について整理と考察をおこなった。本論文で観察対象としている資料において「書体」は、従来考えられてきたような「構造」とは異なる、より複雑な「構造」となっている可能性が考えられる。これらの事象がひろく一般的なものであるかどうかは、より詳細な調査をする必要があるため、今後の課題、展開として考えることができる。